

545
26



始



112246



- 操糸駒引錢
- 霞帶締如月
- 陸月深仲町
- 兄弟丸蒔繪文箱
- 松に藤屋襠雛形
- 艶合奏
- 結縁日浮世雛形

全三冊
全六冊
全六冊
全六冊
全四冊
全六冊
全四冊



緒言

火災水害等の天災の爲めに、昔から我が國に傳つてゐる和本類は、年と共に漸次減少し、月と共に愈々高價になる計りで、中には、奈何に大金を投じても容易に手に入れられないものが多くなつて來た。それ故、今のうちに之れを活字にして置くことは、我が國文學保存の爲めは素より、いづれの方面から見ても、最も急務であると思ふ。

私は、徳川時代後期の文藝書類が好きで、十數年前から、機會あるごとに集めてゐるが、其中でも、特に努めて聚めたものの一種、人情本の刊行會を企てることとなつた。今更云ふまでもなく、西鶴一派の八文字屋の小説が、徳川中世期の華であつたやうに、この爲永春水一派の人情本は、徳川後期に於ける小説の華で、爲めに、江戸の紙價を騰からしめ、貸本屋をして、應接に違な

らしめた程の勢力のあつたものである。一部の人は、西鶴の高尙を賞へて、春水の卑俗を嘗るけれども、これは西鶴にもあることで、唯時代の相異と、それに伴ふ文語の差異とで、讀者に與ふる感じに、強弱があるだけではないかと思ふ。そして、既に浮世草紙とか、人情本とか云ふ其名が現はしてゐるやうに、總じて八文字屋物類は、一段離れた處で、批評的に浮世の様々な事件を観察する態度で書いてゐるのに、人情本の方は、自ら浮世の中に飛び込んで觀賞的に寫實してゐる。それ故に、人情本は、人情の機微を寫すにも、彼れに比して、實際真に迫つてゐる。ある人は、この點を甚く攻撃するが、洒落本が遊里を寫生したやうに、春水等は此人情の機微を寫すことに努力したので、人情本といふ語も生れた位なのだから、これは當然の事で、唯其一部を除けば、我が國に於ける小説中、最も能く人情の機微を穿ち得た寫實小説の嚆矢であつと思ふ。殊に私の最も遺憾に思つてゐることは、世の人の多くから、人情本と云ふも

のが、徒に若い男女の劣情を綴つたもののみであると、誤解されてゐる點である。泥中からも白蓮は咲く。濁水中にも鯉魚は住んでゐる。泥中の白蓮は、泥中におき濁水中の鯉魚は、必ず濁水中に棄て、置かねばならぬと云ふ必要はない。汚泥を洗ひ浄めて玉盤に移し、濁水から洗ひ去つて、清水に放つて賞するの例は、常に私共が、他の百般事に於て爲しつゝある處である。ひとり人情本のみが、この恩典に浴し得ないと云ふ筈はないと思ふ。人情本にも、仁義忠孝禮智信はある。元來是等は理窟でなく情のものであるから、その或るものに到つては、遙かに人情本の方が多くを有してゐる。例へば俗の語で云ふ、義理とか、人情とか、意氣地とか云ふものは、他のものの、遠く及ばない處である。唯、馬琴の仁義忠孝や、默阿彌の勸善懲惡などのやうに、露骨にこの文字を用ゐて、強請してゐないだけである。これは前にも云つた通り、馬琴などは一段離れて、批評的態度で書いてゐるし、春水等は、自らその渦中に投じて、

觀賞的態度で寫實してゐるからである。之れを要するに、不幸にして誤解され、泥中に放棄されてゐる白蓮、濁水中に潜んでゐる鯉魚を、この儘にして置けば、彼等は遂に世に出でずして、火災水害等の天災などで、その儘永遠に葬られて畢ふであらう。根絶して了つた時には、もう騒いでも及ばない。八文字屋物の今日騒がれてゐるのも夫れが爲めである。私は、この點に於いても、どうかして、その豫防をしたいと、永年心掛けてゐたのである。どうか、私のこの微志を諒として下さることを、切にお願ひして止まない次第である。

殊に茲に特筆すべきは、大方顧問並びに賛助員諸氏の、本刊行會に就いて、陰に陽に、多大の援助を賜はつた事である。爰に深く感謝の意を表すると共に、その芳名を掲げて、永く之れを記念したいと思ふ。

大正四年四月七日

村上静人識

解題

奉尋淡島由來

香羽 結縁日浮世雛形

全四冊

瀬川路考作 淡齋英泉畫

發行年代

文政丁亥 十年新春

本書は例の音羽丹七の情話を綴つたもので、全四冊より成り、作者は當時賣出しの女形俳優瀬川路考で、畫家は淡齋英泉とある。しかし本書に限らず、此當時は俳優のこの種の著作が頗る多く刊行された。が、何れも皆その俳優自身の執筆したものではなく、他の作者に代筆せしめたものである。これは恰も今日の化粧品類の廣告などに、俳優の談話を記載すると同じ筆法で、當時の俳優は、この代表作の小説に依つて、舞臺以外に自個最良の顧客を結びつけ置き、発行者はまた、當時の人氣役者の名に依つて、その書を多く賣つて利を得たものである。故にこの當時は、市川團十郎、中村芝翫、澤村田之助、(曙山)、阪東秀佳、尾上梅幸、岩井彙三郎、瀬川路考、岩井紫若、阪東三津五郎、市村家橋などの、その頃の人氣役者

は、盛にこの小説を刊行した。そしてその代作者も大方定まつてをつたもので、今その頃の代作者として、専ら之れに従事してゐた作者を掲げて見ると、花笠文京（作代のみならず）、松亭金水（人情本作者）、貞齋泉晁（浮世繪師）、溪齋英泉（浮世繪師にして著作名を一筆庵可候といふ）、五柳亭徳升（代作頗る多し）松島半二（狂言作者）、樂亭西馬（著作家なれ共殆ど代作のみ）、爲永春水（人情本作者）などで、團十郎の代作は殆ど徳升一人でなし、梅幸は主として文京、秀佳は半二、路考は可候、泉晁、西馬などであつた。

而して本書も無論路考の自作ではなく、想必に本書に挿繪した畫家にして作者を兼ねた溪齋英泉こと、一筆庵可候の代筆であらう。奥附に濱村助技合、淨書谷金川とある。谷金川は後世人情本作家として名を成した、淨書家松亭金水の師匠である。

本書の刊行は文政丁亥十年の新春であるから、瀬川路考二十六歳、溪齋英泉三十六歳の時の作で、發行所は、芝神明前三島町、圓壽堂丸屋甚八である。因みに路考は五代目瀬川菊之丞と成つた俳優で、幼名を多門と云つた。故に俗に彼れを多門路考とも呼ぶ。別號を東籬園、俳名を路考と云つた。

五色潮來

阿妻八郎兵衛
阿傘六郎兵衛

艶合奏

全六冊

式亭三馬作
歌川國貞畫

發行年代

文化十四年
丁丑孟春

本書は、彼の阿妻八郎兵衛の情話に、阿傘六郎兵衛を絡せて綴つたもので、全六冊より成り、作者は式亭三馬、畫家は歌川國貞である。式亭三馬は姓を菊地、名は泰輔、通稱を太助といひ、別號を本町庵、四季山人、洒落齋、遊戯堂、哆囉哩樓などと號して、黄表紙、合巻物、殊に滑稽本、洒落本の大家にして、洒落本の續き物は彼れの作『船頭深話』、合巻物の名稱は、彼れの作『雷太郎強惡物語』に始まると謂はれてゐる。また歌川國貞は豊國門下の出藍の譽れある畫家であつた。發行年代は文化丁丑十四年孟春で、發行所は、通油町の鶴喜事、仙鶴堂、鶴屋喜右衛門である。文化三年までは専ら黄表紙が流行してゐたが翌四年より、黄表紙は殆ど絶滅に近きまで衰微して、合巻物専ら刊行せられ、遂には全く黄表紙絶えて、合巻物のみとなつた。三馬自筆の日記文中、文化三年の條に、『翌年よりさうし問屋残らず合巻となりて云々。』とあり、また本書下巻の見返しにも、『傲歌舞伎袖看板、乍憚

口上』として、御禮の口上を述べ、諸各様方御存じの如く、合巻繪草紙と申す續き物は、十ヶ年前式亭三馬工夫を以て新作仕候處、殊に御意に叶ひ、大當り致し候以來、年々打續き新作致し來り候段、難有仕合に奉存候云々』としてある通り、本書は合巻なるものが生れてから、十年一と昔を経た最も隆盛時に出たもので、時に三馬は四十三歳、國貞は三十二歳であつた。本書は彼れの合巻物中、傑作の一つである。

夕霧 松に藤屋襦雛形 全四冊 墨春亭梅磨作 歌川景松畫 發行年代 天保丙申七年新泰

本書は淨瑠璃芝居に名高い例の夕霧伊左衛門の情話を綴つたもので、全四冊より成り、作者は墨春亭梅磨、畫家は歌川景松である。墨春亭梅磨は墨川亭雪麿の門下である。姓を小山、名を平吉といひ、後平七と稱した。別號を春廼屋、梅園、梅舎春鳥なども號した。歌川景松は、歌川國貞門下の貞景に教へをうけ、この頃よりして慶應年間にかけての人である。別號を潮春亭と稱した。發行年代は、天保丙申七年で、發行所は京橋南傳馬町一丁目の葛吉事、紅英堂、葛屋吉藏である。

采女さま 兄弟丸時繪文箱 全六冊 墨川亭雪磨作 香蝶樓國貞畫 發行年代 天保辛丑二年孟春

本書はお菊采女の物語にして、全六冊より成り、作者は墨川亭雪磨、畫家は香蝶樓國貞である。墨川亭雪磨は、姓を田中、通稱を善三郎(または源治に作る)と云ひ、初め歌麿門下の菊麿に就いて繪を學んだが、性頗る著作を好み、遂に文政の初年から更に戯作に従事して終生筆を擱かなかつたと謂はれてゐる。本書は雪磨四十五歳、國貞五十六歳の時の作で、その發行所は、よし町親仁橋角の地本錦繪問屋、榮久堂こと山本平吉である。

三勝半七 睦月深仲町 全六冊 鶴屋南北作 歌川國貞畫 貞齋泉晁畫 發行年代 天保甲午五年新泰

本書は例の三勝半七の情話に小勝平三を絡せた物語で、全六冊より成り、作者は五世鶴屋南北、畫家は歌川國貞及び貞齋泉晁である。五世鶴屋南北は、四世南北の孫にして、通稱を孫太郎といひ、可祐と號した。彼れは元來阪東彦十郎と呼びし俳優であつたが、後狂言作者と成つて、勝依藏と稱した。更に後年直江屋重兵衛と改めて、深川仲町に娼樓を營んだ。

また國貞は前に屢々出てゐるから、之れを省いて、貞齋泉晁は、通稱を吉藏と稱する浮世繪師で、殊に屢々他人の代作をした畫師である。本書その二冊目までは國貞の挿繪に成り、三冊目より最後までは泉晁の筆に成つてゐる。本書の發行所は、芝神明前三島町の和泉屋市兵衛で、天保五年の刊行に成り、南北三十九歳、國貞四十九歳の時の作である。

源次郎

霞帶締如月

全六冊

五柳亭徳升作
歌川國安畫

發行年代

天保四年
癸巳新春

本書はお高源次郎の情話に源吾を絡せた因果物語で、全六冊より成り、作者は五柳亭徳升、畫家は歌川國安である。五柳亭徳升は、通稱を豊島屋甚助といひ、鎌倉河岸に住して、紙商であつた。性放蕩にして久しく浮浪した。文政五年頃講釋師典山の弟子となつた事がある。また文政十一年の春、名弘め會を催して、自個の名を弘めた。最も多く市川團十郎の代作小説を作つた。嘉永六年七月、六十一歳で歿した。また歌川國安は、歌川豊國門下の秀才であつた。本書は天保癸巳四年新春の發行で、發行所は例の仙鶴堂である。そして、本書は徳升四十一歳、國安四十歳の時の作である。

遊女初瀬
里次郎

操絲駒引錢

全三冊

葛葉山人正二作
勝川春亭畫

發行年代

文化乙亥十
二年新春

本書は、遊女初瀬と里次郎との情話に、その仇討物語を含せ綴つたもので、全三冊より成り、葛葉山人正二の筆に、勝川春亭の繪を添へたものである。葛葉山人は通稱を篠田金治といひ、後師號を繼いで三世並木五瓶と改めた狂言作者である。別號を萬壽亭、鳳凰軒と號し、文政二年七月二日歿した。本書は文化乙亥十二年の刊行で、正二四十八歳、春亭四十六歳の時の作である。本書は之れを一名『三寶荒神二見仇討』とも稱する。發行所は、繪草紙問屋、丸屋文右衛門である。

暴風後の淋しき雨の日

校訂者 村上静人 識

大正六年十月十日



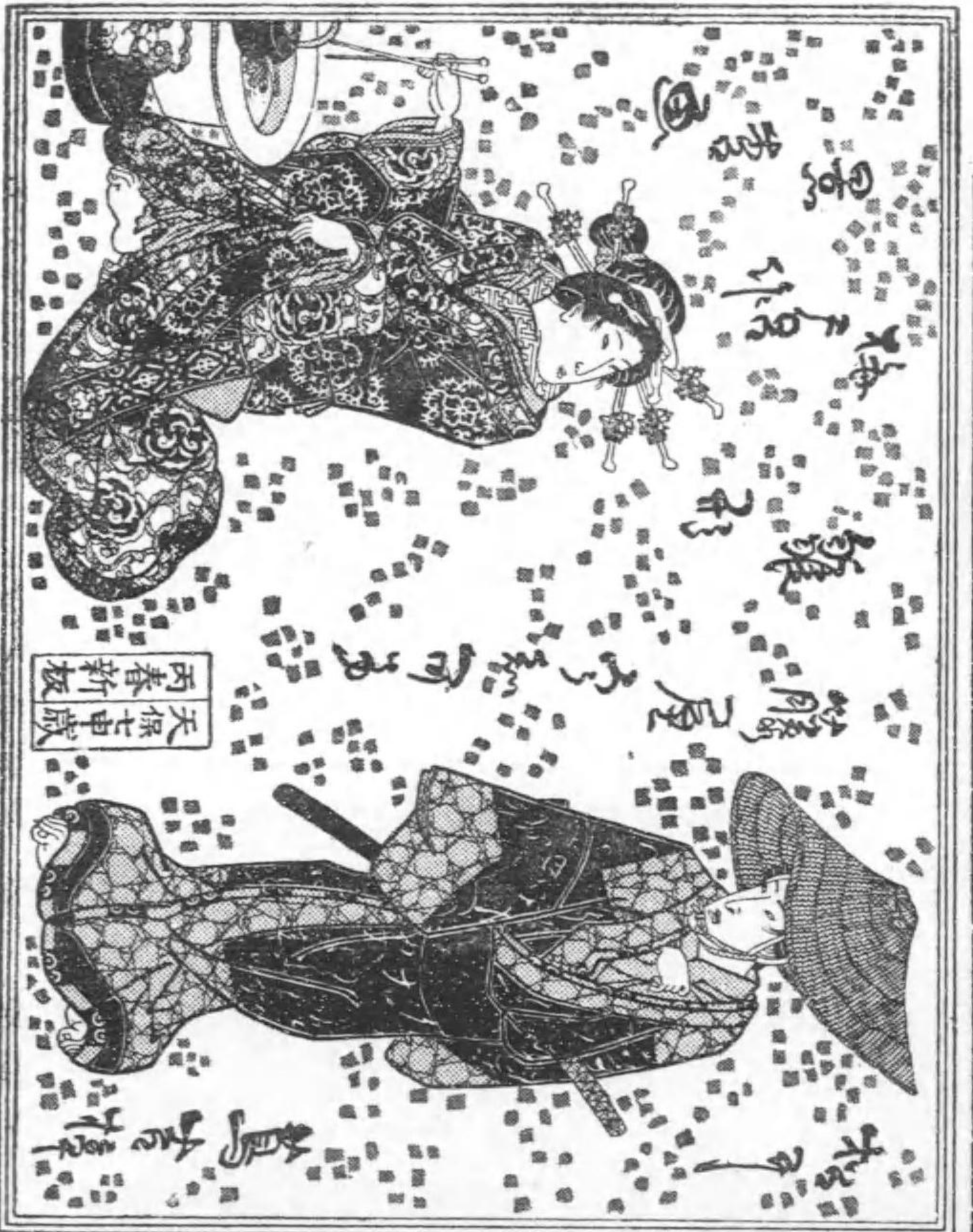
(一) 繪ま口まの山形 舞臺 世も浮き 日も 縁を 結ぶ 羽子





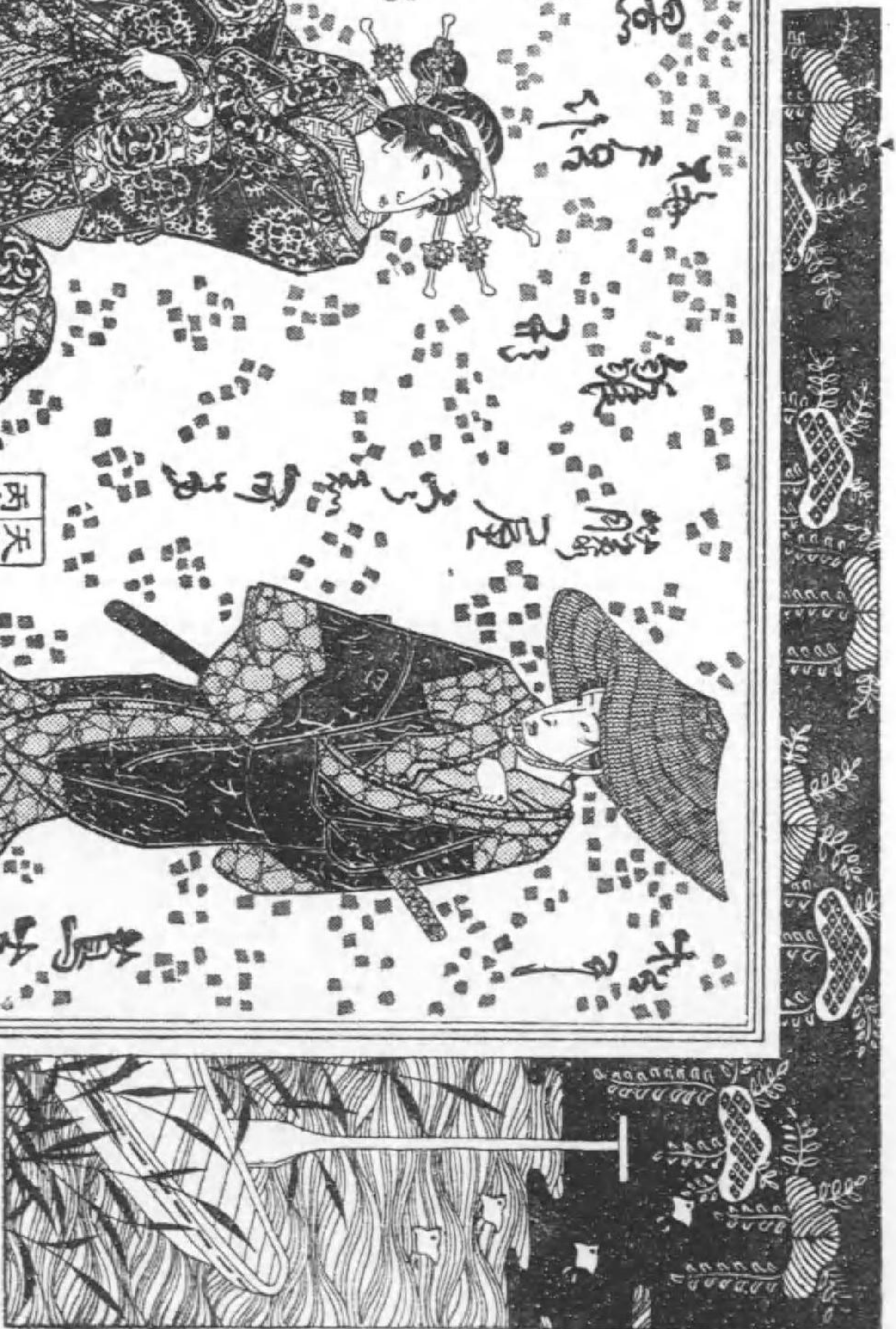
(二) 繪の口舌のし奏 [合の艶の八世阿彌 阿彌大兵衛]





天保七申歲
丙春新板

繪ミ口ミの「形姿雛」權屋、藤寄に松ヲ醫斷左伊





繪み口金のし箱に文を繪お時壽丸を弟を兄とまよ女采り
と菊るを





三平七郎 月夜深仲の口給





(一) 繪口合の月を如帯と霞帯 貞貞大前





(二) 繪口舌のL月如き締と帯の霞高節次郎





丹音
七羽
結縁むすぶ日ひ浮う世よ雛形ひながた
全四册

瀬川路考作
漢齋英泉畫

結縁日浮世雛形

東籬園路考述

丹七 おとば あしち **結縁日浮世雛形** あなただてまつるあは あなただてまつるあは **序**

亂匪らんはい三自さん天降てん一生いつ三自さん婦人ふじん一と、また是れ情慾じやうよくのみならず、多くは痴愚ちぐの情扮じやうより起れり。

こは其の旨むねを云ふにはあらねど、雲井くもゐに紛まふ調姫てうひめが、興津おきつ白波しらなみ旅宿たびしゆく、伊達いたての與作よさくと重しげの井いが、戀女こひにやぼう房ぼうの夫婦めとづ連れん、百貫ひやくくわん馬追うまおひの、坂さかは照てる々々鈴鹿すずかは雲介くもすけ、彼かの八藏はちざうが發起ほつきの腹切はらきり、善ぜんと惡あくとの染分そめわけ手綱たなづな、桂政けいせい殺ころしの愁歎しうたんから、小萬こまんが菩提ぼだいに入間家いりまけより、關せきの地藏ぢざうを修造しうざうせし、驛路えきぢうの鈴すずの音ねに聞きく、籬かきが本の嬰兒ゐごが、由來ゆらいを語る自然生じねん三吉さんきち、再び廊らうで淡島あはしまんき縁起えんぎ、繫つなぐ利生りしやうの縁日えんにちは、丹七たんしち音羽ねはが身みの上うへを、尋ね奉たづねたまる主君しゆくんの行方ゆくへ、忠義ちゆうぎに扮やつせし修行者しゆぎやうが、花街さかの意氣地いきぢの張はり供養くやう、浮世袋うきぶくろに雛形ひながたを綴つむり合あせて二十枚まい、全部ぜんぶ四冊しさつに括くり猿さる、積善せきぜんの家いへには必ず餘慶よけいある、此この半はん丁ぢやうの埋種うめくさに、序じゆならぬ事ことを序じゆらしく誌しるす。



文政十年丁亥春新版

東籬園路考述

香羽
丹七

結縁日浮世雛形

（奉尋淡島之由来）

前篇

瀬川路考作
溪齋英泉畫

發端

坂は照々鈴鹿は曇る。間の土山雨が降る。其の雨の日も雪の夜も、裸百貫雲助ども、興津の宿の棒鼻に、焚火をしながら、

■「コレ、三よ。先刻に代官所の役人が、布令流したお尋者、捕つて出せは褒美の金は、望み次第やげな。汝りやア夫れを聞いたか。」

▲「イヤ、聞かぬが、何様云ふ事だ。」と、言ふを引取る馬士八藏、

八藏「エ、汝等は勾配の鈍い奴等だ。彼りやア一體、此様云ふ譯よ。近江國の由留木判官さまの姫君、調姫と云ふ美しいお姫様、鎌倉梅ヶ谷の、此花左近之助とやら云ふ人の所へ、

婚姻の御約束。所が何様した譯か、婚禮が否ぢやと言はッしやるを、家來の中に悪い奴があつて、謀叛の様に言立てられ、是非なくお姫様の首を、討つて出さねばならぬと云ふ仕儀になつたを、伊達與惣兵衛と云ふ家老が計らひで、奴が息子の與作と云ふ奴が、重の井と云ふ女と乳繰りやつてけつかつたを幸ひ、表向は二人共繋り首と云ひ立て、お姫さまの供をさせて、駈落させたとの風聞。夫れで此の八藏も、久しく上方に居たけれど、宜い仕事してやらうと、故郷近くへ歸つて來たのだ。其の與作と云ふ奴は、奴、何様も利いてゐる野郎、なかく汝等が手には行かぬ程に、コレ何事も俺が差圖を受けて、可怪な奴と見たならば、引捕へてな。コレ、合點か。褒美の金は山分けた。前祝に其處等で、一盃遣らかさうかえ。」

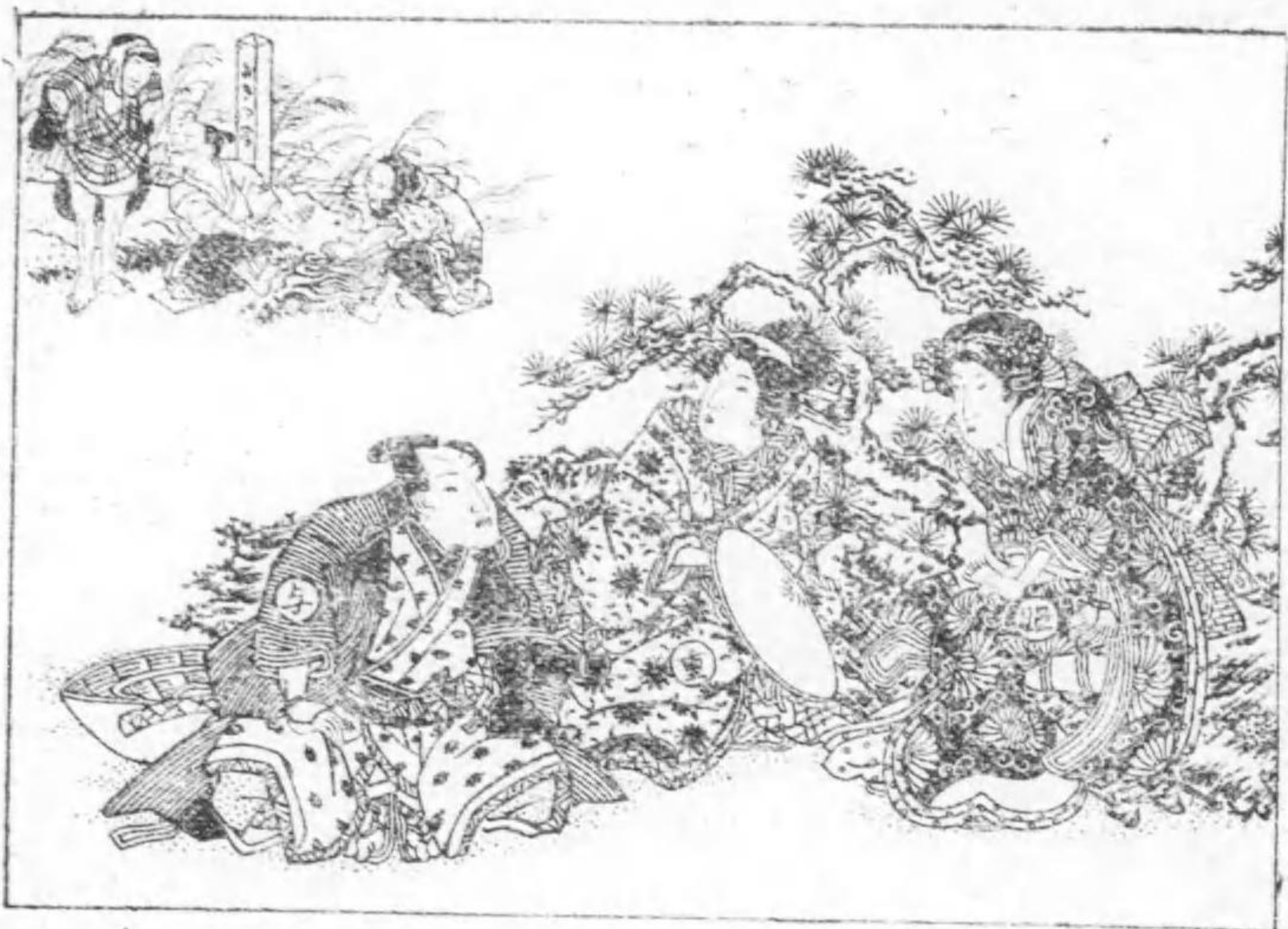
■「オ、夫れが宜からう。悪い事には、抜け目のない八藏、コレ、褒美は必ず我等二人へ山分けたぞよ。」

八藏「ハテ、呷い奴等だ。さア、來い〜。」と、打連れて、村の酒屋へ急ぎ行く。

行く末の道を思へば長濱の、眞砂を旅の憂き数と、涙に沈む姫君を、慰め申す與作、重の井、

與作「さア、お姫様、此處が興津の宿と申す。確か小萬が所は、此の近所と聞きました。是れから宿へ入りますと、人目が多ふ御座りますれば、笠でお顔を隠さねばなりません故、まづ此處で、少しの間御休息。ソレ、重の井、其の堤へなりと、お腰を掛けさせ申しやい喃。」と、思ひ合うたる女夫仲、知己をも厭はぬ宮仕へ。姫君は涙に暮れ、

調姫「イヤ、喃、妾がよしなき我が儘より、科もない其方衆にまで、様々の苦勞をさすと思へば、一層潔う自害して、其の首を此花家へ送つたなら、父上のお疑ひも晴れ、其方衆の難儀もないと云ふもの。何卒左様して給ひ喃」と、涙差ぐみ給ふにぞ、與作は之を聞きも敢ず、與作「是れはしたり、夫りや何を被仰ります。貴女のお命捨てる程なら、與惣兵衛も何苦勞致しませうぞ。何卒お助け申したさ。其の中には事も濟みませうと存じます。小萬と申す女は、以前御館にお勤め申して、女ながらも忠義な者。尋ね参つて斯うくと、話せば請け引くは定の者。少しの中お身を、隠してお在でなされば、やがて世間も晴れませう。些の間の御辛



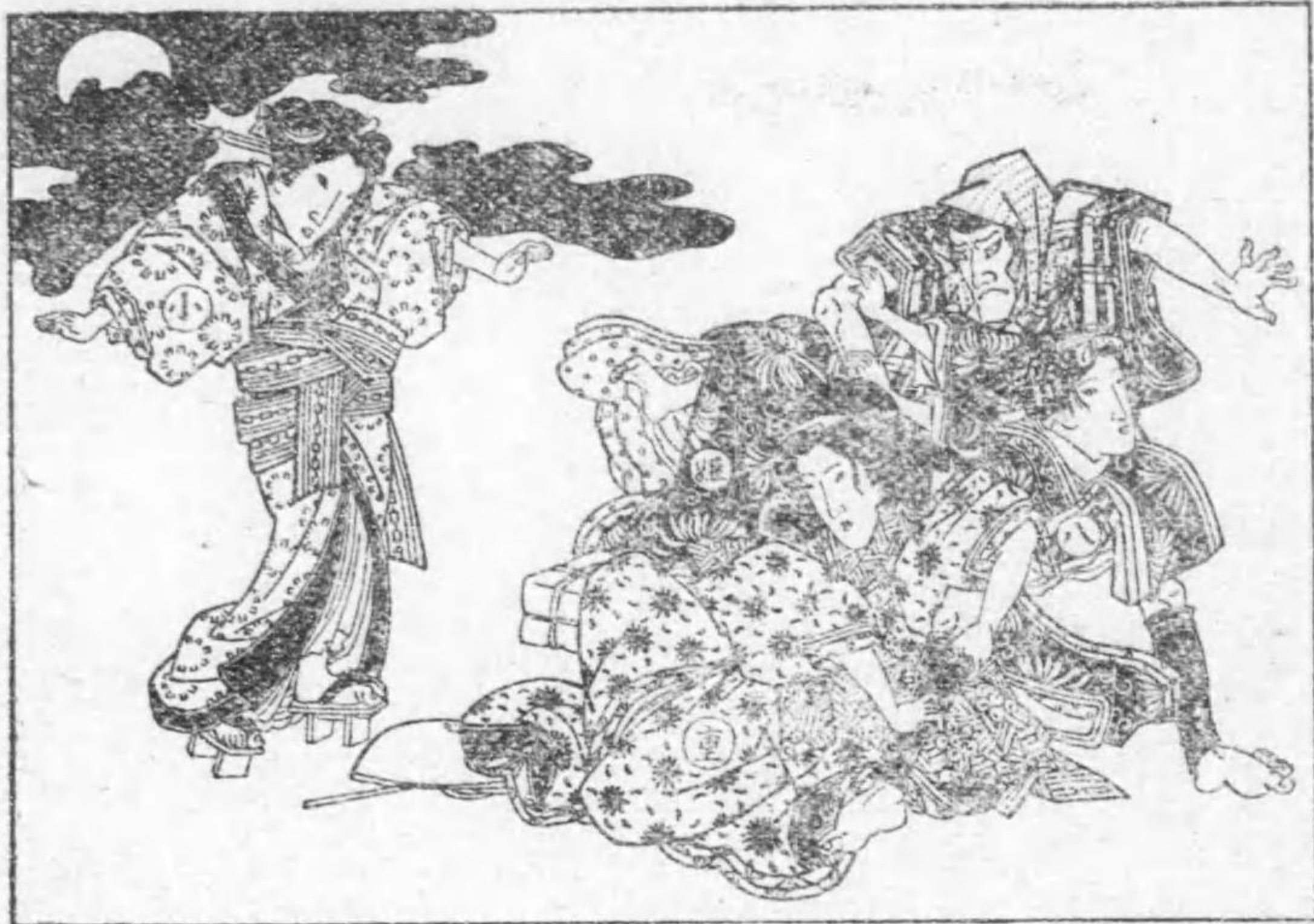
抱で御座ります。夫れは左様と、今後の宿で、噂を聞けば、此處等邊りは人形を以て、姫君様を嚴しい詮議と、巷の風説、夫れも矢張佞人讒者の所爲と知れど、是非もなき世の有様。サ、人目に掛らぬ其の中に、些も早く。」と、行かんとする折しも、歸る以前の雲助、夫れと見るより、すつと出で、見れば銘々酔ひ泥酔れ居たり。

雲助「旅のお侍、馬に乗つて下さりませ。」と、言はれて此方は柔かに、與作「イヤ、此の方は、馬は嫌ひぢや。」雲助「其様なら駕籠に乗つて下さりませ。」與作「駕籠も入用ない。」

雲助『駕籠も馬も入らないなら、其の荷物を俺等が、寄つて持つて行くべい。』
與作『シテ、此の荷物を何處へ持つて失せうと言ふのだ。』
雲助『知れた事だわ。代官所へ、配符の廻つたお尋ねの、調姫と見た故に、連れて行つて、俺等が褒美の金に暖まるのよ。』と、手込に掛る雲助共。與作も今は是れまでと、刀にそり打ち、柄に手を掛け、

與作『ムウ、扱は、汝等は強盗よな。武士に向つて無禮の過言。手は見せぬぞ。』と引抜いて、脅しかくれど、痺まぬ三人、各自に得物引提げて、打つて蒐れば此方にも、
與作『一人も許さぬ。さア、來い。』と、手練の鋒堪り兼ね、皆散りくぐりに雲助は、風に吹かるゝ如くにて、逃げるを與作は逃さじと、何處までもと追うて行く。

重の井『長追ひさんすな、此方の人。怪我ばしあつては。』と、夕暮時、はや宵闇となりければ、面を隠して八藏が、取つて返して姫君を、引抱へて走り行かんとする程に、其の手に纏る重の井が、左様はさせじと争へども、甲斐なき女、蹴倒して、行くをやらじと引合ひ焦燥る。姫はひやいさ恐しさ、心は爰に残れども、引立てられて引かれ行く。向へ來掛る一人の女、雲



間を出づる月影に、顔見合せて、

女『ヤア、其方は。』と、言ふを打消し八藏が、手をもぎ放して一散に、何處ともなく伴ひ行く。後に重の井、八藏が、挑み争ふ其の折節、姫の身の上进心なく、立歸り來る與作が影、見るより八藏引外し、月に叢雲掛るを幸ひ、脇道傳ひに逃げ去りぬ。與作重の井は、互に聲掛け、

重の井『姫君様を暗紛れに、確か女が何者か、手籠にされし道筋は。』

與作『其様なら此處をお連れ申して、行きしとな。確か向の細道傳ひ。遠くは行くまい。オオ、左様ぢや。』と、二人は追つ掛け走り行く。

爰こゝに興津川おきつがはの邊ほとりに、小萬こまんと云へる女おんなあり。其そのの以前いぜんは江州えしゅうなる、由留木家ゆりぎけに事つかへけるが、兩りゆう親共しんどもに身み亡なり、相續さうぞくすべき者ものなく、故郷こきやうへ歸かへり八藏やうざうと云ふ者ものを婚むこに取り、男子おのこ一人ひとり儲たくわけしかど、盲目めくらみとなりければ、三味線さんみせんを教おしへ育て、桂馬けいま佐さとぞ、呼よびける。斯かる不具ふぐの子こなりければ、いとど不惑ふふくに思おもひ、貧まうしき中なかにも慈いづくしみけるが、今年ことしは早はや十五ご歳さいになりぬ。又また小萬こまんが夫おとこ、八藏やうざうは、生なまれ村邪惡むらよこしまにて、常つねに身持みもち悪わるしく、日々ひび、酒色しゆしきにのみ耽ふけりて、善よからぬ業わざの多おほかりけるが、七年なな以前いぜん女房子によぼうこを捨すて置き、遂つひに家出いへでしたりければ、後あとは母子おやこが只ただ二人ふたり、いとど貧まうしく暮くらしける。

扱さて八藏やうざうは様々さまざまに、身みを持もちなし、遂つひに雲助馬士くもすけうまかたとなり、上方かみかたへ上のぼりしと雖いへも、我わがが家やへは絶たえて音信おとづれもせざりけり。或ある日ひ小萬こまんが家いへに、村むらの歩あるき走人はしりきた來きたり、門口かどぐちよりどツちよ聲こゑ、走人はしりきた「コレコレ、桂馬けいま佐さ殿だん、母御おふくろは在宅うちか。急用きふよう々々々々。」と、言いふに驚おどろき立た出でる小萬こまん、小萬こまん「デモ、仰山おやさんな。何なんの用ようで御座ござります。」

走人はしりきた「イヤ、外ほかでもない。豫おぼてお布令ふれのあつた、江州えしゅう由留木家ゆりぎけのお姫様ひめさま、調姫てんぎめとやら、昨日きのふ此處こゝ等邊あたり、見付みつけた者ものがあるとの風聞ふうぶん。此方こゝさんも以前いぜん屋鋪やしきぼう奉公ほうこうをしたとのと、何様なんな縁引えんひきで、尋たづねて來くまいものでもない故ゆゑ、捕とらへたなら訴人そにんさツしやい。褒美ほうびの金かねで桂馬けいま佐さどのも官位くわんゐを取り、そのめだかとか檢校けんぎやうとか、云いふものにもなつたなら、浮うむぢやアアる。布令ふれて歩行あるくも、念ねんの爲ためぢや。」と、言いへば、

小萬こまん「何なんのまア、其そのの様なやうなお姫様ひめさまが、此こん様なやう汚うい家うちへ御座ござる様なやう、掛合かひあひがあらうぞえ。夫それにまた見當みあたつたと云いうてからが、訴うたへて其そのの様なやう非道ひだうな金かねで、檢校けんぎやう勾當こうどうにして、榮耀えいよう榮華えいけさす氣きはない。只ただ一人ひとりの子こが、此この様なやう目めの見みえぬ様やうになると云いふも、家出いへでさんした八藏はちざうどのが、邪惡よこしま非道ひだうをさんす故ゆゑ、天道てんたう様のやう罰ばちぢやと思おもへば、怨うらみもない因果いんぐわの報むかい。此方こゝさん方も村役むらやくなれば、御布令おふれはあつても、構かまへて其そのの金貫かねぬらはう、褒美ほうびに預あづけらう杯なごと、思おもはしやんすな。捨すてて置おいても、惡人あくにんなりや、天道てんたう様さまが見通みとおしぢや。」と、言いひ諭さとされて、走人はしりきた「夫それも左様さやうぢや。したが、俺わしが布令ふれるも、又また商賣しやうばい。ドレ、隣村りんむらへ、布令ふれて來きませう。」と、足早あしはやにこそ歸かへり行ゆく。後あとに桂馬けいま佐さ最前さいぜんより、復習ふくしゆ掛かりし鳥邊山とりべやま、引ひき掛かけ三味線さんみせん傍そばへ置おき、

母の側へ探り寄り、

桂馬佐「モシ、母さま、お前は何故其の様に、隔てて下さります。聞えませぬ。」と、見えぬ目に涙流せば、小萬も差し寄り、

小萬「是れはしたり、何言やるぞい喃。日頃から孝行にして給る其方。殊に便は外になし。何の隔てて宜いものか。」と、言へば桂馬佐、頭振り、

桂馬佐「イエ、左様では御座りませぬ。今言うて来た彼のお布令、昨夜お前が連れて戻らしゃつた、女中は、京の叔母さまの娘ぢやとは許り。大方其の調姫様で御座りませう。」

小萬「何のまア、何様して。」

桂馬佐「イエ、夫りや聞えませぬ。常々お前の御話に聞く、御恩になつた、御主人様のお姫さま、お前が大恩受けた御主人なりや、私の爲にも矢張御主人。假令目界は見えずとも、

明かして斯様と言うて下され。聞えませぬ。」と、咽び泣。實に尤もと、小萬も涙に暮れけるが、

小萬「コレ、堪忍してたも。私が其方に隠したは、過失ぢや。言やる通り、昨夜お連れ申した

は御主人様。不思議に御目に掛つたも、主従縁の盡きぬ所とやら。お庇護ひ申してある。必ず氣貧く思うてくりやんなや。」

桂馬佐「何の氣貧く思ひませう。血を分けた子にも、隠すが忠義とやら、私が女であるならば、お身代りにもなり、何卒忠義がして、お前の御恩が送りたいと思へど、男の事なれば、心に任せぬ此の身の上。夫れに付けても、父様は、七年以前から家出なされ、お行方知れず。若し、お心が改つたなら、相談もあらうのに。」

小萬「イヤ、何様して。父様の心が改らうぞ。此の様な時居られては、邪魔になるとも助力にはならぬぞえ。ホンニ、今其方が弾いた三味線の歌は、アノ鳥邊山、

へ親の許さぬ妻定、添ふに添はれぬ義理合故、遂に屍を鳥邊野に晒す。

と、云ふ歌。何と其方は哀れぢやと思やるか。」と、裏問ふ言葉に、

桂馬佐「イエ、私は哀れとは思ひませぬ。手前勝手の色戀に、道ならぬ事して忍ぶとは、親より貰うた大切の身體、我が物の様に失ふは、不孝と云はうか、罰當りと云はうか、大罪人。夫れぢやに由つて死ぬるのは、其身の罰とは云ふもの、人の命は量られませぬ。何

時死ぬことであらうやら、此の様に不具な身で、餘所の親より御恩の深い、母様に御恩も送らず、若し死んだなら、私や何の様に悲しからうと思へば、一層胸が一杯になります。』と、涙拭へば小萬は差寄り、背撫で擦りて、

小萬「何のまア、孝行な其方、天道様の御恵にて、末は樂な身の上になるであらう程に、其の様なこと思つてくりやんな。此處は人足も遠い片田舎、滅多に何事も知れる事ぢやない故、私も其方も、お姫様をお隠匿ひ申し遂げれば、忠義も届き、善いことをもあらうぞえ。夫れは左様と、お姫様も嘸ぞまア、御窮屈であらう。私も昨夜から、ほつと氣草臥れがして、お姫様のお氣晴しに、酒買つて来て上げようと思ふ程に、其方は宅に留守してたも。若し誰ぞ來ても、必ず言ふまいぞや。オ、もう暮れたさうな。ドレ、一寸一走り行つて來るか。』と、徳利提げ四方を見廻し、氣配りして出で行く折しも、黄昏の鐘聲々として響きける。

丹七 香羽 結縁日浮世雛形 前篇終

丹七 香羽 結縁日浮世雛形 後篇

瀬川路考作
溪齋英泉畫

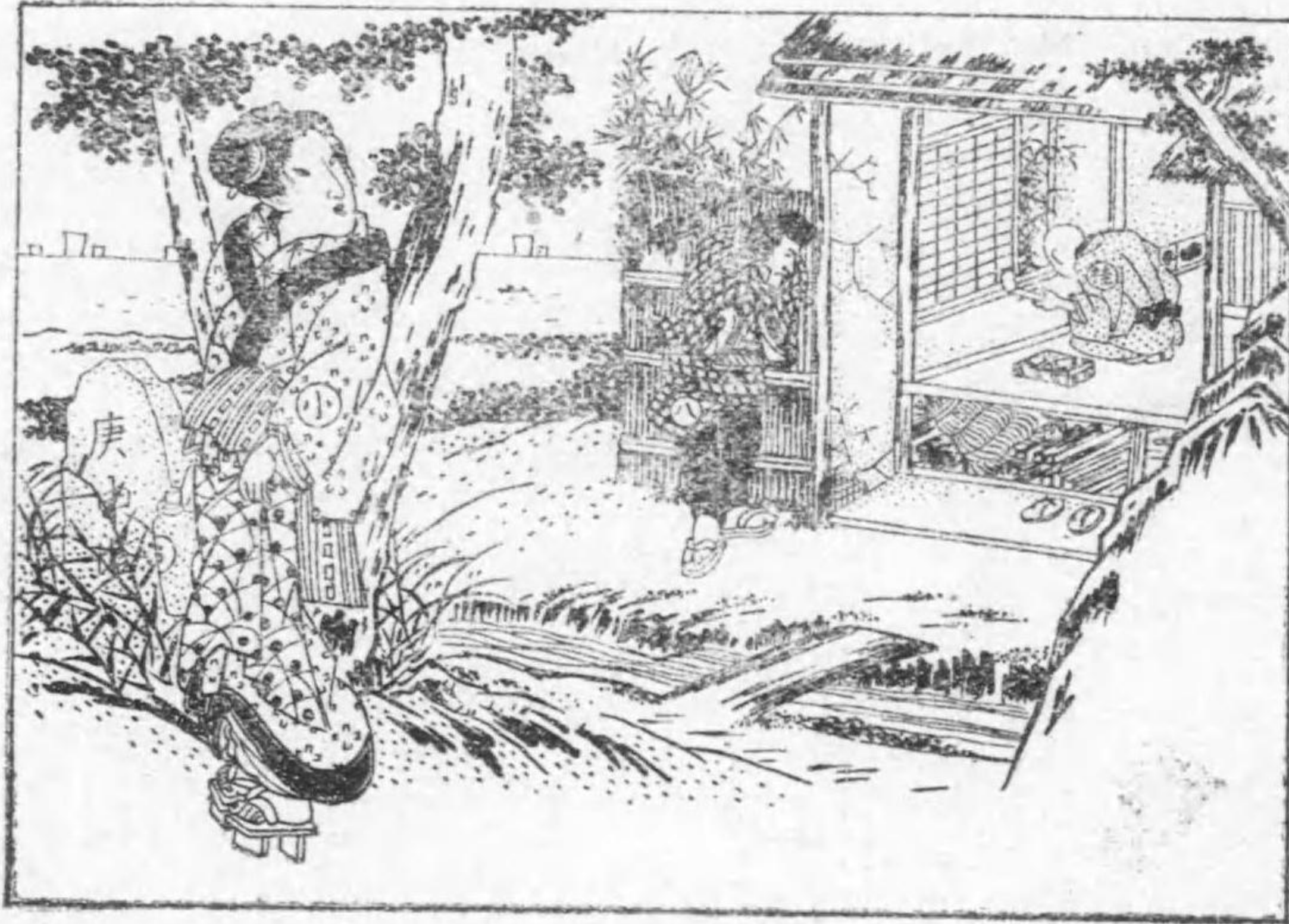
我が宅ながら七年越、音信せざれば恐怖と、這入るも敷居高端居。彼の馬士の八藏は、曲る心の角柱、様子如何にと差覗く。斯くと知らねば桂馬佐は、復習ひ残せし三味線を、復弾き出す鳥邊山、いと哀れと聞ゆれど、飽くまで剛氣の非糠八藏、ぬつと這入つて四邊見廻し、

八藏「ヤイ、桂馬佐、父が今戻つたぞ。』と、言ふ聲に桂馬佐「何ぢや、誰ぢやぞえ。留守ぢやく。』
八藏「オ、父ぢや。八藏ぢや。』と、言はれて吃驚、桂馬佐「エ、父様か。能う戻つて下さりました。もうくくく、今から何處へも行つて下さ

りますな。今母様は酒買ひに行んでぢや。朝夕お前の噂して、腹立つて居さんけれど、私が宜い様に言譯する程に、お前も何にも言はずに、宅に居て下さりまし。私も今では三味線も、餘程覚えて村の中へも、稽古に行きます。若衆も可愛がつて、面白うもない三味線弾かせ、金や錢を下さる故、もうお前にも、好きな酒飲ませて置きます。噂に聞けば馬追ふたり、荷物を持つたりして、大儀な世渡して御座ると、聞きました。其の様な事は、斷然止にして、コレ、父様、宅に居て、母様と仲好う暮らして下さりませ。手を合せて拜みます。』と、大悪無道の八藏をも、親と思へば縄り付き、涙に暮れるぞ道理なる。

八藏は、猫撫で聲、

八藏『言うてくれるな。身中が縮まる様ぢや。悪い了簡出來心で、七年以前に、何様云ふ機か家出して、京大阪三界を、流浪して歩いて居たれど、故郷程宜いことはない、戻つて來る道々でも、噂を聞けば小萬めも、寡婦立て、汝を育て暮らすとのこと。今更聞いて面目ない。もう〜俺も心を、斷然と入れ替へて、酒や何も彼も止にして、稼いで汝等を樂に過す程に、嬢めが戻つたなら、汝は俺に代つて、悉皆もツかい抜かすとも、宜う詫びしてくれ。頼むぞ』



よ。』と、言へば桂馬佐涙を拭ひ、打微笑みて嬉しげに、

桂馬佐『左様言うて下されば、私や嬉れしい。

母様の歸らしやるまで、其處に寝ころんで、待つて居て下され。』と、悦ぶを見て、付け込む八藏、

八藏『今言ふ通りぢや程に、昔の父ぢやと思つてくれるな。夫れに付いて母や、其方の手助にもなる事して遣りたいが、差當つて仕様もない。ホンニ、此處等附近も、定めし噂があるか知らん。繪姿を以て尋ねらるゝ由留木の息女、調姫と云ふは、昔母めが、大恩受けし御主人様。若しや尋ねて昨夜あたり、來は

せぬか。』

桂馬佐『ヤ。』

八藏『さア、若し來はさツしやらぬか。』

桂馬佐『イエ、何にも來はさツしやりませぬ。』

八藏『フウ、汝にも隠して置くのかも知れぬが、夫りやア、蛇の道は蛇だ。例令、母めが庇護立しても、悪者共が鶴の目鷹の目、なか／＼隠し遂げることは出来ぬ。俺が悪者仲間で居た故、故意と其處等を尋ね歩く振をして見せたら、隠し課せることもあらう。有り様に、言うてくれ。今まで悪い事した代りに、見ん事お姫様を庇護ひ課せて、嬢めが忠義を立てさせて遣りたい。久し振で歸つて來ても、矢張嬢は氣を許しはせまい。心の改つた手初めがして見せたい。』と、和かに賺せば、桂馬佐實と思ひ、

桂馬佐『成程、左様言はしやるは、偽りでも御座るまい。有り様は、私にも隠して居さしやつたを、漸う明かして譯を聞かせ、夫れから酒を買ひに行つてぢや。左様なる事なら、左様して進めて下さりませ。』と、聞いて八藏笑壺に入り、

八藏『ム、左様であろ／＼。其のお姫様は、何處に御座る。』

桂馬佐『アイ、ツイ、納戸にお寝みなされてぢや。お起し申して來ませうか。』

八藏『イヤ、昨夜からの心勞、定めて草臥れて御座らう。ア、連の侍は何様した。』

桂馬佐『其の様な者は、見えませぬわい喃。』

八藏『夫れで落著いた。偉い手利であつた。』

桂馬佐『エ、其様ならお前、逢はしやつたか。』

八藏『ムンニヤ、出逢つた事はないが、強い侍が、供をして歩くと云ふことぢやが、何として悪者が、大勢で付けられては、敵ふことではあるまい。したが、此處の家に庇護ひ置けば、氣の付くことではない。ハテ、好い時俺が歸つたわえ。』と、己が巧みに思ふ壺、喜ぶ折しも主の小萬、とつかは急ぎ歸り來て、

小萬『桂馬佐、嘸待ち遠であつたらう。』と、言ひつゝ夫八藏を見て、吃驚する胸騒。氣の毒さうに八藏が、

八藏『コレ、女房、何にも言うてくれるな。面目ない。噂を聞いて感心した故、俺も心を改め

て、歸つて來たは外でもない。幸ひお其方が庇護ひ申す姫君様、俺が力になつて庇護ひ課せ、夫れを手始めに稼ぐ積り。悪黨共は俺が一杯食せて、八藏も搜して居ると云へば、身性の悪い俺ちやもの。皆油断して、此處の家には氣が付かぬ。な、宜しか。』と、言ふを小萬は打消して、

小萬『其様な事はありもせぬに、お前としたことが、何言はしやんす。』と、素知らぬ顔。

八藏『イヤ、未だ疑るは尤もだが、生根の變つた非糖八藏、例令、討手が向つても、見事俺が欺いて見せよう。コレ、七年振でのめくと、何程我が家と云ひながら、何様戻つて來られるものか。様子を聞いて氣の毒さ、力になつて遣る心。しらを切つても皆知つて居る。氣を丈夫に持つたが宜い。』と、言はれて、流石女の淺慮、若しやと思ふ心から、

小萬『左様言はしやんすりや何も彼も、様子を知つて戻つた此方さん、惡に強けりや善にも強いと、心強う思ふ程に、お姫様へも、申上げよう。眞は無きより斯様云ふ折は、また好い左右を、聞かうも知れぬ。』と、いそぐ納戸へ這入りける。此の間に八藏手賢く、豫て與作は手に餘れば、毒藥にて殺さんと、用意の藥を徳利へ入れ置き、手を濡さずして皆殺し、首

討ち落して褒美にせん。附き添ふ與作が若しも來らば、身脱けをしても此方の者、袋の鼠と悦びつゝ、得意顔にて居たりける。斯くと知らねば、小萬は立出で、

小萬『様子は彼處で皆御存じ。夫れに付けても與作様、重の井殿は姫君様に、外れて嘸や途方に暮れてゐあらう。』と、聞いて八藏、愈々安心し、

八藏『其のお供して御座つたお侍は、嘸困つて御座るであらう。ツイ一走り行て、其處等見て來ようかい。』

小萬『左様して下さんすりや、夫れ程嬉しい事はない。』

八藏『其様ならツイ、一走り。』と、裾端せ折りて出で行けり。小萬は後見送りて、

小萬『ア、今日の様な嬉しい事はない。心が改つたと云うて、力になつてくれる氣で戻つて下さんした八藏殿、何様して眞實に性根が改つたやら。夫れに付けても久し振で、歸らしやツた祝に、神棚へ未だ宵なれば、御酒を上げよう。桂馬佐はもう寝るが宜い。お姫様に上げようと買つて來れど、酒は上りたうないと被仰れば、八藏殿が戻つて、飲まんすであらう。ドリヤ、納戸へ行て、お伽しながら休まうわ。』と、御酒を備へて燈明上げ、暫時納戸へ入りけ

る折しも、取つて返して八藏は、様子を見れば眠入り端、思へば與作も尋ね來ず、女房一人と云ふものの、迎も生捕繩掛けて、引摺り行かんは事面倒。一層首討ち落して、退けるが早手廻しぢや」と、燈明の光を幸ひと、石を捜し、軒に掛けたる鎌取出し、研ぐ音聞き付け探り出る、桂馬佐は聲を掛け、

桂馬佐「お前今頃、何さんすぞ。」

八藏「久し振で歸つて見れば、庖丁も赤鯿。夜業に研いで置いてやらう。」と、

桂馬佐「イエ〜、庖丁研がしやる音ぢやない。確か鎌研ぐ音ぢやぞえ。エ、お前は未だ心が改らいで、萬一殺して。」

八藏「エ、何が何様した。」

桂馬佐「コレ、父さま偽り言うて氣を許させ、先刻の言葉の裏腹で、悪い事して下さりますな。」

八藏「エ、靜にしる。喚が起きると面倒だ。」

桂馬佐「夫れぢやによつて、私が不審。」

八藏「不審が晴れずば、神に誓を立てゝも、安堵させよう。」

桂馬佐「其様なら神へ誓を立てゝ」と、最前備へた神棚の御酒徳利を、かゝぐり〜、桂馬佐は取下し、

桂馬佐「是りやお前の歸らしやツた祝に、母様が備へた御酒。是れで誓を立てゝ下され。」

八藏「ナニ、酒で誓を立てるとか。ムウ、何より易い事だが、是りや先刻の徳利の酒か。」

桂馬佐「イエ〜、彼はお姫様に上げるの故、除けて置いたを上らぬ故、お前に飲ますと母様が、仕舞て置いた。是りや確か御酒に買うてあつた酒。」

八藏「其様なら直飲んで見せう。八百萬神も、照覽あれ。備へた御酒を頂戴して、心の潔白と徳利の口より飲み乾せば、桂馬佐は、小首を傾け、様子を覗り喜ぶ中、不思議や八藏五體慄亂、忽ち七轉八倒して、

八藏「エ、苦しや堪へ難や。こりや、桂馬佐、親を毒害したな。此の罰當りめ、觀念しろ。」と、有り合ふ鎌を振り上げて、五臟六腑慄亂して、身體自由ならざれば、どうと倒れて苦しむにぞ、周章て狼狽き探り寄り、

桂馬佐「エ、勿體ない。何様して酒に毒があつた。母様、早う起きて下され。私が何で毒害

致しませう。薬はないか。』と、立騒げば、此の物音に小萬も驚き、小萬『芒の穂にも悸ると云ふ、世の諺も落人を、庇護ひ置けば何事ぞや。』と、周章てて納戸を走り出でれば、八藏苦しき息を突き、

八藏『己れ、憎き小萬、桂馬佐二人心を合せた上、密事を曝られ詮方なく、毒薬を以て夫を殺し、主を庇護ふ大悪人。其の根性を知つた故、今宵密かに姫君の、首討ち落して褒美にせんと、謀りくつて妻や子に、斯くやみくくと殺さるゝか。無念々々。』と罵れども、固より知らぬ毒薬故、親子は何と答なく、呆れ果てたる計りなり。此の時八藏聲を勵まし、八藏『斯く云ふものゝ、實は毒薬酒に入れたを、汝等が知らぬは尤もく。思へば是れまで邪惡非道、道に背きし我が天罰。固より毒薬用意して、小萬が宵に買うて來た、徳利の酒に毒を入れしは、此の八藏が爲せし所爲。女房子にも怨はない。此の神酒徳利へ入れたる酒は、以前の酒にあらずと聞き、大事に燗を付けられたを、紛す爲に神掛けて、誓文せしは手盛の毒薬。皆是れ神の冥罰ならん。今死際に翻るは誠の善心。惡念發起の思ひ出に、語り聞かず。女房小萬、些も早く姫君の、御供申して此處を落ちよ。惡者共に告げたれば、搜しに來



るは必定なり。宵には與作に手懲せし、手練に恐れて若しやまた、彼等も共に庇護ひあるかと、思ふものから手を動かさず、皆殺ししてくれんと、毒を入れて主殺しにならうとしたは、八藏が此の世の名残の惡の仕納。實に争はれぬ、天命かな。』と、鎌取り直し、腹に突き立て、八藏『我が遺言を反古にせず、些とも早く落ちて行け。小萬々々。』と、言ひながら、腹かツさばいて死したるは、善に返りし最後の忠義。性は善なる聖の教へ、思ひ知られて哀れなり。『小萬は猶豫なすべからずと、其の儘姫を伴ひて、裏口より忍び出る。後に桂馬佐溜息突

き、

桂馬佐「父の恩は、須彌山より高く、母の恩は大海より深しと。いづれ高下はなけれども、恩の-highは父親なり。道に違へし親人ながら、進めた酒は我が身より、事を起せし不孝者。毒とは知らねど誓の神酒、飲んで死なせた親殺。母様への言譯は、死んでしませう。喃、父様、必ず怨んで下さりませぬ。幸ひ今の刃物。」と、八藏が死骸に探り寄り、持つたる鎌を取直し、我が手に喉へぐさと突き立て、あつと叫びて苦しむ折柄、小萬は心許なくや、取つて返して走り入り、此の體を見て周章で驚き、

小萬「コリヤ、桂馬佐、何故死ぬるのぢや。父様は、前非を悔いての御生害。其方は、氣でも違つたか。」と、縫るに、苦しき息突きながら、

桂馬佐「夫りや母様、嗣欲ぢや。假令父様が道ならぬ、邪惡非道の心より、仕込みし毒を我ながら、飲んで死なしやツたにもせよ、私が進めた計りで、お果てなされし事なれば、取りも直さず親殺。何様まア、生きて居られませう。私が命は惜しからねど、お姫様は何様なされた。二人が大死せぬ様に、早う人目に掛らぬ中、御供して落ちて下され。何故戻つてぢや。」

と、氣遣へば、

小萬「オ、今御供して裏道へ、出ると幸ひ、與作様夫婦の衆、昨夜興津にてお姫さまを見失ひ、尋ね飽んで彷徨ひつゝ、お出でなされたに逢うたゆゑ、大略様子を話した上、お姫様を手渡したりや、もう氣遣ひない。案じやんな。家の様子が心許なさ、急いで戻つて此の憂目、見るが悲しい。何としよう。」と、取り付き嘆くを押め止め、

桂馬佐「何様で生存へ居られぬ義理。お前は何卒煩はぬやう、お身の上大切に。夫れのみ、案じられます。」と、後は詞も口籠り、次第に弱る斷末魔、終に息絶え死しにけり。小萬はあるにあらぬ思ひ、前後不覺に嘆きしが、扱てあるべきにあらざれば、甲斐なくしくも氣を取り直し、二人が亡き骸密に片付け、野邊の送を營みしが、非業の最期を深く悲しみ、夫子の菩提を弔はんと、其の身も終に剃髪なし、諸國順禮に出でけるとぞ。

○

借も伊達與作重の井は、小萬が忠義により、暫時が間の災難を、遁れ給ひし姫を、恙なく

請取りて、猶彼方此方を彷徨ひけるが、愈々詮議厳しきゆゑ、辛くして武藏へ下り、浪人なりとて借家をしつらひ、貧しく暮らして姫を養ひけるが、姫は馴れぬ旅路の疲れ、遂に病となりし上、眼病まで發しつゝ、殆ど難儀の其の折柄、重の井豫て懐妊なりしが、十月に充ちて男子を生みしが、姫君の病苦愈々募り、烟の代も盡きたれば、密に戀が窪へ身を賣りて、其金にて眞珠を調べ、姫の眼病全快させた、生みたる男子を捨て置き、夫には暫時屋舗奉公すべき旨を、言ひ残して出で行きけるが、やがて數多の身の代金を送りければ、姫君與作、いと悲しく思へども、詮方なく我が子をば、三吉と名づけつゝ、貫ひ乳して育て、姫君は妹なりと披露して、三年餘り暮らしけるが、重の井が音信は、其の後絶えてなかりけり。

與作は女房の身の代金も、自ら遣ひ盡し、今ははや詮方なく、一子三吉を伴うて、淡島の修行者となり、日日出で歩き丹七と名を改め、其の日々を送りけるに、三吉は母親なれど、自然に育ちければ、人呼んで、自然生の三吉と云ひしとかや。此の幼子が舌も廻らで、淡島の由來唱へるを、憐れがりて、思の外の錢を貰ひ暮らしける。



傾城の賢なるは此の柳かなと、其の賢を賢として、花の色香も忠義ゆゑ、彼の重の井は表具屋の、音羽と云へる傾城に、姿を變へ、川竹に、憂き身を沈め侘ちつゝ、袖を絞りて暮らせしが、光陰矢よりも早くして、三年が程を過せども、朝な夕なに忘れぬ、夫の身の上思ひ續けて、濕り勝なる物案じ。朋輩女郎口々に、

女郎衆「モシ、音羽さん、復しても鬱いで計り居なさんす。此の廓へ奉公する者、お前計りぢや御座んせぬ。皆辛苦な身の上で、親夫

の爲苦海の勤。況てお前は五年の年季、もう三年も過ぎたれば、夢の間に年が明く。早う歸つて健全でゐさんす、親夫の顔見て、今の憂さを晴らさうと、樂みにして居なんせ。』と、慰められて音羽は尙も、

音羽『癒しう御座んす。此里さん、今に初めぬお前の意見、更々恐うは聞きませぬ。』

此里『ホンニ、左様であります。煩うては各自の身の損。泣顔見せて遣手衆に、叱言聞かぬが宜御座んす。』と、親身に優る女同志、いと頼もしく見えにける。今日人は人の身明日はまた、

我が身の上と思へども、義理と忠義の兩方に、身は淡島修行者と、扮せば變ず姿形、未だ幼なき三吉が、手を引き連れて我が妻の、居るとも知らず表具屋が、門にぞみ聲高く、

丹七『抑々紀州名草の郡瀉、淡島大明神、由來を委しく尋ね奉るに。』と、言へば側から三吉が、

三吉『天照皇大神、第三番目の姫宮にして、はりさいごん女と申す神の御身なり。』と、舌も廻らぬ片言交り。新造禿が夫れと見て、

〇×『アレ、音羽さん、可愛らしい淡島が來たわいな。由來を言はせて、聞かうでは御座んせぬか。』

音羽『ホンニ、宜からうわいな。』と、起ち出で、夫と知らねば女房とも、知らぬ二人が顔見合せ、

音羽『ヤア、お前は、與作殿。』

丹七『エ、其方は、重の井か。』

音羽『お前は、何様して其の姿。』

丹七『其方も、何様して廓の勤を。』と、與作は急き立つ胸を静めて、

丹七『汝れは館に、勤と偽り、三年此の方音信もせず。賤しい勤して居るとは、與作が面を踏む心か。』

音羽『エ、』と計りに獻萩り上げ、四邊を兼ねて涙を隠し、

音羽『オ、淡島殿、其の腹立は尤もなれど、知つての通りの身の成行。言ひたい縁起もあるならば、其の淡島の身の行方、言うて聞かして下さんせ。』と、目交に掛けて問ひ掛ければ、夫

れと頷き丹七は、

丹七『森の子鳥我はまた、尾羽打ち枯すの素浪人、綿さへ足に掛るべき、忠義の爲の世渡は、一文もなく知る人も、なしも礫もない其方、便せぬゆる知るまいが、此の様に悴まで、コレ、

此の状は何事だ。今更思へば貧困い俺を、奴は疾くに見限つて、縁切る心の奉公か。輕蔑げ果てたる女子ぢや。」と、口惜し涙に暮れけるを、音羽は顔見て嬉しいやら、又悲しさも彌増しに、

音羽「言うて返らぬ事ながら、お前と私が其の仲は、昨日や今日のことかいな。立てし誓も二世掛けて、添ふに添はれぬ其の仲を、親御様のお情で、夫婦になつても姫上の、御供申して憂き艱難。斯様した勤も忠義故、お前に夫れと明したら、武士の恥ぢやと許さんすまいと、思うて屋敷奉公と、云うて廓の憂き勤。夫れを、浮氣なことからしう、怨みの言葉はつれないぞえ。ホンニ、聞えぬ、お人ぢや。」と、他所を憚る忍び泣。傍輩女郎は夫れぞと曉り、幸ひ黄昏物騒しき、事の紛れに丹七親子を、密に二階へ伴ひけり。

此處にまた先つ頃より、此の音羽が許へ通ひ來る、鷺塚官太夫と云ふ侍あり。梅ヶ谷なる、此花左近之助が家來、藪坂八平次と云ふものと心を合せ、調姫左近之助を、嫌ふと風聞



させ、由留木判官謀叛と云ひ立て、兩家矛盾になりし上、其の虚に乗じて、由留木此花兩家を、横領せんす工みなりけるが、此の官太夫音羽が姿艶麗なるに深く迷ひ、振り付けらるゝを懲りずまに、今宵も此處に通ひ來つ。與作は夫れと見るよりも、彼は斯うくと、委しく音羽に言ひ含め、密に尋ねて手掛りに、なるべき者もあるならば、捜し出して我に渡せと、言へば音羽は心得て、酒を進めて巧くたらし、前後を知らず打臥したるを窺ひ、懐中物を改めけるに、八平次より、密事を告げし手紙あり。與作に之を與へければ、大きに悦び、此の趣を注進せんと、まづ官太夫を縛

しめ置き、やがて調姫無實の罪の趣を、委しく父與惣兵衛に、早使にて告げにければ、早速國元へ呼び上せられ、官太夫を鞠問せらるゝに、鷺塚遂に陳じ難く、事明白に露見せしかば、此の由梅ヶ谷へ達せられしに、左近之助大きに驚き、八平次を召捕へ、厳しく責め問はれしに、是れも亦包むに由なく、一々白狀したりしかば、此の二人をば、重き罪に行はれ、兩家の和睦調ひて、調姫の興入ありて、目出度く婚姻事濟みたり。

さて與作には、重の井が身の代を賜りて、兩人共に類稀なる忠義の者として、以前の不義の罪を許され、莫大の恩賞を賜りけり。また調姫は、小萬が厚き忠義により、危き命を助り給ひ、殊に夫忤まで一時に失ひし事、不便なりとて様々に、行方を尋ね給ひけるに、圖らずも鎌倉に、小萬は廻り來にければ、梅ヶ谷に止め置き、早速江州へ申越され、褒美を數多賜りけれども、一所不住の身の上なれば、金銀に望なしとて、更に受け納めざりしを、押して賜りたるにより、關の宿に地藏菩薩を建立し、僅の草庵を出來ひて、亡き人々の菩提を訪ひ弔ひ、常念佛を修行しけり。また與作夫婦は、三吉の外に、數多の子を儲け、目出度き春を迎へける。目出度しく。

お妻八郎兵衛
お傘六郎兵衛

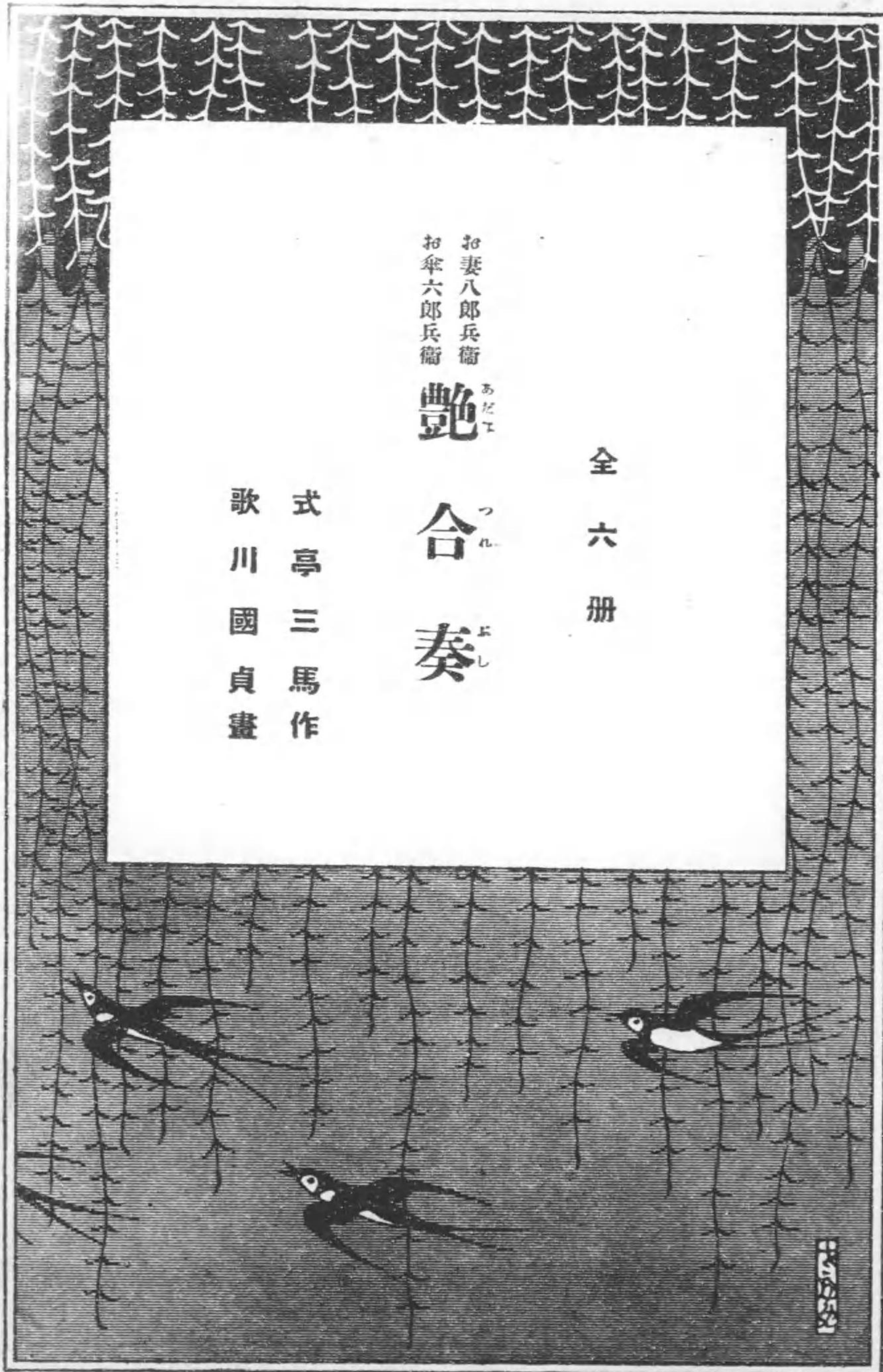
艶あだ

合つ

奏よし

全六册

式亭三馬作
歌川國貞畫



阿妻八郎兵衛
阿傘六郎兵衛
五色潮來艶合奏

式亭三馬戲作

歌川國貞畫圖

憐香伴傳奇 上之卷

湖上笠翁編次

玄洲逸史批評

第一齣 破題

〔西江月〕〔未上〕〔眞色。何曾忌色。眞才始解憐才。物非同類。自相猜。理本如斯。奚怪。奇妬
雖輸女子。癡情也讓裙釵。轉將妬痞作情胎。不尋常癡派。云云
と、院本の舞臺、三枚計り讀さして、獨り案を拍つて曰く、唐山湖上の李笠翁、日本平安の近

松翁、和漢一雙の見識、古今來作者の魁首なるべし。事の奇しき文の巧なる、愛玩此處に止ま
れり。筆々性靈言々精髓、人の及ばざる句を吐き、人の用ひざる字を用ひ、人の摸し難き情を
摸し、人の描き難き態を工む。それから見ては盲蛇、ものに怖ぢざる在下が類は、ぬつべら
ぼんの垣覗き、呆がお禮に來ぬ中に、足を洗つて暹世んと思ひしに、例の版元が勧めに引か
され、米櫃の底も想像られて、是非なく筆を執るより頓く、五色潮來艶合奏と、題したる作
者の意は、畢竟如何。這箇の題目俗聽しを媚つて、愛を求る○で御座りますと云爾。

文化十四年丁丑孟春

式亭三馬戲題



如何、祖師西來意、九年面壁はなんさんす、苦界十年、お客を壁と睥み破る、身は昔の葉の

夫れならぬ、うきふし繁き川竹の、流に立てる眞實は、色客への操にして、不立文字の切れ
文あれば、直指人心の指切りあり。以心傳心の格子頭、見性成佛の床の中、はまるは本來無
分別、切れるは心外無別法。迷へば通も不通となり、悟れば無粹も粹となる。柳巷花街翠帳
紅閨、柳は綠花は紅の、禪味に通ひ廓の習ひ、假令禿は綠と呼ぶとも、花も紅は、客の心
の色々歟。吁駒下駄の呵囉々々喝、

前大徳利

式亭三馬與狂讚

阿妻八郎兵衛
阿傘六郎兵衛

五色潮來艶合奏 上之卷

式亭三馬作
歌川國貞畫

一

繁昌は又類なき、鎌倉の佐助が谷に鎮ります、佐助稻荷の開張とて、往來多き其の中に、小田原の米問屋、丹波屋が手代八郎兵衛、色白にしてきツとして、男の諸藝何一つ、抜けないから親方の、娘お妻と相惚の、色の出ばなや香よき、茶屋が牀几を苟且に、開帳参りの憂さ晴し、煙草燻らす折柄に、問屋の男うそくと、漸う見付け走り寄り、男「モウシ、八郎兵衛さま、お國元から急御狀、則ちお渡し申します。」と、言ひ捨て男は立歸る。手紙の名宛は男文字、中は戀しい娘の文、三行讀んでは濟まぬ顔、四行見ては逆き上す、顔に紅葉の散し書、思ひ参らせそらくと、鳥居の方より來る姿、

八郎兵衛「南無三寶、若旦那」と、むしやくしやくつくねる長文を、隠し所に狼狽へて、誰が預けたか女笠、暫時と人目くる繻子の、笠當の下に隠す間も、程なく來る丹波屋榮三郎、是れも同じく辛氣な顔付、

榮三郎「ヤレ、好い所で八郎兵衛、急に話さにやならぬ事。と云ふは三浦屋の、古今が身の上、外から身請するとの知らせ。若し左様なれば二人ながら、生きてゐる心はない。思案頼む。」と、氣を急くも、色に凝り性懐子、思ひは同じ戀仲の、古今は浮かぬ開帳参り、若し彼の人にと思ひ逢ふ、縁盡きせず走り寄り、古今「榮三さん、待ち兼ねた。山口巴へ頼んだ文、見なんしたか。身請の取沙汰何様しいせう。」と、縫り付いて泣き居たる。

榮三郎「さア、此の文で己も當惑。降つて湧いた身請とは、相馴の客か。」古今「いえく、今朝揚屋の尾張屋へ呼び揚げて、初會から身請の相談。親方さんが來なんすやら、はつと思つて胸先へ差込んだ、コレ、此の癪。見てくんなんし。」と、手を取つて見せる胸先、撫で下し、

榮三郎『何様しようぞ。八郎兵衛、思案はないか。』

古今『ホンニ、私としたことが、氣の急ぐ儘に挨拶も、内證知つての八郎兵衛さん、何卒世話しておくんなんし。別れる様になつたらば、生きて居る氣は御座んせん。お前も、死んで。』と、榮三郎が膝に打臥し、忍び泣き。八郎兵衛はとつおいつ、思案は出ても出ぬは金、

八郎兵衛『ア、お前方は埒もない。二言目には、死ぬくと、死んで花實が咲くならば、

比翼塚にも咲くわいな』と、淨瑠璃にも、アレ、語る通り。ハテ、思案と云うたら其の客より、此方から先へ手附を渡せば、外へ遣る氣遣はなけれども、肝腎の金がない。今度御伴して賣りに下つた、七百石の正米にも、利は少し、二人ながら、内證商手は合はず、此處で才覺の手段はなし。鎌倉の用も了うたに、早く戻れと旦那の催促。是非今夜は船に乗る支度。

ハテ、小田原へ歸つてから、何様なりと。モシ、古今さま、此處はお前のちやらくらで、身請を延ばす仕様はないか。』と、談合半ば走つて来る、山口巴の金藏、

金藏『モシ、榮三様、サア、身請が急になりました。先の客が晩迄に、金を渡さうと言ふ所を、貴君は久しい御馴染と申し、親方も氣の毒がつて、身の代は七百兩。榮三様、今



日中に手附の金をお渡しあらば此月中まで、後金は待ちませう。古今様も好いたお客の事、外へ遣るもいぢらしいと、如才ない親方の了簡。さア、一生懸命の身請金、工面して御覽じませ。』

榮三郎『さア、工面と云うて、國へ行かねば。

喃、八郎兵衛。』

八郎兵衛『左様で御座ります。金藏どんの働

で、何卒夫れまで親方が』

金藏『ア、いえ、了簡の上なれば、夫り

やとても、待ちませぬ。』

榮三郎『其様なら今日中に、金がなければ古今は、彼方へ愈々身請。』

古今「主と一つになられませんか。ハア。」

榮三郎「ホイ、ハア。」

二人は顔見合せ、思はず泪はらくくと、掛り繋がる八郎兵衛、余藏迄も貰ひ泣。一伍一什を最前より、立聞きしたる丹波屋の、一番手代六郎兵衛、

六郎兵衛「其の金貸さう。八郎兵衛。」と言ふに吃驚振返り、

八郎兵衛「ヤア、番頭の六郎兵衛、貴様は、まア、何の用で、何時國から下つたぞ。」

六郎兵衛「さればい喃。後の月詠へた、お妻さんの嫁入道具、出来上つたと云うて来たので、請取つて来いと旦那の言付。金二百兩持つて来たが、ふと此處へ來掛つて、若旦那の命にも、懸つた身請と聞いて、氣の毒と云うて番頭の、六郎兵衛が此様な金を、貸した時には息子殿の、放埒を腰押する同然。百兩は其方に貸さう。一札書きやれ。」と、懐から小判で百兩、耳を揃へて並ぶれば、八郎兵衛喜び顔、

八郎兵衛「若旦那や、朋輩を思ふ親切辱ない。シタが、二百兩の中、半分を貸して仕舞ひ、嫁入道具は如何するぞ。」

六郎兵衛「ハテ、此處に残りの百兩を渡して、道具は先づ請取つた上、残り百兩は雪の下の、問屋に請合せ、小田原へ歸つて共々に、金を工面して下せば宜い。モ自己が性として、人の難儀は、え見捨てぬ。」と、言葉は佛心は鬼、矢立の筆に墨含ませ、心掛よき手形を取出して、さらくく、お定りの預り手形、

六郎兵衛「其方の名計り、自筆で。」と、渡すは深い工みとも、知らぬ八郎兵衛、

八郎兵衛「忝ない。一生忘れぬ御恩。」と、名を書き記し、紙入より印形取出し、確と包む小判と引替に、手形渡してもう安心、

八郎兵衛「是れから、直に金藏どの、親方へ此の金を。」と、言ふに金藏元氣り出し、

金藏「さア、目出度いわく。何方も廓へ生き延びる。」

榮三郎「命の親の六郎兵衛、家來と思はぬ、有難い。」と、拜む榮三に、

古今「私も。」と、古今も共に手を合せ、

古今「二人が仲の結ぶの神、御酒上げたい。さア、お出で。」と、踊りつ舞ひつそより立つ、岸に繋ぎし屋根舟へ、打連れ立ちて急ぎ行く。西へ入る日と傾く頃、六十越したる頑丈老爺、

娘か嫁かぼつとり者、連れてとつかは汗押拭ひ、

老爺「ア、久し振の開帳参りを幸に、今見せた小芝居の新狂言、べつたりとした濡れ事の段、年寄つた己でさへ、何様やら謀叛が起りさうな。コリヤ、お袖、我も彼を見たら、嘸待遠からうな、ソレ、祝言がしたからう。五ツの年下總の銚子から、養子娘に貰うたは、小田原へ奉公に遣つて置いた、己が實子の八郎兵衛と嫁す積りで、幼少いからの許嫁、此の秋は年も明くに依つて、二三日の中には、商賣の古着を買ひながら、小田原へ行つて、親方様にも逢はねばならぬ。八郎兵衛が戻つて來たら、一日も早くな。ソレ、祝言しやれと云ふ事よ。」と、ひかすか物言ふちやり老爺。

お袖「親父さんとしたことが、人も聞くのに滅相な、恥かしい事計り。」と、赧らむ顔の夕づく日、

老爺「大事を、抱へて、ぶらんくしては居られぬ。さア、行かう。裾も膝げて、帯も締めやれ。コレ、茶屋さん、預けて置いた菅笠二蓋、取つて行きます。ヤ、コレ、茶代は此處に。」と、沖の石、乾く間もなき出茶屋の庭、二人は立つて急ぎ行く。引き違へてがらつく駒下駄、是

れも遊女の數なれや、七里が濱の網打場に、長家一番名打の艶者、色の切賣情の休め、入り来る容は懸流し、番傘のお傘とて、形と心は裏表、人喰馬にも相口とて、戻り掛つた六郎兵衛、互に目顔で知らせ合ひ、

六郎兵衛「番傘のお傘、早かつた。お主が手子の廻し者を、待客にして古今太夫を、急に身請と言はせた故、工みの壺へ巧く嵌つた。」

お傘「フム、そして百兩の證文は。」

六郎兵衛「ハテ、其處に如才はなかりけり。八郎兵衛から取つた證文、百兩の金高を。」

お傘「アイサ、二百兩にするは、私がお手際、すきつぎと云ふもので、金目の所を白紙にする、細工は流々仕揚げた上で、透かしを見ても分ることぢやアねえ。手形は固よりお前の自筆、墨色の違はぬ様に、二百兩にして百兩山分け。」

六郎兵衛「オツト、宜しく。奇々妙々。まア、夫れで八郎兵衛は追ひ巻くるわ。さて、彼の息子が紙入に、古今が親方の年附證文、夫れを此方へ瞞著して、是れは、斯うく。宜しか。さすれば息子も高が養子、何の苦もなくお拂ひ箱。其處で差詰番頭の、此の六郎兵衛の尉、

お主の娘をぐつすり占めて、丹波屋の跡取様と。まア、芝居狂言などでは能く言ふこと。シ
タが、能く失敗る奴。其處を巧く行く證據は、彼のお娘のお妻めは、八郎兵衛とちんくか
もでけつかる故、嫁入を否がつて、二人つんく、連れだつて、道行は知れてある。其處を付
け込みお妻は勘當。扱其の次の羅漢は、些と否らしい臺詞なれど、豫て可慕しい可愛と思ふ、
其方を入れて御内儀さん。何と嬉しいかく。』

お傘『其様ならお前は、此方の人。』
六郎兵衛『女房ども。』

お傘『エ、イヤよ。此方の人と云ふ面でもねえ。』

六郎兵衛『是れは又、御挨拶。』

お傘『ハテ、色氣のねえ話だが、何處と云つて惚所のねえ、南瓜野郎とは思ふけれど、欲の深
い所と悪工が上手だから、一生連れ添ふには、頼もしさうだと思ふから。』

六郎兵衛『己もお主がうんざりびん、密夫結びの品形、艶な所に惚れた計りか、心意氣のいけ
圖太さに、嬢にしたら末始終。』

お傘『おつりきな計略も。』

六郎兵衛『あらうと思ふ。』

お傘『長半の中飲で。』

六郎兵衛『夫を、嬢の。』

お傘『互の約束の。』

六郎兵衛『コレ、夫れは左様と今私語いた、榮三郎が戻り道、何も彼も抜からぬ様に。』

お傘『オット、皆迄言ひなさんな。百も承知の番傘お傘。面を見られぬ日の暮れ紛れ、手子の
奴等と言ひ合せて、證文を顯著化したら、小田原へ振込むべい。』

六郎兵衛『其様なら必ず、女房ども。』

お傘『宿六ぢやアねえ、此方の人。』

色と欲との點頭き合ひ、西と東へ別れ行く。

手附渡して證文請取り、心落著く榮三郎、最早船へと歸り足、向ふの方より悪者三人、榮三郎にばうと突き當り、

悪者「ヤイ、目を開いて歩行きやアがれ。とんちき女。」と、仕懸くる喧嘩。

榮三郎「ア、イヤ、此方は除けようとするを、其方から突き當り、反つて逆捻理不盡。」と、言は

せも果てず引挟み、疊んでくれうと、左右の手を引張る所へ、番傘お傘、突然と馳せ寄つ

て、紙入奪ひ逃げて行く。

榮三郎「アレ、盗人。」と、喚く聲聞き付け、駈け来る八郎兵衛、悪者攫んで投げ除くれば、榮

三郎は心も空、

榮三郎「アレ、彼處へ逃げる奴が、紙入を取りをツた。」

八郎兵衛「オット、合點。」と、追ひ駈くる三人。又も起き上り、

悪者「投げられた返報に、此奴を呵責み腹癒せ。」と、取つて鬼れば榮三郎、ひがいそながら武

士の果、負けじと三人相手取り、投げつ投げられ組んづ轉んづ、念なう紙入取返し、取つ

て返す八郎兵衛、



八郎兵衛「コレ、若旦那、取返しした紙入持つて、船へ〜。」と、追ひ遣る中、此奴仕舞へと兩方より、組付く頸筋引攫み、腰骨脊骨打ひしがれ、ちが〜引摺る悪者共。お傘も小陰を這ひ出でて、後を晦し逃げ行きぬ。

三

爰は所も小田原に、二とは下らぬ大身代、丹波屋の工左衛門とて、米商賣の塵埃、微塵洩らさぬ帳合の、算盤止めて、工左衛門「コリヤお妻、母親もない一人娘や、よい男を持たせたいと、町家を吟味し足らいで、御屋敷でもお歴々の、吉里良助殿の弟

を、養子婚に貰つた、アノ榮三郎、如何したるか嫁合さうと言へば、何地からも否と嫌ふ、と云うて一旦貰うた息子。兄はと云へばお侍、義理が濟まねば、跡取は榮三郎。其方は鎌倉へ嫁らす約束、頼を取つたは後の月、最早來月は婚禮さす。氣色が悪いの、嫁入は否ぢやのと、親の苦勞が目に見えぬか。氣を入れ替へて、わさくせい。』と、言ふも不便の親心。心急ぎの舟上り、鎌倉戻りの榮三郎、供は子飼の八郎兵衛、

八郎兵衛「旦那、漸う只今。』と、内へ這入れば、
工左衛門「オ、戻つたか。大儀く。』と、喜ぶ親より戀仲の、
お妻「八郎兵衛、遅かつた。兄さん、お歸り。案じた。』と、言ふも浮々、俄にいそく。榮三郎も莞爾に、

郎「借親父さま、賣りに參つた七百石の正米、相場がとんと動かぬで、僅かの口銭。』
工左衛門「ハテ、宜いわいの。損には増し。二人ながら嘸草臥。今日はお妻が嫁入夜具の、出來上つた喜び酒でも、飲んで緩りと休みや。さア、來い。』と、榮三郎引連れ奥へ入る。後に八郎兵衛は、奥口見やり、

八郎兵衛「ハ、ア、他所には嫁入があるさうな。此方や風呂へなど入りませう。ア、御芽出度いく。』と、勝手へ行くを、お妻は引止め、
お妻「戻るのが早いかな、もう當て言葉。同じ口で待ち兼ねたか、可愛やとツイ一言、言ふことはならぬか。』と、縄り付くを振り放し、

八郎兵衛「ア、コレ、モウシ、お芽出度いお方、穢れます。ア、思へば私は強い阿房。賑な鎌倉に、小三十日逗留中、色里は何處地やら、心中立が口惜しい。何處のかお方は、高見の見物。イヤ、嫁入ぢやの婚禮のと、けたいが悪い。』と、煙草盆砕くる計り、煙管の胸打。ひぞる身よりもひぞらるゝ、胸にせき來る泪聲、

お妻「腹の立つのは無理ならねど、餘り聞えぬ捨て言葉。假令此の身は玉の輿、御后様になるとも、外の男を持つ様な、淋しい者ぢやと思つてか。此の間鎌倉へ送つた文は、何様見てぞ。頼みの印は來ると云ひ、父さんの仕拵、所詮其方に添はれずば、生きてはぬと書いたぞや。胸欲なこと言はずとも、何卒女夫になる思案してたも。ヤイ喃。』と、眞實見えし口説泣。豫て氣を知る八郎兵衛、胸も解けて共涙、

八郎兵衛「其のお心とは思へども、胸のもやくや腹立紛れ、心にもないねすり言、腹が立つた
ら堪忍して。」

お妻「夫れでも芽出度いと言やツたもの。」

八郎兵衛「いえ、何の芽出度うない、あた忌々しい。あれまた矢張泣いじやくり。」と、背
撫でさする戀仲の、口説に扱ひ入らざりし、折しも表へ雪駄の音、奥へと知らずる目遣に、
襖引閉て入る後へ、門へ案内の聲しばぶき、供をも連れず吉里良助、

良助「工左衛門どの、御在宿かな。」

八郎兵衛「コレハ、能う御出でなされました。モウシ、良助さまが。」と、知らずる聲。榮

三郎引連れ工左衛門、

工左衛門「能うこそお出で。さア、是れへ。」と、挨拶取りく。

工左衛門「煙草盆。お茶持て来いよ。」

良助「イヤ、お構ひ下さるな。今日参つたは、些とお尋ね申したい儀、と申して外の事でも
ない。拙者が弟夫れに居る榮三郎、息女お妻どの、成長の上にて、嫁合すとの所望故、五

箇年以前養子に、遣し置いたる處、承れば息女には、今度鎌倉へ縁組とやら。察する所是
りや、弟めが不所存にて、お妻どのを嫌ふから、是非なく實子を他所へ嫁入り、榮三郎を家
督にと。さア、左様あつては此の良助、何とも心が濟み申さぬ。と申して其許へ、遣したる
榮三郎、取戻さうと申すとも、義理堅い工左衛門殿、御得心もあるまい。なれば、息女を嫌
ふ弟めが心底、篤と探りて存じよりが。」

工左衛門「ア、いやモウシ、やくたいもない。何方からもなく、嫌ふの否のとは申さねど
も、見通しの人相者が、娘妻を熟々見て、此の子を生まれた家に置けば、夭死すると言
たが氣掛り。夫れ故に今度の婚禮。今日は貴下へ此の段を、御話し申しに参る所。何のく
榮三郎に、少しも不埒は御座りませぬ。」と、義理ある仲の執成に、實義の程ぞ表れける。折
柄戻る合羽掛、

工左衛門「オ、六郎兵衛戻つたか。シテ、誂への嫁入道具、定めて残らず出来揃はう。道具
の上乗仕さうなものぢやに、見れば陸を戻つた様子。何ぞ譯のある事か。」
六郎兵衛「ハイ、譯と申したら、箆笥長持、狹箱、水仕黒棚ほかいまで、天晴見事に揃つてあ

りながら、素手の孫三で歸りました。』
工左衛門「ヤ、何と言ふ。相對の直段通り、金持つて行て、何で、道具を請取らぬ。サ、其の譯言へ。』

六郎兵衛「ハイ、請取られぬ其の譯は、ナアモウシ、榮三郎様、イヤ喃、八郎兵衛。』

八郎兵衛「ア、是れ粗相な。六郎兵衛、事なう道具は請取ると、言ふたぢやないかい喃。ナ

アモウシ、榮三さま。』

榮三郎「ソレ、雪の下の問屋に、ソレ、道具は残らず、船積にすると言やつた。ソレ、

合點か。』

六郎兵衛「ハテ、扱て、是れはまた怪しからぬ。何時私其様な事、口も腐れ言ひは

せぬ。』と、手の裏返す工の口明け、門口ろそく番傘のお傘、尋ね廻つた顔付にて、

お傘「丹波屋の榮三郎さんとは、お前さんかね、一寸お目にぶら下らう。』と、遠慮會釋も上り

口、女に似合はぬ大胡坐、

榮三郎「ハイ、榮三郎は私ぢやが、見馴れぬ女中の何御用。』



お傘「アイサ、ツイぞお近付でもねえから、私もお顔は存じやせんが、私は七里が濱の網打場で、番傘のお傘と云ふ莫連者さ。用といつて外でもねえが、此の中佐助が谷の稻荷の土手で、此様な物を拾ひやしたが、此方等が持つては、何の役にも立たぬ代物。お前さんの方ぢやア大事の物、夫れで態々届けに來たも、強い苦勞性だけれど、其處がモシ、相見互、所は變れど泥水の、流れを立てる身請の證文。人が浮みやア其の報で、私も共に成佛と、後生心で持つて來たが、コレ、見なせえし。』と、手附の證文、

榮三郎「是りや此の間、稻荷の堤で、取られた

手形。』

八郎兵衛『成程、私が取り返した紙入、舟で中を改めたりや、無かつた手形が、何様して又。』
お兼『ハテ、其様な譯は知りやせん。拾つたから届けに来たも、宛名は小田原丹波屋の榮三郎殿と、べつたり書いてあるからさ。』

榮三郎『夫れは近頃御深切。其様なら是れはお貰ひ申して。』

お兼『ア、コレ、只取とは押がお重てえ。折角拾つた百兩の書物。欲しくば、此方に賣つてやらうが、直の相談もてきばきと、元價を引いて五十兩。』

榮三郎『え。』

お兼『否かえ、お否かね。否ならば今引捌いて。』

六郎兵衛『ア、是れはしたり、氣の短い。此の挨拶は、六郎兵衛、悪い様には計らふまい。』

まア、其の手形。』と、手に取つて工左衛門が目に掛る様、態と廣げて讀む顔で、

六郎兵衛『ナア、モウシ、良助様、之を破らすも惜しい事。』と言ひつゝ見せようとする證文、

工左衛門引たくり、

工左衛門『證文買うた。五十兩出ませう。』

六郎兵衛『モウシ、旦那、コリヤマア、何の證文ぢやと思つて御座ります。』

工左衛門『黙れ、六郎兵衛、己も目もある耳もある。ハテ、己が忬の榮三郎、欲しい者を買つ

た手附、百兩打たいでは、人のこと言ふ奴れが二百兩持つて居て、誂への道具を、何故請

取つて戻らぬぞ。』

六郎兵衛『ハイ、左様被仰れば、もう言はねば面晴れが濟まぬ。其の二百兩は、八郎兵衛に貸

しました。』

八郎兵衛『ヤア。』

榮三郎『ア、これく、六郎兵衛、明らさまに埒もない。』

八郎兵衛『オ、そして金高が、半分違つたぞ。』

工左衛門『ハテ、違ひ相なものぢや。榮三郎に附けて遣つた八郎兵衛、手詰めになつたら百兩

は、借りたであらうな。左様かく。』と、三寸俎板見抜く老眼。八郎兵衛胸を据ゑ、

八郎兵衛『斯様なつたら、隠すは未練。大磯の女郎に打込み、延引ならぬ、身請の沙汰、外の

手へ渡すまいと、手附に打つた百兩。奉公人の宛名では、萬一の時の爲にもと、若旦那の、お名を借り、其の請取手形をさせた不届。嫁入道具の金の中、百兩を借りた不埒。』

六郎兵衛「こりや、ヤイ、八郎兵衛、我はまア、太い事言ふな。道具代の二百兩を、些との間貸してくれ。此の金が無ければ、榮三郎様が死なしやると、佛の様な六郎兵衛を、騙るとは氣も付かず、お主の命を助けるを、此處等が忠義と貸した二百兩、半分横に寝ようとは、テモ、恐しい、胴擦り。』と、睥み付くれば、逆立つ八郎兵衛、

八郎兵衛「こりや、ヤイ、左様抜かす奴れが、大すり。朋輩仲でも念の爲と、其方が書いた手形の金高、百兩と見届けて、己が名計り自筆に書き、印判押したを忘れろか。』

六郎兵衛「ヤア、いけもせぬ證據立。此の口、いがめてくれろか。』と、飛び掛る其の所へ、最前より門口にて、様子残らず聞いたる、關取妹背山芳之助、すいと這入つて六郎兵衛が、腕首攫んでづでんだらう、

六郎兵衛「ア痛くく。ヤア、我は八郎兵衛が、從兄の妹背山めぢやな。何で從兄の肩持立。』妹背山「アイヤ、味方見苦しう從兄の八郎兵衛が、肩持つではごんせぬが、御最良は常からの

此の家。旦那さまを差置いて、餘り仰山な故、一寸止めたのでござんす。アイヤ、モウシ、旦那さま、皆様御免なされませ。』と、すつとおいへに大胡坐、

六郎兵衛「オ、止めたのなら、まア其の分。さらば是れから證文を、何誰様も、彼奴も此奴も御覽なされ。』と、取り出す一札さつと開いて、

六郎兵衛「エヘンく、抑此方に渡らせ給ふ、御證文の趣、近う寄つて御拜あらませう。』
預り申す一札の事

一 金貳百兩也

右預り申す所、實正也。何時にても御入用の節は、此の手形を以て急度返濟申すべく候。爲後日の依而如件。

八郎兵衛「ヤア、其の證文は。』と、八郎兵衛、口から奥へ読み下せば、名前は違はぬ自筆に印行。是りや如何してと、顛倒敗亡。

六郎兵衛「ナ、能く見たか。旦那モウシ、御覽じたら取つて置かしやつて下さりませ。』
六郎兵衛「イヤ、コレ、其處な腥い中の力の強い人、ナント能う聞いたか。些と投げて見る氣は

ないか。ハ、何程關取でも、騙の腰押は出來ますか。ハハハハハ、違ひさうなものぢやと、旦那も被仰ツた金高。へへ違ひのないが私の正直。まア斯様見た處では、八郎兵衛は色事師。此の六郎兵衛は芝居ならば、手代敵と云ひさうな男振さ。見掛によらぬが、人心で御座ります。嫁入道具の延びる様に、計略んだ八郎兵衛、ぐつと詮議し詰めたならば、親御様まで、お顔の捨たる様な事もあらうかえ。』と、へうまづけは工左衛門、八郎兵衛をはつたと睥め、工左衛門『心で譽めたも面目ない。さア、後百兩は、何にした。榮三郎を出しに遣うて、奴れは六郎兵衛を騙つたか。』と、律義一遍燃え立つ腹立、八郎兵衛『いえ、モウシ、天道様に蹴殺される法もあれ。借りた金は百兩なれど、情ないは、アノ證文。』

六郎兵衛『まだ抜かずわい。書物が物言ふぞよ。一金二百兩也。え、大騙めを、旦那は手緩い。悪口ほざいた顎を。』と、起ち蹴に蹴やる六郎兵衛、榮三郎は中に分け入つて、榮三郎『親方が養うて置く奉公人、假令悪からうが朋輩の身で、何故踏んだ。素込んでをらぬか。イヤモウシ、親父様、八郎兵衛に是れ程も、横着は御座りませぬ。皆私が。』

八郎兵衛『ア、コレ、モウシ、若旦那、夫りや何被仰る。無實を受けても、言譯のない八郎兵衛、所詮身の垢は抜けませぬ。ナ、必ず、私が志を、アイヤ、私が身の越度、何にも言はずとく。』と、目顔で知らす主思ひ、無念泪に暮れ居たる、様子ありげな此の場の體。妹背山も無念ながら、齒を喰ひしぱり扣へゐる。番傘お傘は延び欠伸。お傘『長たらしい、其方等の採事が濟んだらば、五十兩請取らうかい。』工左衛門『オ、相對したこと遣りませう。』と、戸棚こて、工左衛門、良助『お待ちなされ。』と良助は、番傘が側近く、良助『其方が拾うた證文は、僅か紙一枚なれど、即ち百兩の金高ぢやな。』お傘『アイサ、左様で御座りやす。百兩拾つて來て深切代り、五十兩貰ふので御座んやす。』良助『フム、尤も併し、金子一兩以上を拾へば、其の所の司に訴へ、下知を待つが國の掟。其方も司に、届けたか。』

お傘『いえ。』
良助『ウム、すりや掟を叛き、金子五十兩強請り取る心で來たな。』

お傘「ア、これさ、モシお侍さん、埒もねえ。掟とやら置番とやらは、夢にも知らず。證文を落して、定めて難儀と持つて来たは、深切と云ふものさ。」

良助「黙りをらう。」

お傘「アイ、黙りやした。」

良助「五十兩取るが何で眞實。奴、何様で痛いめさせずば。」

お傘「ア、コレくくく、お侍さん、町人さんと違つて、お前は強氣と氣が短い喃。姫御前を捕へて、痛いめさせようとは、夫りやア餘り。」

良助「ヤア、何が餘り、大騙め。其處一寸も動きをるな。」

お傘「ハイ、動けやせん。」

良助「コレサ、六郎兵衛、お身は此の女と懇意ぢやな。」

六郎兵衛「ハイ、いえくくく、滅相な。ツイぞ見たこともない女中。」

良助「お言やるな。現在證文を盗まれた、榮三郎や八郎兵衛に、手もさへ爲せぬ此の證文、其の方計りに快う、サ、何様して渡した。」

六郎兵衛「サ、夫れは。」

良助「何と肝に應へるか。」

六郎兵衛「同じく肝に應へました。」

良助「ナニ、八郎兵衛、手附證文とやらは其方が物、確りと取つて置きやれ。是れから此の女めを括り上げ、何も彼も。」

工左衛門「ア、イヤ、モウシ、良助さま、お世話の段は有難いが、見れば賤しい女の身、左様なされて下さつては、工左衛門が名さへも立ち、其の上に何や彼やと、缺點が出ては猶以て。」

良助「如何様なア、然らば其の分。ハテ、仕合せな女めぢやな。」

妹背山「イヤ、モウシ、良助さま、此の女めは、大抵太い奴ぢや御座りませぬ。此奴めは、妹背山が致し様が。」と、懐より錢を百文取出し、

妹背山「ヤイ、お傘、我が名の傘の臺が、飛ぶ奴なれど旦那殿の、御心好いお蔭で、其の分に濟ましてくれる。之を持つて失せをれ。」と、憎い面殴る百の錢、

お傘「ア痛く、關取さん、オヤ、氣障だ喃。折角おたのにした五十兩が、ちやアふうになつた後で、お定りの百さうとは、只ひとりときり鐵砲一挺。」
良助「歸らずば、奴、引括つて。」

お傘「これさ、モシ、お侍さん、行くまいと言ふにこそア、浮世だなア。忌々しい。捨つてしまふ百兩を、元の儘に生けてやつた、其御禮が鐵砲一挺。鎌倉の網打場から、馬駕籠に乗りちらし、中食代から酒の錢、當飲のいつきんいつきん、湯水の様に錢を遣つて來た所が、鐵砲一挺五十兩を、棒に振らせて其の上を、暫時喃と、慘い所から鐵砲一挺、お定よりの百文ころり、聲を上げ代、しかたがねえ。何を苦よく川端柳、みじめな憂きめを見て歸る、うんてれがんのどうちくしやうに嵌められた。」と、負けぬ顔して鼻歌交り、出で行く後に工左衛門、八郎兵衛を引付けて、

工左衛門「幼少から使うた奴れ、不便には思へども、大枚の金の引負、朋輩への掟が立たぬ。幸從兄の妹背山、此方に此奴を預ける程に、神奈川臺の親、太郎兵衛と相談して、引負に立てさッしやれ。まア、夫れ迄は些との間も、二階住居。六郎兵衛も主人の金を、きましに

貸したは同じ引負、奴も亦關取へ、今の間預ける。きつと次の間に、慎んで居い。ヤ良助さま、嘸御退屈。奥で一献召し上られい。お話し申す事もあり。」

良助「如何さま左様仕らう。え、不届きな弟め、打放したくも思へども、工左衛門殿のお心に面じ。」

工左衛門「サササササ、何事も奥でお話し。榮三郎御供せい。二人は行け。」に、是非なくも、悄然二階へ八郎兵衛、舌舐めすりの六郎兵衛は次の一間へ、良助は親子打連れ入りにけり。

阿妻八郎兵衛
阿傘六郎兵衛

五色潮來艶合奏

上之卷 終

阿妻八郎兵衛
阿傘六郎兵衛

五色潮來艶合奏

中之卷

式亭三馬作
歌川國貞畫

四

夢にもしら髪あはれの古着屋ふるてりや太郎兵衛たろうべゑ、商あきなひ旁々かたぐり門口かどぐちから、小腰ここしを屈かめて、

太郎兵衛「ハイ、何方どなたも御變おかりも御座ごりませぬか。八郎兵衛はちろうべゑが親共おやどもで御座ごります。ホウ、是れ

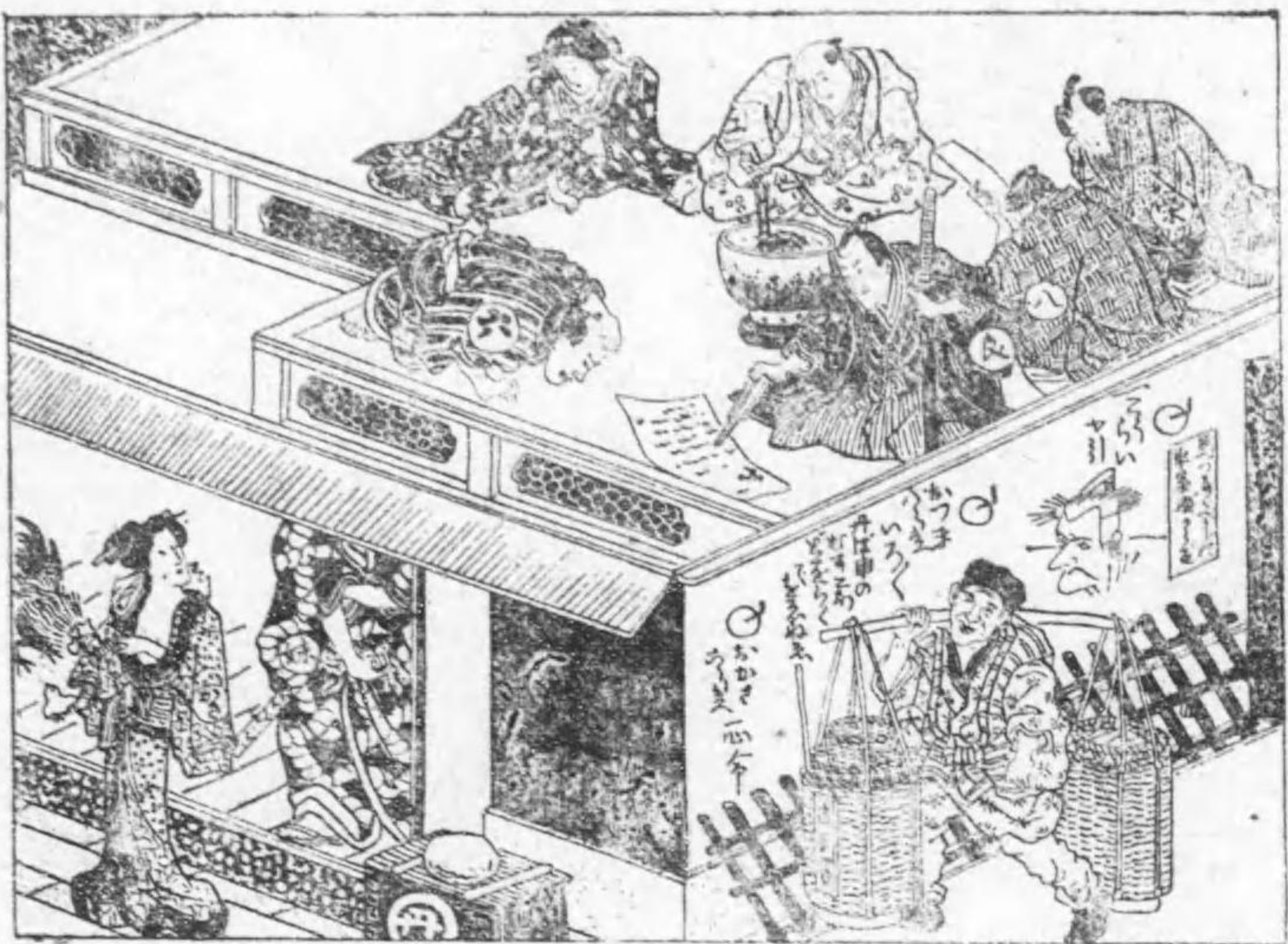
は甥おひの殿とのの關取せきとり妹背山いもせやま、ハテ、能よう來きてぢや。變かはることもないのかいやい。」

妹背山「ヤ、叔父御おぢいの太郎兵衛たろうべゑさま、能よう御座ごりました。何時いつ見みても御達者おたしやで。私わしも大おほきに、

御無沙汰ごぶさた致いたしました。」

太郎兵衛「ア、何なんのく、夫そりや五ごぢや。トキニ、改あらめ言いふぢやなけれど、其方そなたの妹いもお袖そでめ

は、己おれが妹いもの生うんだ子こ故ゆゑに、小ちひい中うちから養子やしよめ嫁よめに貫もうて、己おれが實子じつしの八郎兵衛はちろうべゑとは嫁許いひなづけ、



末々すまぐれ女夫めうとにするまでは、八郎兵衛はちろうべゑは此この家やの

旦那だんなさまへ、子飼こがひからの御奉公ごほうこう。トキニお袖そで

めも、もう彼かれ此これ好いい娘盛むすまりを幸さいひ、八郎

兵衛べゑが年季ねんきも此この秋限あきかぎり。夫それ故ゆゑ旦那様だんなさまへ御

願ねがひ申まして、今いまから徐々そろそろ御暇おひま貰もらふ下細工したさいくが。

お袖そでも随分ずぶん健全けんぜんな程ほどに、必かなず案あんじやるな。」

妹背山「ホウ、夫そりや御年寄おとしよりの御苦勞ごくろうに、能ようこ

そ御座ごりました。が、氣きの毒どくなは。」と、言い

ひ兼ねかねてもぢくすれば、

太郎兵衛「何が氣きの毒どく。汝われと己おれとは叔父甥おぢいの仲な、

云いはば親おや子こも同然どうぜんぢやに、無沙汰ぶさたしたとて

何なんの氣きの毒どく。」

妹背山「さア、氣きの毒どくなと言いうたは、八郎兵衛はちろうべゑ

が身の上。』

太郎兵衛「ヤヤ、夫りや何様して。」と、早吃驚。

妹春山「百兩の金の間違から、何やらもやくした出入。其の譯はまア、奥で。」

太郎兵衛「夫りやまア、何様な失敗で、何たる辛いめ見る事か。」と、草鞋解くく打連れて、一

間の中へ入りにけり。間毎間毎に行燈照らす、下女丁稚引違へて、出で来るお妻、二階を

密と八郎兵衛、近寄る間もなく泣く泪、胸を撫で下し、

お妻「今更何も言ふことない。二人連立ち、此處を退き、何様な山家の奥になと、女夫になつ

て暮らしたい。連れて退いて。」と一筋に、思ひ詰めたる娘氣の、遣る瀬涙ぞ理なる。

八郎兵衛「お志は嬉しけれど、御恩を仇で報ずる戀路、覺えなき引負旁々、旦那の立腹思ひ

廻せば、お前を連れて走つては泥の上塗。一先在所へ立歸り、身の垢を清潔洗ひ、旦那の

御機嫌直つた上で、ハテ互の心さへ變らねば、末は女夫にならるゝ事、六郎兵衛めが悪工み、

突殺してと思へども、年寄つた親に難儀を懸け、逆ま事は不孝と思ひ、胸を擦つて居るも孝

行、親御様へ孝行や。私が爲と思召し、今暫時の御辛抱、頼み上げます。」と、言ふも泪

に曇り聲。お妻も泪に暮れながら、
お妻「其方の爲とあるならば、病氣と云うて嫁入の、止む様にして待つてゐる。早う女夫にな
る様に。」

八郎兵衛「オ、御得心が行たか。其の御心なら人の見ぬ間に、さアく、泣き止んで、さア
さア、奥へ。」と、せり立てに、離れかた野の雉子より、妻故身をも忘られて、今日別れて
はまた何時か、逢ふよしもなく泣く泪、せつない戀といちらしく、氣は浮かねども忍び音の、
泣く泣く奥へ入りにけり。

浮かく出て来る六郎兵衛、何やら人聲立聞けば、紛ふ方なき娘のお妻、障子の穴より透
し眺めて、
六郎兵衛「さアく、旦那さま、良助さま、誰も彼も來たりく。」と、喚くに吃驚駈け出る家
内、工左衛門は驚き顔、
工左衛門「けたたましい、何事ぢや。」

六郎兵衛「イヤモ、何事どころか。アノ、障子の中にお妻さんが。」と、言ふ口ちやツと押へる

良助。

良助『何、仰山な、六郎兵衛、新調した嫁入道具、這入つて見たお妻どの、誰と見なして、わッばさッば、ハテ、粗相な。』と、突き飛ばし、

良助『お妻どの、さア、此處へ。』と、手を執り出す鰐の口。六郎兵衛は怫然として、

六郎兵衛『ヤ、これはく、これはく大變。や、可笑しい事を言ふお方、お妻さん計りなら構はねど、まだ一人ゐる様子、ドレ、引摺り出して見せようわい。』と、行くを透さず腕首

取り、ぐつと捻ぢれば、

六郎兵衛『ア痛く。是りや何様するのぢや、良助さま。』

良助『イ、ヤ、何様もせぬ。萬一まだ此中に、男たいしたもの居らば、頼みまで相濟んだ、主あるお妻は不義密夫。主人を木の空へ上げる訴人は、同じ仕置の主殺し。大身鎗が喰ひ

たいか。』

六郎兵衛『え。』

良助『サ、其處が不便さ。此の通り固より此處に人はない。狼狽者。』と、弟をかばふ恩返し、無

難に納る情の頓知、忝け泪に親子三人、道具の内外太郎兵衛親子、心で拜む計りなり。

工左衛門泪を隠し、

工左衛門『折角拵へた道具なれど、悪い疵があつて氣にいらぬ。ヤ、太郎兵衛、其方の商賣は

古着買、何と彼の道具、何も彼もなッ、引くるめて。』

太郎兵衛『ハイくく、買ひませうで御座ります。直段は定めて二百兩。』

工左衛門『否々、賣ると買ふとは半分價、百兩に負けてやらうさ。高からうけれど左様賣るが、外々への見懲。シタガ、金の持合せはあるまい。神奈川へ戻つてから才覺さッしやれ。』

太郎兵衛『ハ、ア、何がさて、身の皮を引剥いでも、可愛い道具の此代物、賣つて下さる旦那の

御恩、何方の御恩も、ヘツエ、命の繼、コレ、破れぬ中に芳之助、我身の力で、彼の道具

此處へ。』

妹春山『心得ました。ア、何から何まで、お慈悲の餘つた旦那の御捌き。此の道具も、ナ、ソ

レ、買ふ人も粗末に思うてはならぬぞえ。』と、道具を引立て八郎兵衛を、陰に隠して持ち出す門口、我が子を包む目を包む、泪を包むお妻が名残、何と言葉も有難泪。八郎兵衛連れて

門に出で、

太郎兵衛『古着買はう。古着。』と、かほと顔とに己そのの、辭儀もなく、立歸る。後は互に何事も、言はぬ色目を押隠し、

良助『大い御馳走、お暇。』と、同じく出づる良助が、袖を控へて工左衛門、

工左衛門『母もない獨りの娘、不具な子が可愛いと、親の因果を御存じあつて、へッエ、有難い御志。』

良助『イヤサ、其許にも不所存な弟めを、御不便餘るお心遣、忝いと申さうか、兄親の心中を。』

工左衛門『ア、イヤ、夫れは冥加ない。子故に泣かぬ親もない。』と、後は互に目禮計り、歸る良助止る關取。門送りして工左衛門、

工左衛門『今夜は誰も夜だ、疾う寢て、門口に錠卸せ。』と、主の言付六郎兵衛、戸口に蝦夷錠屈んだ腰、さする二人の子を連れて、奥へ入れれば手代ども、皆部屋々々に入りけり。更け行く夜半の鐘故に、心も濟まぬ榮三郎、密と奥より立出でて、

榮三郎『八郎兵衛が難儀も己故、殊に彼が居ねば、もう後金の工面も出來ず、お親父さまや、兄ぢや人に、此の身の缺點を見出されては、何様も生きては居られぬ命、大磯へ行って古今と一緒に、南無三寶。』

潜りに錠前人音すれば、火を吹き消し小陰に忍ぶ、身は一つ思ひは一つ、忍び出るお妻は帯引締めて、

お妻『何様思うても、八郎兵衛に別れては、何と生きて居られう。女の念力神奈川へ。』と、戸口に掛れど明かぬ錠、

お妻『え、鈍な。是りやまア、何様したら開こぞいなア。』

始終聞き居る六郎兵衛、態と足音どつしどし。はつとお妻は手燭の火、吹き消し後は眞の闇、六郎兵衛『アア、何やら表が、ごそくする。戸を開けて見てこまそ。』と、二人に聞けがし錠取り出し、捻ぢ開くる門の口、表に疾くより番傘お傘、

お傘『六郎兵衛さんか。』

六助兵衛『お傘か。コリヤ、コリヤ、ナ合點か。娘は駈落させて、鎌倉でこねさせるわ。お娘

が出たら。』

お傘『オット、合點、引傾けて己らが穴へ。』

六郎兵衛『泥水喰はせ、金暖まる。』

お傘『巧い。』

六郎兵衛『コリヤ、叱。』と、私語き合うて六郎兵衛、内へ這入つて、

六郎兵衛『エ、何でもなかつた。ドリヤ寝よう。』と、勝手へ行けば榮三郎、天の與と戸を引

開け、大磯指して走り行く。お妻も同じく探り出る、門に待つたる悪婆のお傘、

お傘『さア、して遣つた。』と、引拂ひ行く。後より妹背山、お妻を奪ひ取り、お傘をば、死に

入る計り投げ付ける、音に駈け来る工左衛門、手燭差出し、

工左衛門『關取殿か。』

妹背山『旦那さまか、お妻さんを渡しました。必ずお出しなされますな。』

お傘『夫れ遣つては。』と、悪婆のお傘、飛んで掛るを擔ぎ投げ、納戸を飛び出る六郎兵衛、出さ

じと心得門の戸びツしやり。

妹背山『動きやアがるな。』

畢竟如何。且次回分解を聴け。

五

爰も名に負ふ鎌倉の、七里ヶ濱の網打場、局長家の一廊、按摩拳引そより節、おでん白菊
大福餅、摺れ違うたるぞめきの客、ツイ一限りに百の錢、おき手拭や頬被り、三尺帯のぐる
ぐると、まはりなんしの一群が、一寸一廻り二長家、顔をみながや四ツ五ツ、時の拍子木金
棒の音も、隙なき賑ひなり。

新内節へ今日は取り分け種々と、言ふ事聞く事澤山ある。

と、そより半分新内節、

お傘『左様言ふ聲は、六さんか。』と、手拭取れば六郎兵衛、

六郎兵衛『エ、六さんかも凄じい。お轉婆女のお傘婆、も些と手強いかと思ひの外、尻腰のな

い莫連尊者。エ、汝はく、胴欲な者ぢやぞよ。何も彼もぶちまけてしまったので、己

は丸裸で追ひだされ、折角しよこなめた金までも、巻き上げられたわい。』

お傘『されば其の事さ。私もあくぞもくぞを、吐く氣はねえけれど、良助とか云ふぎつとめに、天井を見た上で、關取の妹背山めが強敵に、せごしやアがるから證文を、削ぎ繼にしたことと、娘御や八郎兵衛めを敲き出して、お前と夫婦にならうとまで、工んだ諸將を、皆明け出してしまつた。でんど沙汰になれば、二人ながら首はころりだが、左様しては名も出る。第一は殺生だと、丹波屋の藥罐老爺が言つたので、未だしもお命は御息才さ。お前も首尾能く追ひ出されたと聞いたが、ちやんころのねえのは、首のねえより増だと思つて、もうくは是れに斷然懲りて、地震の子とでも倉替しなんし。おや、馬鹿らしい。』と、長煙管吸ひ付け煙草の氣散じなり。

六郎兵衛『如何様お主が言ふ通り、其様なら是れから、今までの心を入れ替へて、誘拐やら、人買やら、些と正直な渡世をしようかい。併し首は満足でも、空腹くは死に入る様な。臺屋へ茶飯を取りにやれ。餛飩も御座れ蕎麥も宜し。一斤く、尙結構。是れから長家の惣仕舞をして、些とまん直に洒落れようか。ソレ、鍋焼よ、ふぐ汁よ。』と、混雜返して大騒ぎ、

襖戸障子引外して、鴨居へ上ぐれば廣座敷、夜分の體とぞ變りけり。

星月夜鎌倉山に跡垂れ、八幡宮の宮居前、櫓太鼓のとうからと、鳴り響きたる勸進角力、今日十日目の結びとて、見物群集の其の中に、丹波屋の榮三郎、住み來し家居脱け出でて、逢ふこと難き大磯を、是非なく過ぎて鎌倉に、追手を忍ぶ頼冠り、隠せど夫れと忘れぬ、姿見るなり走り來る、古今は裾もほらくと、

古今『逢ひたかつたに、何様ぞいの。』と、取付き緋れば、吃驚し、

榮三郎『己は、己ぢやが、其方は又、何様して知つて此處へ來た。』と、問へば返事も泪聲、古今『先頃別れた其の日から、指折る日數約束の、日限も切れて親方さん、何様の此様のも無理ならず、便のないはお宿の不首尾と、思へば夜の目も逢ふことか。此の頃の噂には、鎌倉にと聞いた故、逢ひたい見たいの念が届き、今日の十日め、女子も見らるゝ角力見にと、山口巴の客人と、此處へ來たのも有難い、八幡さんの引合せ、健全な顔見て嬉しいが、此のまア、寢れたことわい喃。』と、問ふも語るも泪なり。

榮三郎『番頭の六郎兵衛が、金を貸したは悪工み、家へ歸ると八郎兵衛は、種々の難儀に逢ひ、

己がことも身に引受け、到頭親が預かつて、神奈川へ連れて往ぬる。彼が居ねば後金の、
工面もならず、己がことから難儀をかけ、二度顔も會されず。所詮其方に添はれずば、死ぬ
る覺悟も豫ての約束。途中で逢うて此の事をと、思ふた念力逢うたれど、味きない身の上。』
と、差俯けば手を取りて、

古今「嬉しう御座んす、忝い。お前一人死なしやんして、後に残つた悲しさは、何の様にあ
ろぞいな。ア、一緒に死にたい。殺して。」と、互によよと泣き伏して、咽び入りたる計り
なり。疾くより後に關取の、妹背山芳之助、

妹香山「死ぬることも何にもいらぬ。世間晴れての女夫にします。」と、言ふに吃驚、
榮三郎「ヤア、其方は關取、面目ない。』

妹「山」アイヤ、何にも氣の毒なことは御座りませぬ。若いお方には珍しうもない事。ハテ、
互に思ひ合うた仲、命盡にも及ぶ事をお出入の私が、何見捨てて居りませう。何も彼も
私に、さつぱり委せて置かッしやりませ。金丁面して身請をすれば、直に天下晴れての女夫。』
榮三郎「さア、左様行けば宜けれども、肝腎金の出所が。』

妹香山「お氣遣なされますな。身不肖ながら、妹香山で御座ります。何様か才覺の、手段もある
。で御座りませう。シタが、其の金の出来るまで、古今さんを、左様して置いては、外へ遣
らうと喧しからう。まア、心中事は取り措いて、當分連れて大磯を、駈落なされ。落著先が
御座りませうぞえ。』

榮三郎「さア、落著當と云うた所が。』

八郎兵衛「イヤ、外でも御座りませぬ。私が隠匿ひませう。』と、小陰を出づる八郎兵衛。

榮三郎「ヤア、八郎兵衛か。』と、逃げ退くを、

八郎兵衛「ア、コレモウシ、主従と云ひ常平生、仲の好かつた私に、何故氣を置いて下さり
ます。え、聞えませぬぞえ。』

榮三郎「イヤ、さらさら氣を置かねども、其方に大い難儀を掛けて。』

八郎兵衛「イヤ、夫りや御氣遣なされますな。良助さまの御陰で、六郎兵衛が悪工み、化が露
れ追ひ出される。又關取の糺明で、お傘が口から一白状、何も彼も露れて、私が垢は抜
け、金のことも濟みました。なれどもお妻さまと不義あれば歸參は叶はず、お暇貰ひ親里の、

神奈川に居れど、お前の家出の様子を聞き、古今様を慕うてと、此の間毎日々々、鎌倉中を尋ね廻り、此處でお目に懸つたは、八幡さまのお蔭。ハテ、手附の證文は、握つて居る。後金の才覚と、云うた處が大枚の六百兩、關取と共々に工面して、女夫にしませう。斯様言ふ中も心が急ぐ。關取の言ふ通り、人の見ぬ間に此處を斷落ち、さア〜、早う。』と、勸に嬉しく、

榮三郎『さア〜、手強う忙しうなつた。古今、其方も左様する氣ぢや喃。』

古今『左様する所か。お二人さん、大いお世話に。』

八郎兵衛『其様なら、早う。』と足早に、二人を追立て關取には、挨拶徐々別れ行く。

金藏『古今さん〜、何處へ行てぢや。』と尋ね出で来る巴屋金藏、帮間仲居も微醉機嫌、角力

場より出る千鳥足。お妻は家を脱け出でて、戀しき人の在所をと、迷ひ來る中七里ヶ濱、網

打場にて見付けられ、心も空に逃げ來り、

お妻『情ぢや、何卒隠して。』と言ふもおど〜震ひ聲。

金藏『其の譯如何に』と尋ねれば、



お妻『其の譯言ふも恥しながら、男を尋ねて來た所、父さんに追ひ出された、番頭の悪者が、私を捕へて誘拐すと。』

金藏『オット、もう宜し。夫れで聞えた。其處らは引かぬ、山口巴の金藏。コレ〜、皆も。』

皆々『オット。』と、心得、茶店の陰に隠す中、息を限りに駆け來る六郎兵衛、

六郎兵衛『コレ〜、十六七な娘が、只今來た筈』と、尋ねる中と教へる隙、金藏が目くば

せに、遣手は茶店に有合す、荒繩たぐつて、金藏は六郎兵衛が帯に、結び付け立木に繋ぎ、

金藏『夫れ。』と、掛聲心得て

遣手「さア、娘御。」と、手を取つて駈け行く、遣手を見付ける六郎兵衛、
六郎兵衛「奴、逃がさうか。」と、駈け出す拍子、繩はふつつり機みを食ひ、傍なる池へ逆どん
ぶり、

金藏「夫りや陥つた。」と、驚く金藏、
金藏「此處構はずと行け。己れもいけ彼奴も池。」と、駈け出す折柄角力場の果て太鼓、うぬが
どんからくと、音を聞き捨て走り行く。

阿妻八郎兵衛
阿傘六郎兵衛

五色潮來艶合奏

中之卷 終

式亭三馬作
歌川國貞畫

阿妻八郎兵衛
阿傘六郎兵衛

五色潮來艶合奏

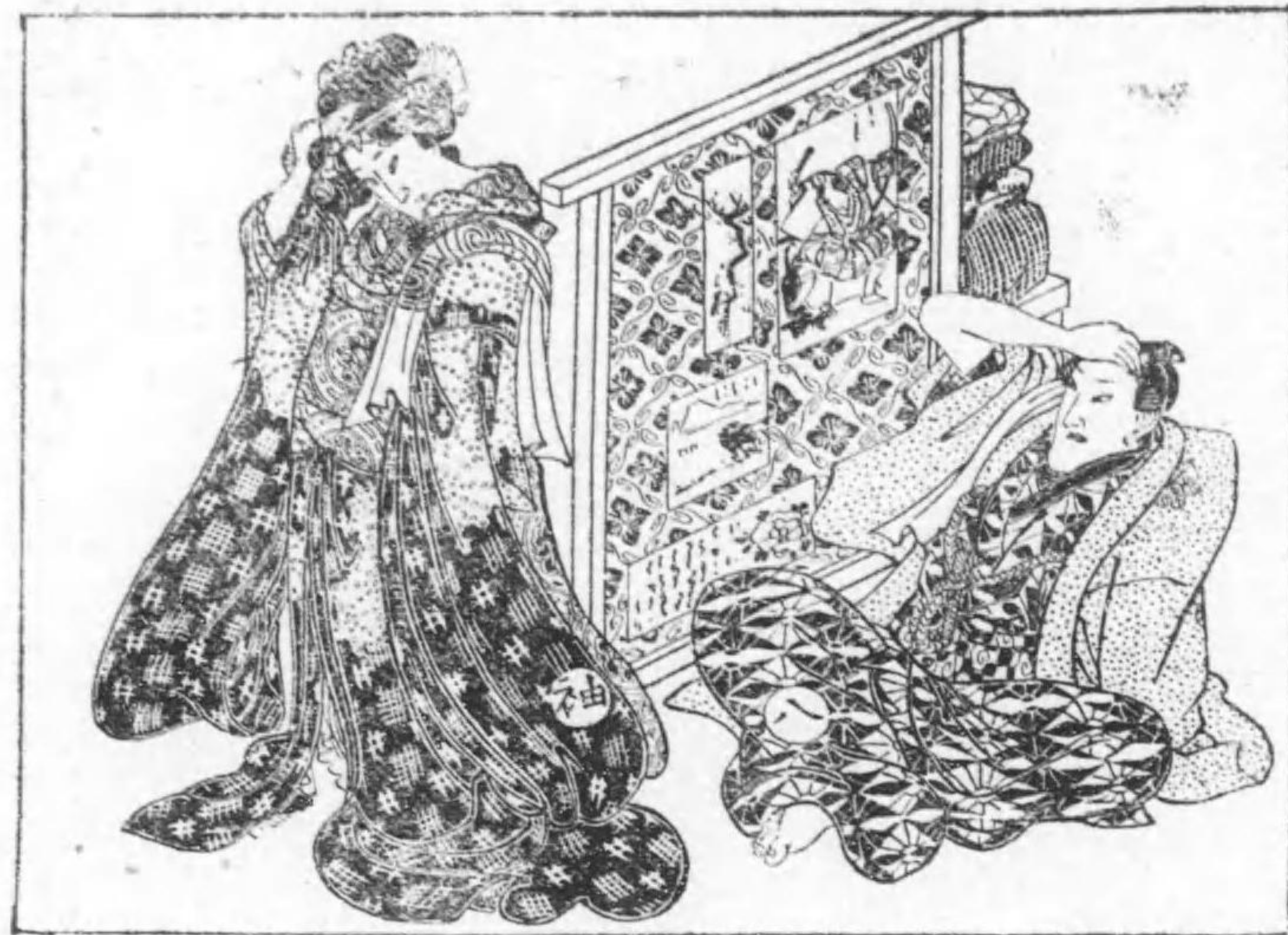
下之卷

六

東海道に隠れなき、神奈川臺の濱側に、幾年古着商賣の、太郎兵衛が留守の間は、娘お袖
が針仕事、所帯の足に新物の、仕立手際よき發明者、何かな見出し嗅ぎ出さんと、徘徊來掛
る番傘お傘、

お傘「姉さん、御無心ながら火を一つ。」と、煙管片手に上り口、

お傘「此のまア、暑いに能く御勢が出やす喃。太郎兵衛さんは御留守かえ。八郎兵衛さんは何處
へ。小田原のお客や、大磯のもお健全で居なさるかね。」と、押掛け喰はする繰出しに、乗
らぬお袖は呆れ顔、



お袖「つひに見た事もない形して、駭々しい言葉附。そしてお客の大磯のと、此方さん氣違ぢや御座んせんか。お客くと言はしやんすは、旅宿屋と門違か。上の町へ行かしやんせ。人の家をきよろくと、合點の行かぬ目附のお人、早う行んで貰ひませう。行にやうが遅いと八郎兵衛さんを、起すぞえ。」と、病附かされ、

お傘「や、此奴は強い。顔に似合はぬお娘御さん。ア、此様な所にべら付いたら、尻の毛までも。アハハハハ、一昨日さばえ。」と立歸る。晝寢の目覺す八郎兵衛、

八郎兵衛「ア、強う肩が張つた。些と揉んでたもらぬか。」

お袖「アイ、私こそ縫ひ物で、肩が痛いに、人のけんべき所ぢや御座んせぬ。」

八郎兵衛「ハテ、愛相のない物の言ひ様、コレ、悪い合點ぢやぞや。其方の母御お常様は、親人の妹御、御二人の子を持たしやツたが、兄は關取妹背山芳之助、妹娘の其方は、幼い中から此方へ貰うて置かれたは、末々己と嫁合す了簡。知りやる通り小田原の、もやくも埒明いて戻つたれば、コレ、女夫ぢやないかい喃。夫れにまア、側へ寄れば、びんしやんく。物を言へばもぎどろに、相手にならぬは何様した心か。些慎んだが宜いわい喃。」と、言へば

此方は情なくも、

お袖「可笑し理窟を言ふお方、私は此の家へ子に貰はれたから、お前とは兄妹。じだらくなこと措かしやんせ。阿房らしい。」と、言ひ捨てて、納戸へばたくさ走り行く。八郎兵衛は眉に皺。

八郎兵衛「強う工而の違うたこと。もう此の手では行くまい。」と、眩きながら起ち上り、

奥の障子を押開けて、

八郎兵衛「此處へく。」と、手招に、奥より密と榮三郎、古今も共に立出づれば、八郎兵衛「お二人ながら、嘸氣詰り、幸ひ人通りもなし、些と氣晴し。」と、煙草盆。古今

は萎るゝ顔を上げ、

古今「今に始めぬお前のお世話、所詮添はれぬ仲なれど、是非にとあるゆる今日迄も、命永らへ居たれども。」

榮三郎「オ、此の榮三郎も同じこと。疾くに死んだら此の様に、笑しな目にも逢ふまいに。」

と、悔み涙を打消して、

八郎兵衛「ハテ、益事もない。私が従兄の關取も、共々に請合つたお二人の事、後金さへ拵へたら、世間晴れての女夫。小田原の事も詮事の仕様は様々、金の才覚も、大方に心當が御座ります。今少しの中隠れて御座れば、思ふ儘になります。」と、當はなけれど出放題、心休めを言ひ散らす、折しも表の人音に、障子引閉て何氣なう、煙草燻らし居る所へ、古今が親方三浦屋四郎八、番傘お傘に案内させ、すつと這入つて上り口、

四郎八「八郎兵衛どのは、其許で御座りますか。私は大磯三浦屋の四郎八と申して、即ち榮三さまの相方、古今が親方。此の間鶴ヶ岡へ、お客に附いて参つた古今、其の日から行方が知れず、方々と尋ねましたが、知れぬこそ道理、此處の内に埋んであるげな。尤も身の代

百兩の手附は、取つたれど流して、外のお客へ、遣らねばならぬ。さア、古今を出さツしやれ。美し盡で濟まして行かう。」と、柔かに出る上手者。八郎兵衛は素知らぬ顔、

八郎兵衛「イヤ、コレ四郎八どのとやら、假令近付でも、大磯に居る奉公人、神奈川から呼びにも、行くまいし、又固より彼の花魁が、此處を知らう筈もなければ、何で此方に埋んで置かう。中推量にやつて見る氣か。覺えもないこと措いて貰はう。」

お傘「コレ〜八郎兵衛さん、イヤ、八郎兵衛、私が手前ものぢやアあるめえし、餘り鐵砲放しなさんな。先刻来て古今が居ることを、がんばつて置いたわな。否と云はさぬ證據と云ふは、コレ、此の裏付け。四郎八さんが、目覺えのある古今どんの履物、庭にあつたを巻き上げたが、何と是れでも抗ふか。もう四も五もあるめえわ。踏ん込んで奉公人を、引摺り出して連れて行く。」と、奥へ行かんとする足首、攫んでぐつと締め付ければ、

お傘「ア痛〜。是りや何様する。」

八郎兵衛「オ、サ、先頃ぞや、鎌倉佐助稻荷の開帳場で、ばつたりしたのも、大方奴れ、小田原へうしやアがつたも、騙の頭取、身體に首の付いてあるは、旦那の了簡。夫れに此處迄

付き廻つて、親方殿の腰を押して、見事家探しして見る氣か。』

お傘「オ、して見せう。』と、振り放し駈け入る所を引据ゆれば、これはと親方立騒ぐを、押し
静めて八郎兵衛、

八郎兵衛「證據があれば是非に及ばぬ。成程古今どのは、隠匿うて置きました。』

お傘「さてこそな。』

八郎兵衛「が、引きざらつたと思召しては、お腹が立たう。全く左様いふ事ではない。榮三さま
まとは深い仲、後金が出来ねば添はれまい。外へ行くより心中と、若い同志の無分別。夫
れが否さに私が、埋んで置いたも金を拵へ、御損は掛けぬ積りなれば、コレ、何卒金の調達
まで。』

お傘「ヤア、ならぬ。四郎八さん、待ちなさんな、待つめえによ。素敵な目に、度々逢は
せた返報には、親方が待つても、私が待たぬ。アイ、私が待ちやせん。ハテサ、わツばさ
ツばと言はずとも、届ける所へ断つて、人の抱へた奉公人を、巻き上げた八郎兵衛、闇い所
へたゝき込むが、一も二もなく手短だ。左様思やアがれ。八郎兵衛。』

四郎八「さア、左様するも氣の毒なれど、金も渡さず奉公人も、戻さねばお家主へ。』と、起つ四
郎八。戻つて戸口に立聞く太郎兵衛、袖を控へて、

太郎兵衛「ママママ、まア、お待ちなされて下さりませ。成程金を立てませう、と申しても今は
無い。御不承ながら日暮迄、近所に御座つて下さりませ。違ひなう後金の、耳を揃へて、
持つて参らう。』

四郎八「如何さま年寄の詞に、偽りもあるまいが、古今が身請は、七百兩、手附を引いて後金
が、大枚の六百兩。』

太郎兵衛「サ、夫れ合點、もしや否と被仰れば、一人ならず二人まで、びりびりびり。ア、大
きな殺生さ。六百兩棒に振るより、まア、半日の御了簡。』と、否と言はさぬかすがい臺詞、
誠に年は年丈なり。』

四郎八「オ、聞き届けた。待ちませう。其様なら日暮には違ひなく。コレ、宿は上宿、金澤
屋、近付故彼處に居る。コレ間違はぬ様、合點か。』と、詞詰めして立出づれば、後に残る
も氣味悪く、お傘も打連れ出でて行く。溜息突いて八郎兵衛、

八郎兵衛「日暮までとの請合は、心當でも御座りますか。」
太郎兵衛「ハテ、當がなくて請合はるか。金才覺に就いては、其方にも川がある。何處へも、行かずと此處に居や。お袖は納戸に居るのである。徐々工面は酒肴、拵へるのが序開ぢや。ア、疾うから此の氣が附かなんだ。」と、獨り呑み込み太郎兵衛は、あたふた納戸へ入りにけり。

七

遠山嵐近嵐、今日の熱さを漸うと、凌ぐお妻が旅始め、神奈川臺に差掛り、尋ね廻りし戀人の、家居は此處と軒の下、内を見やれば八郎兵衛、しよんぼりとした立姿、見るより思はず走り込み、
お妻「逢ひたかつた。」と、縄り付き、とかう言葉も泣く計り。八郎兵衛は興醒め顔、
八郎兵衛「今日此の頃は、定めて鎌倉へ縁付いて御座つたであらうと、思ひも寄らず、家を出て大膽な獨り旅。マ、何様して此處へ。」と言ふ顔を、怨めし相に凝視り詰め、

お妻「何様して來たとは胴欲な、其方が行にやつた跡追うて、漸う忍び出でたれど、首尾悪う捕へられ、日の目も拜まぬ座敷牢、全一月を泣き暮し、一層死なうと思へども、ま一度逢ひたさ添ひたさの、念が届いて今日の今、逢うて嬉しい顔見たに、ツイ可愛やと、言ひもせず、縁付いて居たかとは、聞えぬわい喃。」と、身を悶え、怨み泪に暮れ居たる、背撫で下し共泪、

八郎兵衛「見る影もない私を、夫れ程慕うて下さるゝ、お志は忘れねど、忍び逢うたは互の若氣、殊に恩ある親方の、お顔を汚し墮落させ、嫁入を妨げて、何處の浦で連れ添ふとも、天道様の御罰にて、安穩に身が立たうか。此處を能う聞き分けて、私が事は思ひ切り、御宿へお歸り遊ばして、嫁入りなされて下さるが、八郎兵衛が爲。お身の爲、親御の爲。」と、言ひさして、後は言葉もなき沈む。お妻は顔を振り上げて、
お妻「お主とは何事ぞ。勿體ないと思へども、人目があれば詫もなう、八郎兵衛何様ぢや斯様ぢやと心で拜んで言うてゐた。まだ其の様な心の隔て、親父さんの腹立を、思へば疾うから死なねばならぬ。其處を振り捨て、此様した憂目も苦にならぬとは何様したことぞ。女夫に

なるが否ならば、一層手に掛け殺して。」と、縋り付いてぞ泣き居たる。納戸に親の咳拂ひ、南無三寶と嘯いて、無理にお妻を押入へ、あたふた隠す間もなく、太郎兵衛は酒肴携へて、納戸を出で、

太郎兵衛「お袖く。」と、呼び出し、

太郎兵衛「改めて言ふには及ばねど、八郎兵衛とは豫て嫁合す積り。幸ひに暇が出て、親の跡繼ぎ。善は急げぢや婚禮して、女夫ながら愈々孝行。八郎兵衛も合點である。」

八郎兵衛「何がさて、親のお差圖。殊に二三日以前から頻に、夫婦になりたうて待ち兼ねた盃、早う飲んで差してたも。」と、お袖を金の心當て。知らぬお妻は押入に、聞いてしゆらくら戸を細め、八郎兵衛見付けて、

八郎兵衛「ア、コレ、やくだいもない。此處へ出て堪るものか。是れには譯のある事ぢや。出ては悪い。出まいぐぐ。」

太郎兵衛「コ、コレ、八郎兵衛、此處へ出て堪るものか。出まいぐぐとは、夫りや誰に。」

八郎兵衛「さア、夫れは、さア、アノ裏のお二人、目出度いと思つてか、挨拶に出ようとなさ

るに因つて、此處へ出て堪るものか、人が見付けては悪い。出まいぐぐと、言うたので御座ります。」

太郎兵衛「オ、く、左様ぢやく。挨拶は晩でもなること。晝日中に出るは悪い。必ず出まいぐぐ。」

八郎兵衛「サ、左様ぢやな。出ては強う勝手が悪いな。出まいぞぐぐ。」

太郎兵衛「オ、我が言ふ通りぢや。出まいぞぐぐ。さアく、お袖、婚禮の盃は、女子からがお定り。さア、酌しよう。」と、爛鍋の口にもべなう、

お袖「否で御座んす。」

太郎兵衛「ヤア、何と言ふ。婚禮を否ぢやとは、何様して否ぢや。ナ、何として。」

お袖「氣に入りますせぬ。アイ、男が氣に入らぬわいなア。何程でも祝言はせぬ程に、夫れが悪くくば母様も今はなし、兄さんの方へ往なして下さんせ。」

太郎兵衛「ヤア、夫りやまア、何の戯言ぢやぞいやい。去年までも前月までも、八郎兵衛さんの年もま些とぢや、早う戻つて下さつたら、女夫になつて一日なりと、お前に樂がさせた

いと、孝行なこと言うた汝が、今になつて男が氣にいらぬかや、勿體ないこと抜かすなやい。自慢ぢやないが、己が細工には、些と出来過ぎた代物、色男の引こ抜、今の役者で譬へたらば、三津五郎と團十郎と、梅幸を紅白粉で、ぬたにしたと云ふ様な扮し形、汝が目には、何の様であらうと思ふたに、こりやヤイ、己れ何時の間にか、その様な心にはなりをツたな。ナ、何でほえをるぞやい。さア、有様に抜かしをれ。何でいやぢや。何故盃は、せぬのぢや。」と、息筋ばつてせちがふ處へ、お袖が實兄妹背山芳之助、用あり氣に来る門の口、夫れと見るより、

太郎兵衛「オ、好い所へ關取、コレマ、あらうことか聞いて下され。お袖めと八郎兵衛、今日婚禮させようと云ふに、女夫にはならぬ、盃否と此の女めが、我が儘八百。サ、意見しやれ、いがめてくりやれ。あゝたのまくとは。」と、告口を聞く兄親も、蛙の面水喫口の惻怛ごとに、

妹背山「オ、定めて左様で御んせう。妹が否と言ふに、けちりんも無理は御んせぬ。婚禮はまア、私からさせぬ。アイ、妹は此方へ取り戻す。もつとも母ぢや人が、存生に約束した

れど、母がなければ私は兄親。アイ、兄親が連れに来ました。連れて、行きます。」

太郎兵衛「ヤア、ヤア、こりや又、我が儘の親玉が、出て来た。末々は八郎兵衛と、嫁合せて下されと遺言して、死んだ親の詞も立てず、恩も知らず、妹が道理ぢや取り戻すとは、何様した氣まゝ。コレ、妹に無理のない理窟。サ、ア、聞かうわい。」妹背山「オ、聞きたくば、八郎兵衛に聞かッしやい。十年から男盛まで、養育に與つた、恩あるお主の娘御を誘拐し、嫁入の邪魔する恩知らず。私が妹聲には、しやんすまい。男を磨く角力取、妹背山芳之助が従弟と云ふも、見たうもない。ハテ、氣の悪い男ぢやもの、妹が嫌ふも何と無理か。但し知つても知らぬ顔か。何時ぞや旦那のお情で、嫁入道具を買つたも忘れてかい。へへ、臭い物には蓋をする様な舅どの、叔父御と云ふも汚らはしい。」と、つツけり言はれて逆立つ老爺、

太郎兵衛「恩知らずとは人の一寸、己れが二尺。こりや、ヤイ、五ツの年貰うて十八まで、育てた親の恩を思はず、取り戻さうの歸らうのと、人の皮を被つた者の言ふことかい。夫れでも何ぢや、男を磨く角力取。へん、何の措きをれ、角力取か肥取か。イヤモ、塵取が呆れる

わい。力自慢措いてくれ。此方が力にや一ツもならぬ。面倒くさい。出て失せう。腐れ兄の木葉角力め。さア、きり、く、と連れて行きをれ。』

妹背山「オ、行かいでかい喃。養子證文をせなんだが、今迄の仕合せ。サア、お袖、來やれ。』

お袖「アイ、く。』

お袖「モシ、八郎兵衛さん、歸ります。父さん、おさらば。』

太郎兵衛「エ、知らぬわい。奴等に物言ふ口はない。』

妹背山「オ、此方も左様ぢや。』と關取は、妹の手を引き二目とも、見返りもせず歸りけり。

八郎兵衛は最前より、差俯いて居たりしが、

八郎兵衛「私が不所存故、親父さまをも悪う云はせ、嘸腹が立ちませう。御許されて下さりませ。』

太郎兵衛「ハテ、其處所かい。日暮迄に入る六百兩、芝居でする狂言にさへ、制札が三百兩。

夫れも近頃は、五十三十の端た金で、一日の狂言になる、辛い世の中、古着買の瘦腕で、

大枚の金請合うたも、實は身の差合せと、十人並にも勝れたお袖、大磯へ賣つてと思ひ付いても、義理ある子ゆゑに、左様もならず。婚禮させたら夫の爲と、其方に賣らせる工もする。また。』

八郎兵衛「すりや、お前さまも其のお心。此の間から私が、急に夫婦になる仕掛も、男の爲と勤をさせ、六百兩にこそならね、せめて半金拵へる、惨い心もお主の爲。思ふに任せぬ今の爲體。もう暮迄に才覺の、仕様も綱も切れ果てし。』と、心は空に茫然と、途方失ふ計りなり。太郎兵衛胸を据ゑ、

太郎兵衛「ハテ、サテ斯様なつたら百年目、二人の衆を連れまして、下總へ早う影を隠してくれ。後は己が引受けて、てんじやうは覺悟の上。さア、ちやツと用意せい。』

八郎兵衛「成程、いちく御尤も。シタが、親父様へ御苦勞かけて、子は安閑と、何處に居られう。御大儀ながらお二人は、お前が連れまし此處を駈落ち、私が後に残つて、何様なりとも埒明けます。暮れぬ間に用意して、早う此處を。』と、頼む子の顔を、眺むる目は泪。

太郎兵衛「此方を下總へ追ひやつて、我りや、アノ押入と、此の宅で戒名になつて、埒明ける

邪魔まで。』

八郎兵衛「えー。』

太郎兵衛「サ、アノ押入とナ、夫れが何と出て行かれろ。何程お主の娘御でも、腐れ合うたら變らぬ夫婦。今更叱りはせぬ程に、奥の二人と四人連、何處の山家の奥でなと、息才で添うてくれ。六十越した娑婆外れ、此の上何様な憂き目に逢ふとも、我が子の爲なら行掛の、駄賃に惜しまぬ老いが身。」と、子故に迷ふ親の闇、可愛さ餘る覺悟なり。

奥より駈け出る榮三古今、二人の苦勞も此方ゆる、死んで其の苦が助けたいと、肌に用意の剃刀を、銘々取り出し自害の體。どつこい待つたと八郎兵衛親子、刃物持つ手に取り付けば、お妻も押入轉び出で、

お妻「コレ、短氣な兄さん、何卒仕様があるぞいな。」と、言ふもろろ。八郎兵衛はせき上げて、

八郎兵衛「へエ、聞えませぬ、お二人様、親子が種々心を碎くも、お前方を夫婦にしたさ。其の志を無になされ。』



太郎兵衛「オ、夫れ、死なうと云ふ心なら、八郎兵衛。』

八郎兵衛「親父様。』

太郎兵衛「此方が先へ。」と、もぎとる剃刀手首に縋つて、

八郎兵衛「まア、待つて。』

榮三郎「イヤ、放した。』

太郎兵衛「イヤ、放さぬ。』

八郎兵衛「謝罪りました。』

榮三郎「謝罪つた。』

お妻「必ず死んで下さんすな。」と、お妻も共に縋り泣き。戸口の外より關取の聲、

妹背山「コレ、早まるまい。命の薬」と、ばつ

たり投げ込む黄金の包、太郎兵衛が膝下へ、
太郎兵衛「ヤア、是りや金ぢや。しかも大枚六百兩と云ふ書付。天から降つたか、何處から出た。」

榮三郎「サア、命の薬とやら申したは、確に男の聲。」

八郎兵衛「モシ、親父さま、手紙が結び付けて御座ります。」

太郎兵衛「ヤア、どれぐ。」と、取上げ見れば、

御ともじ様、御あに様ある、袖より。

合點が行かぬと封押し切り、

心急かれ候故、只一通り申上り、古今様の身の代に付、お二人の御

苦勞、見るも悲しく、何卒此の身を苦界に沈め、金才覺と存じ候へ共、義理固

き父上様、殊に常々可愛がつて下さんすれば、假令私が願うても、隔てし中の

ことなれば、御得心あるまじくと、兄さまと相談致し、態と御二人に愛相付き

れ、直に金澤屋へ尋ね参り、三浦屋の親方へ身を賣り、金調へ候まゝ、御用
に御立て可被下候。

太郎兵衛「ヤア、其様なら身を賣る計りか。」

榮三郎「ア、可愛やなア。」

幼いから御養育の、恩を思へば我が身の動は、數ならず候へども、ついに
荒い言葉を、聞かぬ父上様に、假にもお腹を立てさせ申し、御叱りを受け候
事、今も悲しく、心も濟まぬ事に御座候。御達者でも御年の上、八郎兵衛様、
御孝行に頼み上候。

太郎兵衛「ア、これ、皆聞いて下さりませ。さりとはく、殊勝らしい孝行な者ぢやないか
い。もうくく、胸がせ苦しくつて、讀みたくも、目が明かれぬ。八郎兵衛、讀んで
くれ。」

八郎兵衛様へ申上候。さらくお前を、嫌ふ心は御座なく、永の年月御戻り

を、待ち焦れ候へ共先頃、鎌倉佐介稻荷様の茶店で、預けた笠の笠當に、隠し
ありしを能く見れば、そもじ様に添はれねば、生きて居ぬとお妻様のお文、
私が夫婦になるならば、お妻様もそもじ様も、變な事やなど、なされ候はん
か。夫れにては大恩の父上様へ、我が身事も不孝と存じ、其の時からふつ、
お前の事は思ひ切り、眞實の兄様と思ひ暮し候故、故意と情なう申せしを、
御叱り下さるまじく候。お妻様と何時々迄も、仲好う添うて下されかし。
兎に角世の中に味氣なきは、此の身計りと諦らめ、惜しき筆止めり。

お妻「可憐しや喃。」と、泣出すお妻、

お妻「戀の敵と怨みもせず、私に添へとは餘りで、禮の言葉がないわいな。」と、しやくり上ぐ
れば諸共に、榮三古今は聲を上げ、

榮三郎「恩も馴染もない此等が爲に、勤をして下さる恩を思へば、浮々と何様まア、添うて居
られうぞ。古今、合點か。」

古今「アイ、合點で御座んす。私が身請は止めにして。」と、義理に迫りし身の覺悟。八郎兵衛
は、身を搔掻り。

八郎兵衛「此様な心と露知らず、夫婦になつて否應言はさず、勤め奉公に、遣らうとした己が
心は、鬼か蛇か。お袖、恕して下され。」と、手を合はすれば父親は、

太郎兵衛「己も矢張其の通り、賣る計りに急いだ婚禮。孝行な子を是れ程に、慘う計略親心、
恥かしいやら面目ないやら。コレくく、生さぬ仲の胸欲な、此の親を孝行にしてくれと

は、能う言うてたもつた。」と、身を投げ伏して正體も、泪分ちはなかりけり。二人の女は起
ち上り、お袖さんの代りにと、互に争ひ駆け出るを、

妹春山「コレ、待つた。お二人ながら夫りや聞えぬ。折角妹が志、立てさせて下され。」と、
門口這入る妹背山、右と左に古今とお妻、引き止むる手も越す泪、

妹春山「兄弟の因果には、器量勝れた八郎兵衛、妹と夫婦にしたけれど、此の間、請合つた、
金の工面の通り掛、昨日一寸此處へ寄つて、立ちながら聞いたれば、身を賣つてくれとの
頼み、いぢらしいやら不便やら、ぼろりとしたをぢつと堪へて、「オ、出かした、夫れでこそ、

養子親への義理も立ち、亡くなつた母人まで、人に譽められて、兩方の親への孝行」と、妹の身賣を譽めそやし、妹を引出しに來たを、氣取られまいと先刻の悪口。田から行くも畔から行くも、何様で勤をする約束。果報の薄い者と思へば、夫れ計りが、不便でござんす。」と、目を瞬けば諸共に、袂を絞る貰ひ泣、神奈川沖の大汐に、夕立注ぐ如くなり。

八

思ひ掛なき工左衛門、大汗にて駆け來り、

工左衛門「八郎兵衛と娘が譯、鎌倉へ聞えて、縁組變替。忝いと尋ね巡り、幸ひ此の宿の金澤屋は、昔の懇意立寄つたれば、お袖の噂、大磯の三浦屋とやらも、其處に居る娘の心の殊勝らしさを、皆感心して泣きの涙。元はと云へば己が子の、榮三郎から起つた事、見捨てゝは置かれずと、内々を三浦屋に相談して、六百兩を密に渡して、お袖は三浦屋が買つた振で、有様は己が金主。又古今が後金六百兩も、最前三浦屋に渡した故、コレ、見や、二人が年季證文、己が方で埒明けた。お袖を連れ立ち、此處へ來ようと言うたれば、八郎兵衛が顔を見

て、若しも未練が出れば悪いと、お袖は其の場で髮切つて、鎌倉の尼寺へ。」と、聞いて皆々手を合せ、お慈悲お蔭と悦び泪。

工左衛門「ア、これ、未だ悦ばず事がある。關取の持つて來た此の六百兩は、太郎兵衛へ進上。と云ふ其の心は、お妻も何様で世間があれば、小田原へは戻られまい。好き合つた八郎兵衛と、太郎兵衛へ孝行に、此の神奈川で所帯を持って。家を買ふやら資本やら、太郎兵衛が心任せの六百兩。さて又古今は、榮三郎が嫁にして、跡を譲つて我等は隠居。何程金があつたとて、持つて死ぬるものぢやなし、何處も彼處も善うしてやる。何と皆嬉しいか、目出度いか。」

一同「いや、もう皆嬉し目出度いに、此の上は御座りませぬ。」

一同「しやんく。」

一同「もつしよ。」

一同「しやんく。」

一同『祝うて三度。』

一同『しゃんくくく。』

工左衛門『まだ可笑しい目出度いは、悪者の番傘お傘や、失敗者の六郎兵衛も、金澤屋に屈んで居をつたが、お袖が心底を聞いて、二人ともに發心して、鬼に衣とそりこぼつところを、漸うおつ止めたは、ハテ扱春の賣物に、尼道心が無上に出來るも、目出度う無い。過つて改むるに憚ることなかれとやらで、斷然惡を思ひ切り、善人になる目出度さに、これ等二人も夫婦にして、家持にしてやるは、何と目出度いかく。』

一同『これも目出度い。』

工左衛門『拍つてくれ。』

一同『しゃんくくく。』

工左衛門『も一つしよ。』

一同『しゃんくくく。』

工左衛門『祝うて二度。』

一同『しゃんくくく。』

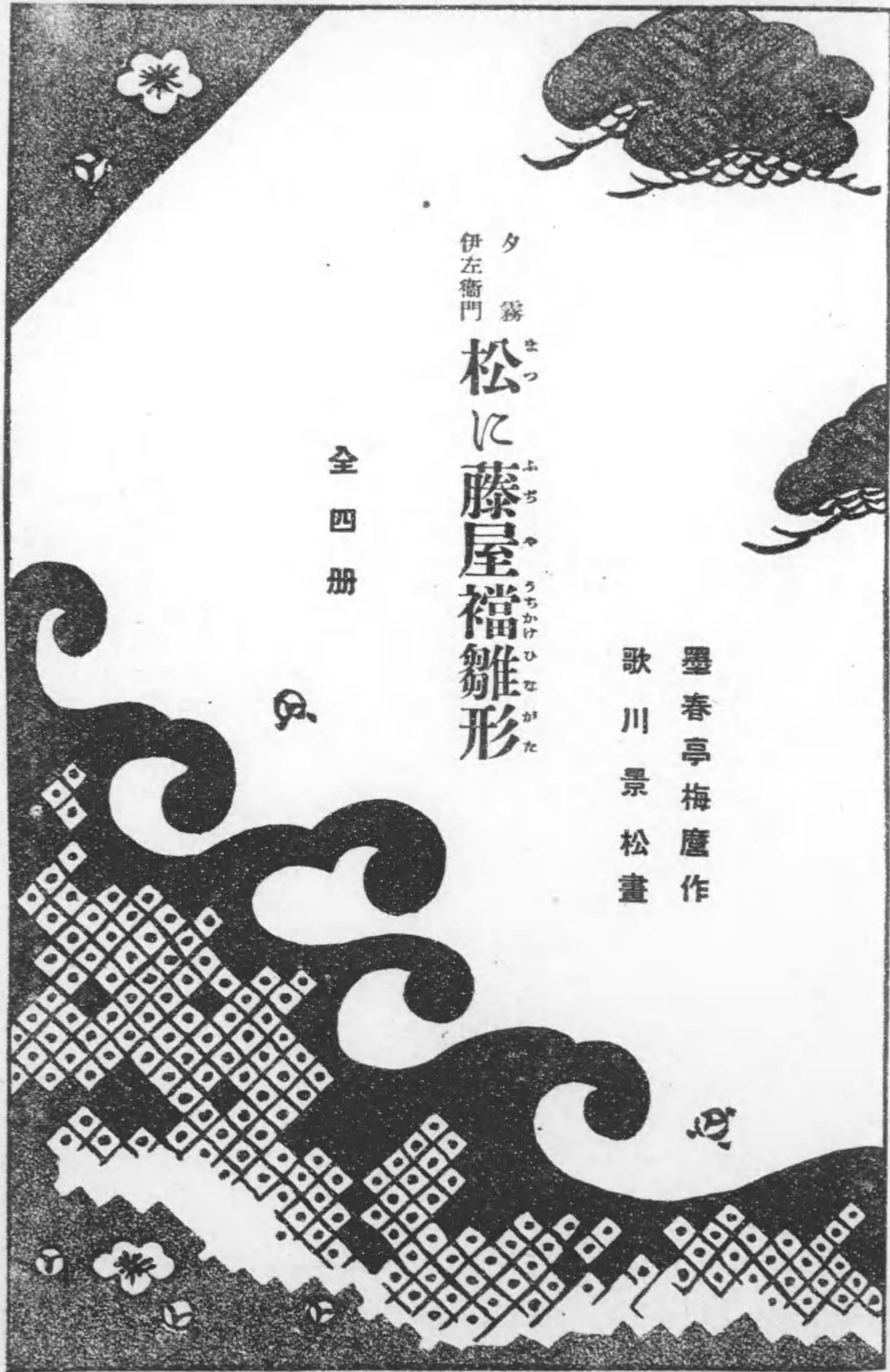
工左衛門『モシく、まだ目出度い事が御座ります、此親爺めが考へるに、これ程もめ紛糾うた混雜、始めから終りまで、唯一人も人の死なぬは、何と目出度いぢや御座りませぬか。』

一同『目出度い。』

一同『目出度い。』

工左衛門『目出度い序に、祝うて婚禮。』

古今榮三を先として、お妻八郎兵衛、お傘六郎兵衛、合せて三夫婦。仲人は三浦屋夫婦に、金藏夫婦、揃ひに揃ひし五女夫を五色潮來と名づけたる、此の繪草紙の大當り、萬々歳とぞ祝しける。



夕霧
伊左衛門
松に藤屋襦雛形

全四册

墨春亭梅麿作
歌川景松畫

阿妻八郎兵衛
阿傘六郎兵衛

五色潮來艶合奏

下之卷 大尾

夕霧 伊左衛門 松に藤屋襦雛形 序

名に響きたる阿波の鳴戸は、平安堂が着舊しの、華美な意匠を假着の雛形、此處に模すや
注文書、まづ夕霧が達紋日、數は五丁の五所、身請の黄金の金絲縫、上り詰めたる伊左衛門
が、野島洲崎の浦模様、互に深き染入は、友遷窟の歡樂も、十郎兵衛が白波に、ちりぐば
つと世上に、浮き名立つ浪千鳥の香爐、友音に鳴くや新七おさめ、忠義にいとゞみをつくし、
心はよしや蘆分小船、愛に曳かるゝもやひ綱、其の新松の若緑、所縁に咲ける藤屋の家に、
絡むや鹽の長次郎が、辛き世渡る手品の練繰、其の色絲の京縫を、吾妻に綴す江戸妻の、鈍
き愚作もお目長に、只御評判を願ふになん。

丙申春

墨春亭梅廬記

夕霧 伊左衛門

松に藤屋襦雛形

上之卷

墨春亭梅麿作

歌川景松畫

發端

「集り給ひし神の矢數や八百萬」と、貞徳翁が吟じたる、出雲の國大社に、程遠からぬ沙陀の浦、其の港より船出して、難波へ上る追風よく、此船に乗りたるは、當國尼子殿の家臣たる、秋鹿筆之進が妻、なぎさと云ふものなるが、彼の筆之進は去んぬる頃、世を去りて、家督を繼ぐべき男子なく、其の上冊輩の讒言故、俄に其の妻子には暇を給はりしが、立寄るべき親類も、主君を憚り見返らねば、なぎさは今年五歳になる、一人の娘お雪を伴ひ、譜代の若黨菅野關平、仲間可介を供に連れ、關平が妹おさこと云ふ者、吾妻の方に在ると云ふ、微の便りを知已にして、折節大阪まで、戻り船あるを幸ひ、是れを借りて、主従四人が擧り乗り、海上遙に漕ぎ出し、とある處に到りしが、關平は主の心を、慰むよすがにならんかと、船頭に尋ぬる様、

に尋ぬる様、

關平「某も度々上つて、上方筋の海路は、大方心得た所もあるが、向ひの山の見馴れぬ處、何と云ふ所ぢややら。」と、問はれて船頭關九郎が、

關九郎「されば、上方船に召したなら、大方は御合點ぢやらうが、風によつては、眞帆に駈けて直付に、上方へ上る事も御座ります。又此の様に紛れ日和は、船を下へ遣り過し、一息に走るもあり。夫れ故以前のお上りに、御覽なされぬ山である。」と言ふ中、船をとある島へ漕ぎ寄せて、關九郎が、

關九郎「此の島に人知らぬ、靈驗なる觀音堂が御座ります。之は海から出現と云ふ事で御座ります。此の海を渡る船、難風に逢うた者、願を掛けて祈るに、屹度驗のある故に、利生島と申します。難波へ上る順風が、やがて吹き出す雲行が、何様か見ゆれば其の間、此の島に船を繋り、待つて居る中各々様にも、又滅多に參られねば、島へ上つて觀音様、拜みなさるが宜からう。」と言へば、關平頭振を振り、

關平「成程此の島の容體では、靈驗な佛も御座らうとは、見えたれども島へ上らず。是れから

拜み、心に歩みを運ぼう。』と言ふを、なぎさは最前より、是れを聞いて居たりしが、
なぎさ『御利益のある御佛へ、参らぬは残り多い。殊にお雪が一代の、守本尊は観音様、此の
娘が行末願ふ爲、私が代参に大儀ながら、關平、其方参つてたも。』と、言葉に否とも言い
兼ねて、

關平『左様ならば一走り、ツイ行つて参りませう。』と、ひらりと島へ駆け上り、

關平『此の道を行くことか。』と、堂ある方へ走り行く。關平見えすなりぬれば、何に思ひけん

艦九郎が、船を漕ぎ出すに、可介なぎさ主従は驚き、様子を尋ねれど、艦九郎、返事もせ

ぬものから、島へ上りし關平を、呼べど招けど島と沖、遙か隔てゝ届かぬ中、次第次第に遠

ざかる。堪へ兼ねて可介が、艦九郎が腕首捕へ、

可介『ヤイ、船頭め、何とする。何様云ふ譯で、船を出した。急いで元へ漕ぎ返せ。』と、争へば

嘲笑ひ、合圖の呼子吹き鳴らせば、板子の下より荒男、ぬつと出るより可介を、かい撮んで

高く差上げ、遙の沖へ投げ込んだり。之を見るより甲斐々々しく、なぎさはやがて身仕度ひ、

なぎさ『皆は皆海賊よ喃。女なれども覺の手中、必ず後悔せまいぞ。』と、懐刀抜き放し、二



人を相手に火花を散らし、戦ふ中に頑是な
き、お雪は母に縋り付き、

お雪『母様、怖い。』と、泣き出せば、さしもに

猛き女なれども、氣後れなして躊躇むへ付

け入り、右左より斬り付ければ、終に果敢なく

なりにけり。泣き入るお雪を打込む船底、仕

合せ宜しと、二人は悦び、何處ともなく漕ぎ

行きける。此の荒男は阿波國にて、しよる平

と云ふ海賊にて、手下を船頭に打扮たせ、常

に斯かる工みして、海上通路の荷物を奪ひ、

生活としたりしなり。彼の關平を上げたる島

は、人の通はぬ離れ島にて、此の關平が行方

は、後々を見て知るべし。

稻瀬川の冬景色、一際目立つ屋根船に、障子差込め表には、藤屋の手代曲六が、人待ち顔に蹲ひ居る。折柄来かゝる廊の一群、審問の口松、ひよんとここにん、

口松「モシ、太夫さん、其の様に何でお急ぎなさるのぢや。」

太夫「アイサ、伊左衛門さんが、見えぬ故、先へ来さんして待つてゝあると、夫れで心が急ぐ

わいな。早う尋ねて下さんせ。」と、聞いて、曲六側へ差寄り、

曲六「これはく夕霧さん、旦那は先から船の中。お前は何を尋ねるのぢや。」

夕霧「サイナ、伊左衛門さんが先刻にな、一寸した口説の纏れ、つひにない腹の立ち様、夫れ

からふいと何處へやら。若し船になら逢はして。」と、頼むを幸ひ曲六が、

曲六「左様思うて旦那をば、此の私が籠めて置いた。いやもう大抵機嫌が悪い。どれ、私が執

り持たう。」と、みよしの方へ乗り移り、

曲六「モウシ旦那、太夫さんが跡追うて、今此處へ見えました。ずつと其處へ遣りませうか。」

と、聲を掛くれば障子の中、

伊左衛門「ならぬく。彼の様な不心中者は、大嫌ひ。」

曲六「あれ、彼の様に言うてぢやぞえ。お前は何か覚えがあるか。」

夕霧「いゝえいな、覚えと云ふは外でもない。昨夜主との寝物語り、伊左衛門さんの言はんす

るは、「近々に千葉さまの御家老、片井石右衛門様のお娘御と、婚禮の頼みの印に家の寶、

千鳥の香爐を渡す筈。左様なりや是れから、女房持、腹は立たぬか」と言はんす故、私も彼方

が大事なれば、「嫁御様のお在でなさるは、御家の爲なり第一は、親御様への御孝行、何の嫉氣

はしませぬ」と言うたれば、「夫れ程の事を嫉氣せぬと云ふは、其方にも約束の男が、外に屹度

あらう」と、口説しかけて夫れからは、兎角機嫌が悪う御座んす。これモウシ、曲六さん、お

前其處を宜い様に。」と、半分聞いて了解む曲六、

曲六「ア、成程、思ふ仲の小口争。」と、言ひつゝ、障子細目に開け、密々と私語けば、中には

伊左衛門の聲として、

伊左衛門「何程言うても聞かぬく。夫れとも何ぞきつとした、印を見せたら其の時は、曲六、

其方が詫言故。』

曲六『許してやると被仰るのか。仲人は我等が裁判。併し待てよ、考へ物、指切り髪切り珍ら
しからず。はて、何ぞ思ひ付が、いやあるわえ。』と、船より上り、夕霧の耳に口。夕霧は、
小首を傾け、

夕霧『其様なら何と言はしやんす。昨夜主が持つて御座んした、お家の寶千鳥の香爐を。』

曲六『さア、其の香爐は藤屋の家に、無くて叶はぬ寶ながら、先頃から揚代の、七百目の滯
り、お宿の首尾の悪い故、夫れを濟す迄の印にて、親方に預ける積りで、旦那が手づから
持ち出して、昨夜お前に上げた筈。一層それをお前の手へ、預り限にして置けば、寶がなけ
れば屋敷の縁談、延引になる其の中には、ツイ先では止めになる。揚代の滯りは、此の曲六
が引請んだ。何でも其の千鳥の香爐、何時迄もお前が預り、餘所の縁組を變換迄は、返しま
せぬとツイ一筆、詫言代り書いたが宜い。夫を旦那に訴訟の種。夫れより外に案事がない。
書くなら此處で。』と、腰なる矢立突き付けられて、思案もなくツイ乗せられた口車、好みの通
り鼻紙へ、すらく、書いて渡すを、曲六手早く取つて、船に飛び乗り、

曲六『モシ、旦那、太夫様の謝罪證文、これで堪忍なされました。』と、障子の中へ投げ入る。
中には夫れと伊左衛門、

伊左衛門『オ、宜しく。是れで少しは胸が開いた。今度から随分と、澤山嫉氣をするが宜
い。』と、聞いて夕霧いそ／＼し、

夕霧『其様なら私も、ちやつと其處へ。』

伊左衛門『おつと待ちや。も些と文句に、點が打ちたい。まア、其方は下屋敷へ、皆と一緒に
先へ行きや。押付け我も後から。』と、言ふに側から對間の口松、

口松『復もや御意の變らぬ中、是れから直に瀬戸橋の、御別荘へお伴しよう。旦那と後から番
頭さん。』

曲六『オ、サ、呑み込んだ。お伴は私だ。後から直に、早く。』と、煽動てられ、
夕霧『其様ならば、曲六さん、復主の化粧坂へ、反れなんせぬ様、お前も屹度。』と、小袂かい
取り打連れて、瀬戸橋指して急ぎ行く、屋形の障子からりと開け、

漕太『いや、番頭さん、何様でござんす。』と、ぬつと出る船頭漕太、

曲六「いや、もう出来た。強いもの。若旦那の聲色、彼の様にも似れば似るもの。貴様が、物真似することは、旦那を始め誰も知らぬ。夫れから私が思ひ付き、一杯飲みや。」と、小判の光、

曲六「しかし是れは時の興、夕霧さんをはめたのも、後では笑の種になる。旦那への御馳走ぢや。必ず噂をせまいぞえ。」と、渡す小判に件の書付、引替へに受取つて、手早く帯をふくろばし、書付中へ押込んで、知らぬ顔に帯締め直す、折柄藤屋伊左衛門、流連の飲み過し、足元分らぬ千鳥足、藝妓末社が付き添うて、蹠踏々々来るを、見るより二人が、二人「これはく、若旦那。」

伊左衛門「いや、番頭殿此處にか。今夜は二十三夜、待夜明しのひとしめから、大磯の色達を、下屋敷へ惣揚げて、座敷踊の其の積り、皆と一緒にしようと思つて、今迄待つて飲み過ぎた。」と、言へば末社が口々に、

末社「いや、もう旦那の無理強ひには大困り。夫れは左様と太夫さんは。」

曲六「夕霧さんは只今、旦那の御機嫌損ねたと、苦勞にして居さんしたを、此の曲六が仲直り

は、請合うたと無理に勧めて、も些と先お下屋敷へ。私は御一緒に、貴方を待つて。さア、御伴。」と、二人を船に我も乗り、漕太に目くばせ何にも言はず、瀬戸橋指して押して行く。

二

見目悪しからぬ女房の、年は二十を二ツ三ツ。五ツ計りの子を背に、來かゝる此方には放下師の、鹽野長次郎目早く見付け、

長次郎「貴女は、新七が女房、おさめ、坊を連れて何處へぢや。」と、問はれて女は立止り、おさめ「これはまア、武藏の伯父さま、何時お上りで御座ります。」

長次郎「今度急に出て來たは、毎度の近付此の土地で、大磯の男藝妓、口松と云ふ人から、一昨日書狀を寄越されて、今夜は瀬戸橋の藤屋様で、二十三夜待があるとの事、口松殿の思ひ付で、此の己がしな玉や手品が、お目に掛きたい程に、早々下れとあるゆゑに、何でもして來い金儲けと、昨日晝立ちに出掛けて來た。雪の下に宿を取り、序ながら其方へも寄る。」

噂を聞けば藤屋様は、新七が御主人さうなが、定めし弟も行くであらうと、様子を聞きに出會ひ頭。』

おさめ『さいなア、主は常々から氣弱い生れで、若旦那の御放埒を苦勞にして、度々の御意見も、反つて御氣に障る道理、病氣分で引つこんで。』

長次郎『其様なら遠慮して居やるか。其方歸らば、一絡に。』と、言ふにおさめは、おさめ『ハイ、私は些と尋ねる人が御座んす。兄さんはまア、お先へ。』

長次郎『其様なら私は行きませう。坊はおとなしうしませう。』と、氣も足も軽く急ぎ行く。

此方の出茶屋に、一人の浪人、

浪人『新七殿の御内方、此の邊で待つ様にと、夫れ故に此處に居ります。此間御頼の事は、委しく之に。』と、出す書付、

おさめ『心得ました。』と、問はずながらさらりと開き読み終り、

おさめ『段々のお世話様。新七殿も本家を憚り、女子の私を使ひがてら、此の金子入用は二十兩、其の中十兩は、此處で上げます。残りは後で私が家で。』

浪人『請取りませうが、彼の手術を間違へぬ様、お内儀さん。』
おさめ『合點で御座んす。』と、何か私語き別れけり。

三

曲六『やれ恐ろしや大蛇様、お許しなされ。なんまいだ。くはばらく。是りや堪らぬ。』と、曲六と漕太、わななく中に、暫間の口松心付き、

口松『斯様云ふ時は面々が、身に付いた大事の物を、惜まずに海へ入れると、鰐の口を遁れるとやら。此の口松が大事の一品、旦那から拜領の、紙入を此の通り。』と、打込む後から曲六漕太、急ぎ周章て、鼻がみ袋、其の外腰の煙草入、惜氣もなく投げ込めば、不思議や大蛇は弱々と、潮につれて後遂。楮こそ奇特は争はれぬ、此の間に船を漕ぎ退けると、聲をばかりに騒ぐ中、一人が漸う心付き、

『埒もない二人の衆、是れは眞實の海ではない。』と、言はれて二人も口あんぐり、
▲『ホンニ、左様ぢや。最前放下師の長次郎が、此座敷を海にして見せようと言うて庭へ出

たが、忽ち此様な海になつた。もうく元の座敷にして、いづなごと、措いてくれ。』と、謝罪り入れば何處ともなく、手拍子はたたく、拍ち鳴らせば、大海忽ち干潟となり、草生ひ茂る瀬戸橋の藤屋の別荘、渡海造りと見えたるは、衣裳入れたる長持の上に、三人つツくり立ち、

■▲『是れはく。』と、呆れ果て、夢の覺めたる如くなり。

■▲『餘りな魔法使。夫れに今投げ込んだ、懷中物は何處にある。』と、聞いて長次郎傍より、取出す件の紙入を、三人の前に置く。曲六は、中檢めて、

曲六『辻放下の目眩惑、彼様なこととして好い機みに、何によらずあげをろ。』と、悪口言へば長次郎、

長次郎『慮外ながら番頭殿、此の長次郎も斯様ならぬ以前は、刃も差したものの。放下こそすれ芥子程も、盜根性下げはせぬ。もとより手品を使ふものは、陀機尼天の法を行ひ、欲氣があつては勤まらぬ。お前方の身に過ぎた、お主の金で榮耀すりや、天地の大蛇に魅られ、日月の鰓にかゝる。意見の爲にして見せたを、小盗みするとは誰れがこと。』と、白眼み付けた

る勢にて、手持ち不沙汰をくろめる口松、

口松『まア奥で一杯やりたい。さア番頭さんも長次郎殿も。』

長次郎『イヤ、私は餘儀ない用で、野島村迄參らねばならぬ。旦那へは宜い様に。』と、暇乞して歸りけり。奥より仲居が立出でて、

仲居『大磯の女郎さん方がお揃ひ故、總踊が始まります。』

口松『おつと、合點。』と、口松がそゝりに立てて連れて入る。さしもに廣き大座敷、爪も立たざる程の見物。正面には伊左衛門夕霧始め、引舟禿其の後は、曲六口松。既に踊も始まりて、着飾る衣裳の打扮映、名に負ふ廓の色達が、思ひくくの伊達装束、拍子をそろへて踏む足取、跳襪引足蹴返しに、紅隙洩る雪の脛。曲六は有頂天にて見て居たるが、

曲六『手拭で顔隠したは、足取が男の様ぢや。此處は我等が詮議もの。』と、ちつと寄つて彼の踊手の、手拭取れば彼方は赤面、額に當てし紫帽子、お許しあれと逃げ退くを、曲六が立ち掛り、

曲六『我りや新七か。其の態は、御勘氣受けた身を以つて、此處へ來るのみならず、似而非女

郎の化の皮、引剥いだからは此處にはならぬ。とつとと失せう。」と、引立てる。又も一人の傾城姿、踊の中より女房おさめ、曲六に取絶り、おさめ「此方の方が此の態は、譯ある事。何卒些と旦那様へ、お願ひ。」と、言はせも敢ず二人を捻ぢ付け、

曲六「何の譯でも今夜の日待、お慰みの妨ぢや。歸れ〜。」と、突き出すにぞ、

新七「何卒々々。」と、新七夫婦が體を見るより、短慮の伊左衛門、止むる夕霧振り放し、威

丈高に二人を白眼付け、

伊左衛門「勘當した我が前へ、何しに出せた。」とわくり聲、

新七「お氣に違ひし此の新七、お目通りを憚りて、態と夫婦が此の姿、一通り、お聞き下され

まし。」と、鬘衣裳を手早に脱ぎ捨て、

新七「元私は幼い時、水木辰之助が抱への色子、ふとしたことで先旦那、伊庵様の御最良受

け、程なく親方の手を離れ、段々の御取立て、我から申すも憚りなれど、律義一邊の役に

立たず、其の氣質をお見込みにて、年若ながら番頭役、親旦那の御臨終、お呼びなされて、「こ



れ新七、伊左衛門が上を頼む。必ず人に笑はしてくるな」との御言葉が、ぞつこん此身に染みこんで、何卒御實體に、お家相續なさる様にと、寝た間をも忘れぬ程の奇特もなう、御放埒を御意見申せば、御恩のお家へ立入りならず、餘所ながら承はれば、段々募る奢の数々、藤屋のお家も仕舞ぢやと、世間の噂を聞くに付け、情ないやら無念なやら、此の新七は男泣に、泣いてばかり居りました。此の鎌倉でも二と下らぬ、お家に若しも疵がつかば、御先祖へ不孝お身の耻辱、長うとは申しませぬ。せめて今年一年も、お身持を改めて下さりませ。」と、親身の諫め。女房おさめ

も言葉を繼ぎ、

おさめ「恥かしながら私も、元は化粧坂で勤の身、假初の語ひに、新七殿と馴れ初めて、末の約束堅めしを、或客に請出され、飽かぬ別れになる所を、勿體ない伊庵様が、先を斷り身請遊ばし、身儘になつた御高恩、新七殿と言ひ合せ、旦那様の御放埒を、何の様にしてお諫め申し、假令夫婦が命を捨てても、昔の御恩を送りたさ、御勘當の身を憚り、二人が昔現して。」
新七「さア、女房めが、申す通り、お前を憚る紫帽子、野郎頭へ女鬘、恥かしい此の形も、何卒お心入れ替へて、伊左衛門は香が止んだ、傾城狂ひも止つたと、世間の人に言はれてたべ。拜みます。お情ぢや。」と、忠義一途の意見の段々、耳に逆うて伊左衛門、

伊左衛門「ヤア、新七の詐り者、左程大切に思ふものが、何故金藏に封印を付けさせて、此の我に不自由をさせをるぞ。折角父が貯めた金を、廓で遣はずむざん、貸金、間違た了簡で、粹と云はれる伊左衛門に、意見立措いてくれ。」
新七「さア、其のお心故悪者の、讒言を誠になされ、此の新七をお憎しみ。何で貴方のお身持を、悪し様に申しませう。」と聞くより曲六怫然顔、

曲六「悪者の讒言とは、夫りや誰がことぢや。己れが様な根性に引比べ、奢らしやるとは何の事。一年に二萬兩や三萬兩は、我々が一杯の酒飲むより軽い。役にも立たぬ口利かすと、足元の明い中、きりく」と行せあがれ。」

新七「イヤ、きりく」と行せあがらぬ。お可憐しいは旦那様、何を云ふにも、浮氣盛り。其處へ付け込む悪人共、あらゆる奢を勧め込み、十兩いれば、百兩、百兩いれば千兩にして、内證は手取り奪ひ取り、夫れ御存じない大名氣。」

曲六「いや、聞處だ。内證で分け取りするとは、曲六へ面當か。旦那を抜作と、云はぬ計りの抜かし方、もう堪忍の緒が切れた。旦那様の御名代。」と、新七が頸筋攪み、荒けなくも捻ぢ倒すを、是れはと立寄る女房おさめも、共にさんく打ち据ゆる。夕霧、傍に氣の毒顔、夕霧「私故にお前方、強う苦勞を掛けた上、復しても此の場の難難。モシ伊左衛門さん、何卒まア、新七さんの意見をば、些とは聞いたが宜いわいな。」と、共音に泣ける磯千鳥、立つ波風を佗つ折柄、此の場を外して最前に、外面に出でし口松が、息を切つて走り込み、口松「さア、大變だ。何やら詮議があると云うて、縣守が此處へ来る。」と、聞くより皆々

狼狽眼。新七は表を眺め、

新七「あれ、金棒の音がする。大方是れは此の處で、人寄せなされたお咎めか。何はともあれ旦那様、夕霧様、御一緒に皆を連れて、此の場を早う。」と、氣を焦燥てば、

口松「心得た。お二人の上は請合うた。」と、口松附き添うて、裏手の方へ落ちて行く。斯かる中にも曲六は、床の間にある千鳥の香爐、手早く取つて、漕太諸共、我等も旦那に追ひ付かうと、駈け出す所を、新七聲掛け、

新七「何處へ、番頭殿、此處に居て此の新七と、一緒に言譯さツしやれ。」と、言はれて二人はがちく、震へ、後込みする其の所へ、當所の役人驚塚雁兵衛、組子引き連れ聲高く、雁兵衛「藤屋伊左衛門は何處に居る。其の外の物共も、是れへ出て承はれ。數多の傾城を此處に集め、虚師と名付けて人寄せなし、其の上先祖が武將より拜領せし、寶と聞えし千鳥の香爐を、此の別荘へ持ち出し、手遊になす者の段々、糺明せよとて管領より、御沙汰なるぞ。」と、聞くより新七、

新七「此の儀は全く伊左衛門が、存じたことでは御座りませぬ。此の催しを致したは、是れな



る手代曲六、主人の名を借り、遊の本人は私め、是れなる女が相方の遊女、皆伊左衛門が名を借りて、手代共が内證。斯様に委しく、申上げます。主人に科は御座りませぬ。」と、身に引き被る忠義の白狀、

雁兵衛「オ、神妙なる申譯、ソレ、彼奴等に繩を打て。」と、言ふより早く一時に、「捕つた捕つた」と、新七夫婦、曲六漕太を縛り上げ、したり顔に雁兵衛が、

雁兵衛「曲六とやら今一人は、繩付ながら預け置く。所の者共、番をせい。」と、曲六が側にある千鳥の香爐を手早く取り、

雁兵衛「是れは藤屋の寶と雖も、元は武將の拜

領物。此處に置くは不敬の至り、一應上へ差上げん。様子を知つたる手代新七、傾城諸共詮議がある。引き行きて、尙ほ糺明。夫れ引立てい。の聲につれ、引き立てられし二人の後に、曲六は土氣色。

曲六「新七殿、何卒御前で、お執成頼みまする。」と、泣き聲出すを聞かぬ顔、二人を驚塚攫むが如く、引立てさせて立歸る。

伊左衛門 松に藤屋襦雛形 上之卷 終

伊左衛門 松に藤屋襦雛形 下之卷

四

黒春亭梅麿作

折しも降り来る夜の雨、瀬戸明神の御社の、鳥居の前に提灯立てさせ、暗き木陰へ立寄りて、四邊見廻し、驚塚雁兵衛、引立て来りし新七夫婦が、縛め解きて介抱し、十郎兵衛「首尾能く参つて、重疊。」

おさめ「十郎兵衛さん、段々御苦勞。皆さんもお骨折。」
十郎兵衛「イヤ、久し振の大仕事、何と代官と見えましたか。」

おさめ「見えるともく。主を始め此のさめも、眞に、吃驚する様ぢや。」
新七「斯様言ふ事を頼んだも、伊左衛門様が手放した、者をばさツしやる故、お前方をお頼み

申し、彼の様に皆の者が、縛られたと聞かしやツたら、元來が臆病な生れ付き。是れから

假令曲六や、悪者めが煽動(おだ)てても、よもや合點(あてん)はなさるまい。すりや、自づ(おの)から戒(いざ)となり、奢(おご)りも直(な)ろと思(おも)ひ付き。』

おさめ『私も、恥(は)かしい廓姿(くわくすがた)、借(か)着(き)衣裳(いしやう)で二人(ふたり)の者(もの)が、阿房(あほう)な真似(まね)と笑(わら)はれても、ホンニ常(つね)から、悪體(あくてい)な、アノ曲六(まがろく)や皆(みな)の奴(やつ)、縛(しば)らしたがせめて腹癒(はら)いせ。能(よ)い氣味(きみ)であるわいな。夫(そ)れは左様(さやう)と些(ち)とも早(はや)く、家(うち)へ往(い)んで後(あと)の様子(やうす)を、聞(き)き合(あ)はせたる御座(ござ)んす。隣(とな)の家(うち)へ預(あづ)けて來(き)た、坊(ぼく)も嘸(さ)待ち兼(か)ねて。ホンニ左様(さやう)ぢや、忘(わす)れて居(ゐ)た。』と、中懷(うちわい)から取(と)り出(だ)す財布(さいふ)、

おさめ『お約束(やくそく)の後(あと)金(かね)十兩(じゅうりやう)、請(う)取(と)つて先刻(さきせき)の香爐(かうろ)を、此(こ)の方(ほう)へ下(くだ)さんせ。』と、差出(さしだ)す金(かね)を十郎(じゅうら)兵衛(べゐ)、取(と)り收(と)めて不審(ふしん)な顔付(かほづき)。

おさめ『其(そ)の香爐(かうろ)とは何(なん)のことぢや。ハテ、別莊(べつじやう)にあつた千鳥(ちどり)の香爐(かうろ)、彼(あ)りや大切(たいせつ)の重寶(じゆうぼう)故(ゆゑ)、彼(あ)い様(さま)して置(お)くが氣遣(きぢ)ひさに、今日(けふ)の序(ついで)に取(と)つて下(くだ)されと頼(たの)んだゆゑ、最前(さいぜん)お前(まへ)が懷(あ)へ入(い)れて、來(き)たではないかい喃(の)。さア、何卒(どうぞ)此方(こゝろ)へ。』と、言(い)へど返事(へんじ)も虚嘯(そらうそぶ)き、

十郎兵衛(じゅうらべゐ)『ヤイ馬鹿(ばか)盡(つく)すな。彼(あ)の香爐(かうろ)は時代(じだい)の品(しな)、鎌倉(かまくら)殿(だん)から拜領(はいりやう)して、二ツとない寶(たから)と知(し)つて、大金(おほかね)にするのだわ。其處(そこ)を見込(みこ)んで、今日(けふ)の樣(やう)なやす敵(たか)のする仕事(しごと)を、一(いち)番(ばん)やつた。』

と、言(い)はれて新七(しんしち)はつと計(はか)り、仰天(おぼろ)せしが座(ま)を進(すす)め、

新七(しんしち)『イヤ、十郎兵衛(じゅうらべゐ)殿(だん)、其方(そなた)とは、琵琶(びわ)小路(こうぢ)の湯治場(たうぢば)で、毎度(まいど)の出合(であひ)に、頼(たの)もしさうな人(ひと)と思(おも)うて、馴(な)れ親(おや)しみ。』

十郎兵衛(じゅうらべゐ)『オ、彼(あ)の香爐(かうろ)を、取(と)らう計(はか)りぢやない。名高(なだか)い藤屋(ふぢや)の下屋敷(しもやぢき)、金銀(きんぎん)は摺(つ)み取(と)りぢやと、家捜(やしら)しをさせたれど鑿(げ)ひら、なア皆(みな)の者(もの)、アノウつそりした面(つら)を見(み)ろ。此(こ)の中間(なかま)へ一十(いちじゅう)や三十(さんじゅう)の、目腐(めくさ)り金(かね)を並(なら)べても、符帳別(ふぢやうべつ)が何程(いくら)になる。此(こ)んな事(こと)では水(みづ)も飲(の)めまい。』

新七(しんしち)『成程(なるほど)、お前(まへ)方は商賣(しやうばい)なら、取(と)らツしやるも無理(むり)でない。取(と)られた己(おれ)が阿房(あほう)から、其香爐(そのかうろ)を盗(ぬす)まれては、今迄(いままで)盡(つく)した忠義(ちゆうぎ)も無足(むそく)、夫(そ)れがなくては生(い)きても死(し)んでも、お主(しゆう)の家(うち)へ此(この)私(わし)が、顔(かほ)が立(た)たぬ。夫(そ)れゆる戻(もど)して下(くだ)さらば、假令(たとへ)此(こ)の身(み)は何様(どう)なつても、假令(たとへ)女房賣(にようばう)つてなりとも、身代(しんだい)あり限(き)り金(かね)にして、進(しん)ぜる程(ほど)に聞(き)き分(わ)けて。』と、夫婦(ふうふ)が兩手(りやうて)を打合(うちあ)はせ、そうぐに腰折(こしを)り屈(か)め、

夫婦(ふうふ)『何卒(どうぞ)ぐ。』と、頼(たの)みける。

十郎兵衛(じゅうらべゐ)『憐(あは)れや義理(ぎり)を辨(わ)へては、此(こ)の商賣(しやうばい)がなるものか。』と、新七(しんしち)を立(た)ち蹴(け)に蹴倒(けた)す。見兼(みかね)

ておさめが立寄る手先、ぐつと捕へて側に引寄せ、

十郎兵衛「これ、お内儀さん、貴方は、昨日見たよりは、此の廓姿でまた一倍、戀が増す穂の花薄、盛の其の身を彼の野郎と、一緒にたゝむは惜しい者。是れから己が愛してやる。」と言ひ宜るを突き放し、

おさめ「え、何ぢやいな。其處所か、能う巧々と、此方の人を欺して、大事な其の寶を。」

十郎兵衛「欲しくは遣らうが、貴方の此所で、諾と言つて素直になれば、香爐は直に手渡した。

野郎も寶が欲しいなら、女房を己に執り持て。」

おさめ「すりや、何様でも其の品は。」

十郎兵衛「呎いわえ。只はならぬ。」と、聞くよりくわつとせき逆上せ、攫み掛るを片手の扱ら

ひ、引外し翻筋斗打たせ、焦燥るおさめを確と押へ、

十郎兵衛「夫れ、片付ける。」と、腮にて差圖に、五人を相手に新七が、組んづ轉んづ争へど、

多勢に一人、毆かれ踏まれ、雨にびつたり濡れ驚の、聲も涙にひいぐと、既に危き其の

所、向ふにちらり火の光、飛脚提灯足軽く、とつかは來掛る鹽野長次郎、此の體見るより、

飛び掛り、手下の悪者引攫み、左右へ投げ退け新七圍ひ、四方白眼付け立つたりけり。

其の間におさめは十郎兵衛が、緩みし手先を振り放し、

おさめ「てもよい所へ見さんが、来て下さんして、まア嬉しい。昨夜話した威嚇の術、裏を搔

かれて大切の、お主の寶を彼奴等に、取られた上主も私も、十郎兵衛に手込に逢ひ。」

長次郎「なに、其の香爐を取られたか。宜い。己が請取つた。」と、提灯附邊の松に掛け置き、

長次郎「それ、おさめ見や、弟が顔の色を失うた。手水鉢の水でも飲ませ。さア、何奴等も動

きやがるな。」

手下「なに、猪口才な。」と、兩方から、捕つて掛るを毆り飛ばし、無双追投げ腰もぐり、締め

上げ締め付け投げ出され、踏み滑るやらこけるやら、長次郎が強力に、打ち付けられて皆は

うぐ、命からぐ逃げ散つたり。後に忍ぶ十郎兵衛が、欺し打に斬り冤くるを心得、傘に

て丁ど受け止め、

長次郎「我りや盗人の、ふるせよ喃。」

十郎兵衛「イヤ、ほざえたり。」と、斬り込む刀、傘さつとがんつぶし、もつて開いて抜き合は

す。互に争ふ其の際に、引返し来る手下の鱧九郎、後より組み付くを、身をもぢつて左足を上げ、後様にはつしと蹴られ、脾胃のあてに息たゆみ、倒るゝ顔を長次郎、瞥と見るより聲を掛け、

長次郎『已れは確か見たやうな。オ、先年佐陀の浦で。』と、言ふ間に斬り込む十郎兵衛が、刃をはつしと受け流し、

長次郎『彼奴が此所に居るからは、楮は汝等は同類か。是れからは生け捕つて、詮議する譯がある。』と、聞いて十郎兵衛南無三寶と、心に點頭き隙間を見て、彼の香爐を確と持ち、引外して逃げて行く。

長次郎『已れ盗賊、逃さじ。』と、駈け出す足下、氣の付く鱧九郎、遣らじと取り付く、腕頸捻ぢ上げ、有り合ふ繩にてがんじ縛み、

長次郎『已れも後で用がある。』と、附近の立木へ縛り付け、十郎兵衛が後を追はんと、又も狼狽へ駈け出すを、

おさめ『これく兄さん、此方の方が、苦しがつて居やしやんす。直と戻つて下さんせ。』と、

聞いて長次郎氣も半衛、

長次郎『新七、ヤイく、え、通じぬか。薄鈍な。』と、用意の氣付取り出し、口に含めて呼び生かせば、漸うに心付き、

新七『兄ぢや人、無念で御座る。口惜しいとは云ひながら、香爐は又も取返す事もあらうが、お前に若しもの事があつてはなりません。後に残る私共、心細くて何としませう。殊に相手は大勢なり。何様云ふ手術があらうも知れぬ。』

長次郎『さア、夫れが己も氣遣ひ、詮議のある彼の盗人共を、知りつゝも捕り逃した。シタガ手下を捕へて置いた。少しは手掛りが出来てある。夫れは左様と、藤屋は騒動。』

新七『シテ、騒動とは。』

長次郎『されば、伊左衛門様の身の奢り、今夜の騒も眞實に、管領家よりお咎にて、伊左衛門様は直様追放、主人に奢を勧めた科、曲六等は召捕られた。夫れや是れやが知らせたく、其方を迎ひに来る此の道、好い所へ來合したも、兄弟盡きぬ縁である。伊左衛門様や太夫殿の、様子をも聞き合せ、品に因つたらまア當分、故郷柴崎へ同道しよう。』と、始終を聞く程

新七は、

新七「斯様云ふ事が出来ぬ先も、夫婦が盡した志も、水の泡となり果てた。」と、泣くを諫る長次郎、

長次郎「これく、新七、愚痴な事。おさめも共々何に歎く。皆浮世の定まり事。千騎萬騎の大將でも、運盡きぬれば主従親子、憂き難義はある習ひ。此方等風情に有り勝だ。新松が待つて居よ。もう夜が更けた。駕籠でも有るまい。新七は徐々と、おさめを連れて先へ行きやれ。どれ是れから夜明け迄、彼奴をば一攻め。」と、二人を諫め歸しやり、傍の石に腰打掛け、煙草燻し悠々と、彼の艦九郎を攻めたりける。

五

名家の騷動、身の難儀、かてくはへし常惑を、兄長次郎に助けられ、新七夫婦は氣も勇み、新松を伴ひて、柴崎村へ急ぐ道、思ひも寄らぬ稲村陰に、隠らふものは伊左衛門、夕霧も共に有りければ、此方の夫婦は聲を掛け、

夫婦「伊左衛門様、夕霧様、夫れに御在でなされましたか。」

伊左衛門「左様言ふは、新七夫婦、好い所で會ひました。脛に劍持つ我等二人、落武者と同じ事、薄の穂にも怖ぢる習ひ、若しや先刻の人達かと、唾を飲みながら忍んで居た。」

新七「何はともあれ先づ暫く、此處等に御在では危いもの。私共と御一緒に、兄が故郷柴崎へ、御立退なされませ。段々の話は道々、些も早く。」と、誘うて行かんとしたる背後から、

長次郎「オ、イ〜。」と、聲を掛け、急ぎ足にて長次郎の、駆け來りしを此方の人々、底氣味悪く答もせず、近付き來たるを見て安堵、

新七「兄ぢや人で御座つたか。やれ〜、夫れで落ち著いた。」と、新七が喜び顔。長次郎は打笑ひ、

長次郎「其の様に恐がるまい。もう是れからは大丈夫。シテ貴方はお主がお主の、伊左衛門様御夫婦か。改め御目には掛らねど、大方は見知りごし、弟と御一緒に、柴崎へ御同道。」と、挨拶するを伊左衛門、

伊左衛門「これは〜、聞き及んだ長次郎殿で御座つたか。主の身ながら新七には、反つて恩

を受けまする。」と、腰折り屈める伊左衛門。長次郎は手を取つて、

長次郎「勿體ない。何が緒で、掛り繋がるお主筋、お禮所ぢや御座りませぬ。及ばすながら聊
さかでも、お爲になりたい心掛け。お心遣ひは止めにして、まア、柴崎へ御座りませ。」と、
屢々促し我先へ、伴ひ連るゝ曉方、五ツ連れ立つ雁金の、越路ならでも北向に、故郷指して
歸るには、花よりも尙ほ可愛い子の、見捨てられじと新松を、おさめは背に負ひ、風の南は
暖き雨催ひ、月も笠着て残る影、東の空は白みけり。

六

信濃なる園原ならで佗住の、伏屋にはまた箒木の、ありとも見えす不掃除な、一間の塵を手
拭で、長次郎は打拂ひ、心計りに清めた所へ、伊左衛門と夕霧を、上座へ直し手を突かへ、

長次郎「お隠匿ひ申すと云ふも、嗚呼がましい此の茅屋、嗚かし穢ら思召しなされませうが、
暫の間御窮命なされませ。又改めて申しまするも、何とやら憚りなれど、私めを夕霧様に
は、御覚えは御座りませぬか。」と、問ふに夕霧恥らひて、差俯むくも長襦袢の、色にも増して赧

らむ顔、

夕霧「果敢ない勤をする身故、逢ひ見る人は數知れず、何處の何誰か知れねども、一度は遇う
たこともある。心に留めて覚えもなし。」と、言ふに覚えす長次郎、さしぐむ涙を咳紛し、
言葉を改め言ふ様は、

長次郎「御存じないも御尤。定めし苦界に沈みたまふは、お幼い頃よりならん。元貴娘は雲
州の、尼子の御家臣、秋鹿筆之進様のお娘御、お五歳の年親旦那、筆之進様は御病死、御
家督の御男子ない計りか、朋輩衆の嫉により、御暇賜はれば、お母様は貴娘を連れまし、私
と百内と申す、下部をお伴にて、大阪迄の便船に、海上遙に出た所、一つの島へ船を著け、
船頭が物語りに、此の島には靈驗なる、観音のましゝて、此の海を渡る時、難風に遇ふ船
は、此の観音へ願を立つるに、必ず利生ある故に、利生島と云ふとの話、お母様お聞き遊ば
し、我々も今此の海を、船で渡るに頼むは観音、何卒風波を脱れたし。殊に娘が一代の、守
り本尊は觀世音、此の娘が行末頼む爲、我が代參にとあるお言葉、主命なれば違背もなり兼
ね、後に心は残りながら、島に上つて尋ねても、観音堂はあらばこそ、離れ小島の蘆葦計り、南

無三若しや船頭めに、欺されはせなんだか。残した船の心遣ひと、元の岸へ戻つて見れば、船は遙の沖なる故、呼べど叫べど聲は届かず、何と詮方渚様、おく様や貴娘の上を、御安じ申せば身を揉み焦燥れど、船の便もあら磯に、泣き明しても友千鳥、誰憐れまん者もなく、多いものは狐ばかり、粟や糠を朝夕の糧に、拾ひて生き永らへ、三年計り過す中、多くの狐に顔見しられ、陀機尼天の法と云ふもの、習ふとなしに覺え込み、兎角する中漁船に便つて、彼の島を出で所々方々と、御二人のお行方を探せしに、御在所知れざれば、心ならずも故郷の、是れへ戻つて見た所、是れと云ふ生計もなく、覺えた術を生計に、手品使となりました。この間お二人を、御同道して歸つてから、恐れながら夕霧様を、見れば何様やら幼顔、見覺のあるは、お頬の先に、只一つの瘡の跡、凜としたお目付まで、紛ふ方ないお主の娘御、御卒衛ながら打明けて、伺はうかと存じたれど、確な取得のない中はと、見合せて居りましたが、今朝程持病の病が起つたとて、お薬をお出しなされた御懐中の、鼻紙入にあつたのは、何様か貴娘の初髪臍の緒、其の書付に何時幾日、出生の女子雪とある、お筆は即ち父上さま、筆之進様の御名筆。あゝ是れで疑ひなしと、決定致しましたが、何様やら少しはお覺が。」と、問

はれて夕霧答もなく、先立つ者は涙にて、漸うにして泣く目を拂ひ、夕霧「僅か五歳の年なれど、其の時の様子をば、少しは覺えて居るわいな。其様なら笠野關平と、云やつたは其方であつたか。思ひ出すさへ恐しく、悲しく無念な船の中、其方が島へ上つてから、船頭は狼狽へて、船を沖へ漕ぎ出すを、仲間の可内が、咎むるをも聞かぬ振、やがて合圖をしたと見え、板子の下から荒々しい、大の男がぬつと出て、先づ可内を海へ投げ込む。其の様子に母さまが、偕は二人は海賊よと、懐刀抜き放し、二人を相手に仕給ふ様子に、私は怖さ恐しさ、母様に縋り付き、聲を限りに泣いたるに、母様は氣後れ遊ばし、撓む處へ付け入つて、無慘や終に果敢ない御最後、泣き入る私を船底へ、打込んだと思つたが、其の後は夢現、氣を失うて居た所、夫れから浪速の新町とか云ふ、廓へ賣り渡され、遂に流に沈みしが、身の仇親の敵さへ、討つ事ならぬ女の甲斐なさ。彼の海賊の頭の名は、阿波の十郎兵衛とやら、又手下の船頭は、艦九郎とか云ふ男、小耳に残つて居るわいな。夫れから浪速を仕變へられ、遙々下つて化粧坂、辛い勤の其の中でも、敵の事は忘れもせず、年頃心に掛けたれど、今に本望遂げもせぬ、身の不仕合せを思ひ遣り、助けとなつて關平。」と、過ぎ

來し方の物語りに、主従袖を絞り合ふ、泪の中にも三世の奇縁、盡きぬをのみぞ喜びける。傍で聞く伊左衛門、新七夫婦も貫ひ泣き、偕は左様云ふ御難儀の、御身であつたか、痛はしや。是れから皆が力になり、母上様の仇敵、討しませいでなるものか」と、請合ふ中に新七が、

新七「お五歳の年ながら、宜うこそ敵の名前迄、聞いてお置きなされました。其の十郎兵衛といふ者は、先夜此の私が、頼んで非似の役人に、仕立てた悪者。併も又大切な千鳥の香爐を、盗んで逃げた大盗人、様々重なる怨みに怨み。假令彼奴めが雲に分け入り、地に潜り居る術ありとも、引捕へいで措かうか。」と、切齒をなすを長次郎、

長次郎「成程、己も十郎兵衛が、面は篤り見て置いた。殊に先夜手下の中の、漕太とやらの面付も、何様やら見覚えある様なれば、様々に責め苛んだれば、先年船から私を、離れ島へ上らせ置き、其の後で渚様を殺して、貴女を奪ひ取り、遊女に賣つたも彼奴等が業と、明白に知れましたれば、此奴も敵の片割なれば、打殺すは易けれども、大事の前の小事とやら、何を云ふにも上からの、お咎め掛かつておふふねの、お二人のお身のこと、其の明りが立たぬ

前に、若しもの事で私が、人殺しの汚名でも、取つては彼れ是れ六ヶ敷、妨げになる事故、命は取らずに置きましたが、何様で彼奴めも細の魚、天罰遁れず近い中に、刃の錆と消ゆる身体。何事も時節の参るを、お待ちなさつて御座りませ。」

夕霧「何卒敵を討ち課せ、早く安堵して見たいと、私が爲の守り本尊、觀音様を肌身に付け、祈らぬ日とでもない程に、此の御佛のお力でも、押付け本望遂ぐるである。」

長次郎「既に母君渚様が、船の中で被仰るにも、お雪が一代の守り本尊は、觀音様。此の娘が行末願ふ爲、代参にとて彼の島へ、私を遣はされた程に、貴女も御信心御利益が、なくてはなりませうか。今又主従此の通り、名乗り合ふのも佛のお力、此の上共に御信心を。」と、言はれて尙も彌増に、膽に應ゆる有難さに、夕霧守りの中よりも、尊像を取り出し、尙ほ復讐をぞ祈りける。

千々の黄金も居ながらに、遣へば盡る期のあるに、況てや細き貯への、長次郎がかせ世帯、

空しく食ふもの多ければ、斯くてはならじと新七は、兄に語りひ僅かでも、商ひするに如くべからずと、細資本に買ひ出して、小間物を商へば、長次郎は又仕馴れたる、業を賣りても古主をば、氣易く隠匿ひ申さんと、甥の新松誘ひて、辻放下にぞ出でにける。後におさめは忠實に、主に使へて聊も、粗略にせざる氣歡待、立ち草臥れたる走り元、少しの間息休めと、打寛いで喫む煙草、一喫價千金の、春ならなくに冬の日は、暮るゝに早く何時しかに、早黄昏と彼方此方の、森林には打群れて、塙求むる鳥さへも、我が夫鳥と諸共に、仲好ささうに飛ぶものを、鳥にも劣る憂き此の身、斯様して居るは僅にて、可愛い妻にも我が子にも、別れをするかうたてやと、空打眺め思はずも、ほろりと落す一雫、夕の露に紛ひけり。

折柄此處に入り來るは、戀が窪なるくつわの主、垂れ駕籠門邊に下させて、勝手口から差覗き、

くつわや「戀が窪の簀籠屋へ、約束の奉公人の宿は、此處で御座るかな。」と、高聲で訪ふを、おさめは周章で押し止め、點頭きく、聲を潜め、

おさめ「左様言はしやんすは親方さん、宜うこそお出でなされました。併し些と差しあれば、密

となされて下さりませ。」

くつわや「こんだく、承み込んだ。亭主が長の煩ひの、人參代に差詰り、内證で身賣すると云ふやうな譯である。夫れ故奥の一間へ憚かり。」

おさめ「延喜の悪い事計り。左様云ふ譯では御座りませねど、聞かせともない主筋の御方が、彼に。」と、伸び上り、彼方を見れば伊左衛門、夕霧供に一間にて、うつく居眠り居たりしかば、此の間に早くと帯締め直し、豫て覺悟の事なりけん、遺書の文一通を、懐より取出し、人の目に付く仲の間に、捨て置いて涙を拭ひ、

おさめ「些の間の別れでも、新松が嘸尋ねよう。此方の人も戻らしやんしたら、言合せとは云ひながら、不意に今日とは知らしやんせねば、嘸膽が潰れよう。伊左衛門夕霧様、兄さんにも染々と、お暇乞はいたしませぬ。其の書付を御覽じて、萬事を察して下さんせ。」と、前垂れ解いて竿に掛け、庭に昇き込む垂れ駕籠に、乗ればくつわは凜々と、俄に心に勇みが出で、くつわや「さア、早く遣るが宜い。斯様云ふ所へ誰ぞ來れば、又すのこんにやく手間取る。」と、言ひつゝ垂を自身に下し、駕籠を追つ立て歸りけり。

引違へて門口へ、長次郎は新松を伴ひ、歸り來りし其の途端へ、新七も立戻り、新「兄ぢや人、遅いお仕舞ひ、嘸お疲れで御座りませう。大分寒さに身が入つて、日暮の戻りは尚ほ御難儀。まア、内へ。新松も早くふうに暖るが宜い。此のやんちやめを一日三界、大抵なお世話ぢやない。」と、言ふに莞爾々々長次郎、

長次郎「己よりは坊主めが、草臥れて歸る道々、歩行きながら眠り居る。嘸腹も空いたである。内へ上ツて母さんに、飯を早う食はして貰へ。」と、言ふに新松内へ駈け入り、勝手を覗き、新松「母さん、飯が食べたい。」と、言へど答も流し元、水仕に何時も働いた、襦前垂掛け竿に、掛けてあるを新七は、見付けて心に不思議立ち、勝手の方を差覗けど、おさめは影も見せざれば、新松も泣き顔して、

新松「母さん、何處ぢや。」と、おろく、涙。長次郎は仲の間に、落せし文を取上げて、「皆様へ、さめより」と上書讀んで、新七に渡せば、新七封じを押し切り、くり開いて讀み下すに、

遺書へ一筆申上げまらせ候。私夫婦お主伊左衛門さまの、御放埒を止めんと

存じ、非似役人を拵へ、上よりの御咎めと、偽り候其の節、右の骨折り代として、其の者へ三十兩、遣はし候金は、私二度の勤に、戀が逢へ身を賣り候身代に御座候所、お主を欺きし罰に候や、右の手術も空しく相成り、剩へ其者の爲に、夫婦は辛き憂き目を見、今更口惜しく候へども、詮方なく廊より、迎への参り候、日限と相成、是非なく参り申し候。此事打明け申上候へば、彼れ是れ障りに相成るべくと、態と出し抜きまらせ候。只心掛に候は、新松が事、御如才はあるまじけれども、御世話頼み上げまらせ候。此れと申すも、元は忠義の爲に、致し候事には候へども、いすかの嘴と喰ひ違ひ、何事も心にまかせぬが、浮世と諦め、苦界も僅に候へば、やがて御目に懸り候を、楽しみに致しまらせ候。何事も何事も申し遣しまらせ候。あらくめてたくかしく。

と讀み終れば、此の聲を漏れ聞いて、一間の中より立出る、伊左衛門も夕霧も、楮は左様かと呆れに呆れ、不便に思へど今更に、詮方もなく氣の毒は、口に言ひ得ず居たりけり。

新松は彼方此方の、人の顔色見て取つて、早大方を推してや、

新松「母さんが居なければ、坊は否々、飯も食べぬ。寝んねするのも、否々。」と、染々泣くを新七は、慰め兼ねて居たりしを、長次郎は涙ぐみ、引寄せて掻き抱き、

長次郎「尤もぢや〜が、今更何様との手段もない。おとなしうして居やれば、伯父が澤山可愛がり、母さまに逢せてやる。飯食べて父さまに、抱れて早う寝んねしや。利巧者ぢや。」と、賺されて、かいせ作りて長次郎に、縋り付けば新七も、流石に哀れ催せば、夕霧は尙も堪り兼ね、

夕霧「オ、尤もぢや〜。夜は片時離れぬ母さん、夫れ程の仲を引別れ、廊へ行かんすおさめさんの、心の中も何の様に、あらうと思ひやられます。私に乳があるならば、言分はないけれども。」

伊左衛門「是れと云ふも此の伊左衛門が、不了簡から皆起れば、新七に對して面目もない今宵

の仕儀。日陰の身でもないならば、直に身請もなる者を、何を云ふも世間へは、顔出しならぬ口惜しい身の上、やがて騒も治まつたらば、直に身請は濟ませる。」と、身を口惜みてぞ居たりける。

八

昨日の素顔に引變へて、白粉厚い化粧坂、おさめは主の爲にとて、返り咲きなる花の顔、心ならずも二度晴れの、襦の裾引くにさへ、しんき増りて憂や辛や、絹布の夜具に包まれ、一人寝る夜は漫にも、可愛我が子を抱き寝した、夜毎を思ひ出されて、今頃はさぞ此の母を、慕はんものと思ふにも、潤む泪を紛らして、笑に代ゆる口惜しさは、えも云ひ難く胸苦しく、此方は伯父の長次郎、年も足らはぬ新松が、母に別れて何となく、朝な夕な寂しさ、夫れと言はねど脇明けの、布の子の袖に俺ち泣く、哀れさ日々強増せば、常ながら尙ほ慰りて、今日も伴ふ辻放下、人の杜絶に長次郎、

長次郎「これ、新松、もう日も丁度入相頃、押付け仕舞つて歸る程に、おとなしく待つて居や。」

歸りには又例の通り、網傘焼買うてやるぞ。」

新松「アイ、夫れも嬉しいが、私や歸りには母。」と計り、後言ひ兼ねて伯父の顔、見やる目元に差ぐむ涙、

長次郎「オ、夫れ程に慕やる者を、辛抱して父も伯父も、かい暮に逢はせぬのもな、一度逢うたら其の後は、猶々戀しく思ふであらうと、態とに顔を逢させぬ。お主の爲とは云ひながら、僅の金故惨らしい、此様な目を見ると云ふも、何の因果か情ない。澤山に金持つて御座る、伊左衛門様のお宿へは、足踏みならぬ御咎め中、又此方兄弟は、一兩の玉面もならず。世に貧乏ほど、口惜しき者はあるまい。情ない。」と、長次郎も目に溢るゝ涙、取散したる手品の道具、仕舞うて歸る仕度する、側へ踉蹌百杯機嫌、此處ら名打ての僻者、馬方駄六が口甜摺り、酔眼目にて四方を見廻し、

駄六「此の頃評判の手品使ひ、辛い世を渡るとて、其の名も鹽野長次郎、餘り不思議な放れ業、何か可怪な野郎ではあるぞ。生馬の目を抜く程な、名譽不思議な妖術の法なら、大方盗みも廣くてある。」と、喧嘩買はうの悪口を、寄らず障らず長次郎、



長次郎「盗みの所有に計りは、用ひられぬが彼の妖術、陀機尼天の法の名譽。」と、言葉少なに化するも、悪物仲間の廻し者、我が身の上を探り聞き、又商賣の一資本を、工むと見て取る素早の駄六は、莞爾と苦笑ひ、

駄六「夫れ程誇る名法ならば、今己が曳いて居る、此の馬を呑んで見せるか。よもや是れは呑めまい。」と、嘲み笑ふを長次郎、憎さも憎しと心に打笑み、

長次郎「釘なり棒なり刀なり、呑んで見せるが商賣なら、八兵衛ではなけれども、馬でも牛でも嫌ひはない。」
駄六「是りや面白い。見事呑むぢやな。さア、

直に呑んで見い。呑んだら馬は己が損。」と、駄六は、鼻綱手に渡し、困らせる氣を長次郎は、用ひ馴れたる妖術の法、大肌脱いで彼の馬を、兩手にひねくり廻す中、蹴球のごとく小さくなし、頭からぐびぐびと、呑みかゝるを往來の人も、是れは不思議と口々に、彌が上に立集ひ、見居たる中に長次郎、何の苦もなく呑み仕舞へば、駄六も呆れて口あんごり、争ふ言葉もなかりけり。長次郎は夫れ限に、片付けた荷を背負ひつゝ、新松連れて立歸れば、集ひし諸人崩れ立ち、「今の手に驚いた。何喰はぬ顔とは彼の事、儲も不思議」と皆散々。

駄六は後にあけらほん、

駄六「月夜に釜とは此の事だ。忌々しい腹の立つ。彼奴が上を探らうと、思うて浮かしくよしないことに、大事な馬をしてやられ、え、鈍臭い。」と、咳きしが、俄に何か思ひ付き、長次郎が跡追うて行く、足も踵踏々々ひよろ／＼して、

駄六「ヤイ、馬盗人の長次郎、今呑みアがつた馬戻せ。戻しアがれ。」と、たぐり付く。

長次郎「醉漢とは云ひながら、法外な盗人呼ばはり。品に因つたら聞き捨てならぬ。元此の馬は其方から、呑んで見いと呑まして置いて。宜う思うて見たがよい。骨の折れる仕事させ、

悪口言はれてなる者か。戻せと言うても呑んだ馬、何様戻されるものかい喃。」

駄六「汝れが世話やく二人の奴等は、伊左衛門夕霧に極つた。目の付いて居るお尋ね者、引括つて連れて行けば、一かどの褒美になる。己が馬を戻しアがらにや、二人の奴等を引括るが、夫れでもまだ戻さぬ氣か。」と、胸元取る手を逆に返し、突き飛ばして翻筋斗打たせ、

長次郎「手荒く來れば手荒に受ける。何と是れでも懲りぬか。」と、言ふに、駄六は漸う這ひ起き、肩骨腰骨撫で擦り、顰面でも尙ほ負けぬ氣、

駄六「呑ませた事は呑ませたが、彼の馬は三十貫で、親方が買った馬。彼がなくては口が干る。命代りな大事な馬、戻さにやでんどで受取る。投げられ賃も取つてやる。」と、又もむしやぶりつく／＼と、長次郎は見て打笑ひ、

長次郎「左様權柄に言はずとも、返して呉れとの頼みなら、返すまいものでもない。」

駄六「頼むの引くのはいらぬこと。腕盡で取つて見せる。」と、又打ち掛るを投げ退け蹴退け、息の音の止まる程、打つて／＼打ちのめされ、

駄六「最早叶はぬ。許せ／＼。見掛に似合はぬ強い奴。」と命から／＼逃げ行くを、長次郎は擲

揄口、

長次郎「馬を戻すぞ、曳いて行け。腹一杯打ちのめしたら、もう己も堪能だ。さア請取りに歸つて来ぬか。」と、呑んだと見せたる其の馬は、側近くある明店の、軒の下より曳き出し、長次郎「取りに来られにや此方から、うつりはなければ戻してやる。確か何かの講釋で、聞きはつた齊國の、管仲とやら云ふ唐人が、後前知れぬ雪道を、馬で我が家へ歸つたさうな。年頃馴れた駄六が此馬、汝れが宿へ、さア歸れ。」と、尻打ち叩けば逸散に、砂を蹴立て、駆けり行く。

九

新七は小間物の商ひ、仕舞うて戻り道、世間の噂ほの聞けば、伊左衛門は町人に、似合ぬ奢と御咎め、又夕霧は大切の、香爐を奪ひ隠せし由、過ぎし折曲六が、欺き書せし自筆の書付、己れが帯に縫ひ込め置きしを、其の證據にとて悪人輩が、訴へしゆゑ夕霧は、盜賊に同じ疑ひ掛り、共に厳しくお尋ねにて、彼を隠匿ひ置く者あらば、同罪との由を聞く胸、先づぎ

つくと塞がりて、如何はせんと思案の組手、漸う我が家に立戻れど、明ら様にも話されず、其の夜は己が胸にのみ、包めばいと苦しくて、明くる朝兄長次郎は、例の如く出で行きしが、新松は如何してか、父の側を離れもやらで、此の日は、家に遊び居る。新七は様々と、思ひ廻せばあるにもあられず、主人の罪を身に引受け、我が身腹切り死ぬならば、罪を購ふ譯ならん。又夕霧が盜賊の、汚名を受けしは間違ひにて、寶の香爐は盜賊の、阿波十郎兵衛に、奪ひ去られし由を、委しく認め残しなば、お二人の明りは立たんと、一筋に思ひ詰め、右の様子を書き残し、夫婦の知らぬ其の中に、腹切り死なんと覺悟を極めて、出刃包丁をおつ取りて、諸肌押し脱き我と我が、腹へぐつと突き立つれば、覺悟はしぬれど苦痛の呻吟。新松は聞き付けて、

新松「父様、腹でも痛いのかや。せつなか坊が押してやる。」と、立寄り見れば、血汐の紅。新松「お前は何故死なしやる。死んでは否ぢや。」と、喚く物音を聞き付け、伊左衛門夕霧も走り出で、こはそも如何にと呆れしを、手負は痛手に屈しもやらず、仔細備に物語れば、伊

左衛門は吐息を突き、

伊左衛門「家來の身とは云ひながら、一度ならず二度までも、我が身の爲に盡す忠義は、忘れは置かぬ。忝ない。さりながら、おさめには身を賣らせ、又其方には、大事の命を捨てさせて、主でも我の身は立たぬ。まア、何様したら宜からう。」と、歎けば共に夕霧も、

夕霧「返すくも御夫婦の、厚い忠義に我々を、思ふ心は嬉しけれど、身を賣らせ又命まで、捨てさすとは何事ぞ。夫れに付けても可憐しいは、此の子の上であるわいな。母御には生き別れ、父御には死に別れ。今日から叔父様便とは、え、慘らしい。」と、かき抱くを、新七は熟々見やり、

新七「兄長次郎が戻りましたら、私が此の成行の、仔細はお話し下さりませうが、廓に居る女房めに、末期の様子を知らせぬのも、何とやら心残り。此の坊主めを戀が窪まで、一人遣し、おさめに様子を知らせたい。お二人様、何卒して新松めを、廓へやつて。」と、言ふのも次第に舌強ばり、せぐり苦しき息使ひ、争ひ兼ねて伊左衛門、

伊左衛門「其様なら遣りは遣らうけれど、幼い子には手張つた道、放してやるのも氣遣ひぢや。

何様か仕様はない事か。」と、打案ぜしが心付き、

伊左衛門「幼けれども坂東順禮、同行のある體にして、遣つたならば物貰ひと思つて、誰も手は出すまい。」と、言ふに新七打點頭き、喜ぶ體にて女房の許へ、届くる文取出し、物言ひたげには見えながら、最早叶はず近付く致死期。詮方なくて伊左衛門、新松に言ひ教へ、

伊左衛門「父の様子は云々と、母に逢うて話すべし。また、此の文を手渡しせよ。廓の様子は云云。」と、委しく教へ、笈摺には、有り合ふ白布茜染、夕霧が三針半、着せて出せば新松は、おとなしやかに聞き受けて、父に心は残れども、母に逢ふのが嬉しくて、涙ながらに出で行けど、兎角後を見返りの、柳の巷指して行く、幼姿ぞ哀れなる。影見えぬ程になりぬれば、手負も今は斷末魔、程なく息は斷えにけり。

十

夕暮は何處も物の哀れにて、淋しさ増る冬枯も、花の廓は黄昏の、頃より分けて賑ひつ、引變りたる別世界、人間界の樂みの、一と極めし場所なれや、簀龜屋の店前に、新造禿寄り